

(指令) 伺之通 同十一月廿六日

一 神佛夢想等ノ名義ヲ以テ施藥スル者ハ賣藥取締ニモ差響キ衛生上妨害不悞ニ付當廳限リ禁令ヲ施シ可然哉(東京府)

(指令) 書面之趣聞届候條禁令可届出事 九年十一月十五日

一 藥劑施與ノ儀流行病有之際消毒藥トシテ石炭酸水ヲ施與スルノ類臨機取締法ヲ設ケ一時差許スハ格別其他賣藥規則外ヲ除ク外ハ一切差止メ可然哉(廣島縣)

(指令) 伺之通

但免許ヲ得タル賣藥ヲ相對施與スルハ不苦儀ト心得ヘシ 十三年六月一日

一一 昨年施藥ノ儀聞届賞益御下附方及具申候處御指令但書ニ向後消毒藥并臭止藥ノ外施與聞届サル儀ト可相心得トアリ仍テ他ノ施藥ハ一切聞届サル儀ト存候得共爰ニ免許醫ヨリ貧困病者ニシテ醫師ヲ求ムル能サル者へ施療致度旨願出ル者アリ聞届ル上ハ自然施藥含有スル次第ニ付右等ハ御指令外ト見做シ差間ヘサル儀ト存候云々(石川縣)

(指令) 伺之通 同九月十八日

(参考)

内務省衛生局報告 十三年七月十五日

賣藥營業人ヨリ請賣願人へ相渡候官許鑑札寫ヲ便宜ノ爲彫刻スルニ當省及本局等ノ印影マテヲ併セ刻スルモノハ有之間敷候得共萬一心附サル者アルモ難計ニ付爲念此旨報告ス

大政官 第三十二號 十四年四月廿六日

府縣

賣藥請賣鑑札並行商鑑札製造費ノ儀ハ自今明治十三年四月第十六號布告第三條第七項ノ内ヲ以テ支辨スヘシ此旨相達候事(第十六號布告第三條第七項ノ地方稅ヲ)

(内務省 乙第三十二號 十年三月十二日

府縣

本年一月太政官第七號賣藥規則公布相成候ニ付テハ左ノ手續書及書式雛形ニ照準取扱可申此旨相達候事

一一 昨明治八年七月以降當省ニ於テ下附候賣藥鑑札ハ遐テ相達候迄免許發賣共當分書替爲願出ニ不及規則公布後相渡候鑑札同様相心得ヘシ

一 前條ノ鑑札所持ノモノ營業年季ハ其鑑札ニ記載ノ月ヨリ起算スヘシ尤税金ノ儀ハ本年分

ヨリ徴收スヘキニ付昨九年マテノ分ハ納メシムルニ及ハス

但鑑札料ハ総テ上納爲致定期納附ノ節勘定帳ニ其區分チナスヘシ

一營業鑑札請賣鑑札ハ所持人ノ居家ニ限リ營業ノ權アル者ニ付別戸支店等ニ於テハ別ニ其居住人ニ於テ鑑札ヲ所持スルニ非サレハ營業スルヲ得ヘカラス。二十年七月内務省乙第六十五號ヲ以テ追加)

(四五ノ二項略ス)

一賣藥營業者并ニ請賣者免許看版ハ左式ノ通製セシムヘシ

堅 三 尺

寸法同上

免 賣藥營業

詞 四六

免 賣藥請賣業

一税金并諸鑑札料納附ノ節ハ上納證ヲ添ユルノミニシテ勘定帳ハ一ケ年取束ヲ毎年八月三十一日限リ該地差立大藏省租稅局ヘ進達スヘシ(乙第六十五號改正)

但書略ス

一行商鑑札ハ各管廳ニ於テ雛形ノ通之ヲ製シ願人ニ下附スヘシ尤行商スル藥劑ハ其方名ヲ

一々鑑札ニ記載スヘシ

但一人ニシテ數人ノ藥劑ヲ行商スル時ハ方數ニ拘ハラヌ營業者異ナル毎ニ鑑札ヲ別製シテ之ヲ渡スヘシ

一(略ス)

一(十四年四月内務省乙第廿五號ヲ以テ削除)

一賣藥營業稅并諸鑑札料上納勘定帳雛形

明治何年七月ヨリ同何年六月迄賣藥營業稅并諸鑑札料仕上勘定帳

一金何程

營業稅

一金何程

營業鑑札料

此譯

此譯

從來營業者何人

人員何人

此藥劑何方

藥劑何方

新規營業者何人

鑑札何枚

此藥劑何方

人員何人
藥劑何方

總計金何程

右者明治何年 一月ヨリ六月
七月ヨリ十二月迄賣藥營業稅并鑑札料書面之通候也

年 月 日

賣藥營業願書式

明治八年當省乙第九十八號達鑑形ニ照準
スヘシ(九十八號達鑑形左ニ出ス)

賣藥檢查御願

一方名

一劑ノ量 何藥 量目何程 何藥 同何藥 同

以上幾味調合或ハ丸散トシ幾貼ニ分テ或
ハ幾粒トナシ幾粒ヲ一包トナシ一度或ハ

十一ノ十八

一金何程

此譯

金何程

營業鑑札料

鑑札書替再渡料

官氏名印(乙第六十五號及乙第廿五號改正)

賣藥改正願書式 用紙美濃紙

賣藥改正願

府 大小區國郡村
縣 大小區國郡町番地

營業人 族籍 氏名

一方名

藥品 分量 製法 用法服量 功能

右者何年月日御檢查濟鑑札御下渡營業仕候
處今般何々之廉左之通改正仕度御差支無之

候ハ、鑑札御書替被下度此段奉願候也

一改正ノ廉ヲ詳記スヘシ

年月日

願人

氏名印

區長 或 醫務取締 氏名印

管轄廳長官氏名宛

賣藥請賣鑑札雛形 用紙西洋紙銅版摺

雷紋 五寸一分

衛生

長

賣藥請賣許可之證

一方名 一同 一同

一同 一同

右請賣營業間届候事

明治 年 月 日

內務省 印務

十一ノ十九

一日ノ用量大人小兒ノ區別等其用法詳細
一主治功能詳細

右ハ從來發賣渡世仕來リ候或ハ此處新ニ調

製發賣仕度奉存候間御檢查ノ上御差支モ無

御坐候ハ、免許鑑札御下渡被下度依テ製劑

相添此段奉願候也

府 縣 華士族 或ハ平民

年月日

大小區村名番號

本人

姓名印

醫務取締 或 區戶長 姓名印

府縣長官姓名宛

賣藥營業鑑札雛形略ス

賣藥請賣鑑札願書式 用紙美濃紙

賣藥請賣願

一方名 一同 一同 一同 一同

右營業人 府 大小區國郡村 番地

族籍 氏名

但營業者異ナレハ縱令一方タリヒ必ス

各營業者ノ族籍住所氏名ヲ上ノ例ニ倣

ヒ之ヲ區別シテ書記スヘシ

右之賣藥幾方今般請賣仕度依テ別紙營業者

候也

候也

府 大小區國郡村 番地

年 月 日 請賣願人 族籍 氏名印

管轄廳長官氏名宛

賣藥請賣約定書

一方名 一同上 一同上 一同上 一同上

右者何某ノ官許ヲ得タル賣藥ニシテ今般何

某請賣可致示談相整ヒ候ニ付請賣者ニ於テ

請賣鑑札ヲ願受ケ營業者ノ製調シタル賣藥

ヲ取次販賣致スヘシ然ル上ハ營業者鑑札免

許期限内ハ總テ賣藥ニ關スル御規則及御達

ノ趣旨ヲ遵守シ不正之所業致問敷候依テ約

定書如件

府 大小區國郡村 番地

年 月 日 賣藥營業人 族籍 氏名印

同

賣藥請賣人 族籍 氏名印

外雷紋

内唐草



裏

賣藥行商鑑札雛形 用材繪

豎三寸五分 厚三分

賣藥行商許可之證

府 族籍

賣藥營業何誰賣子

苗字 氏名

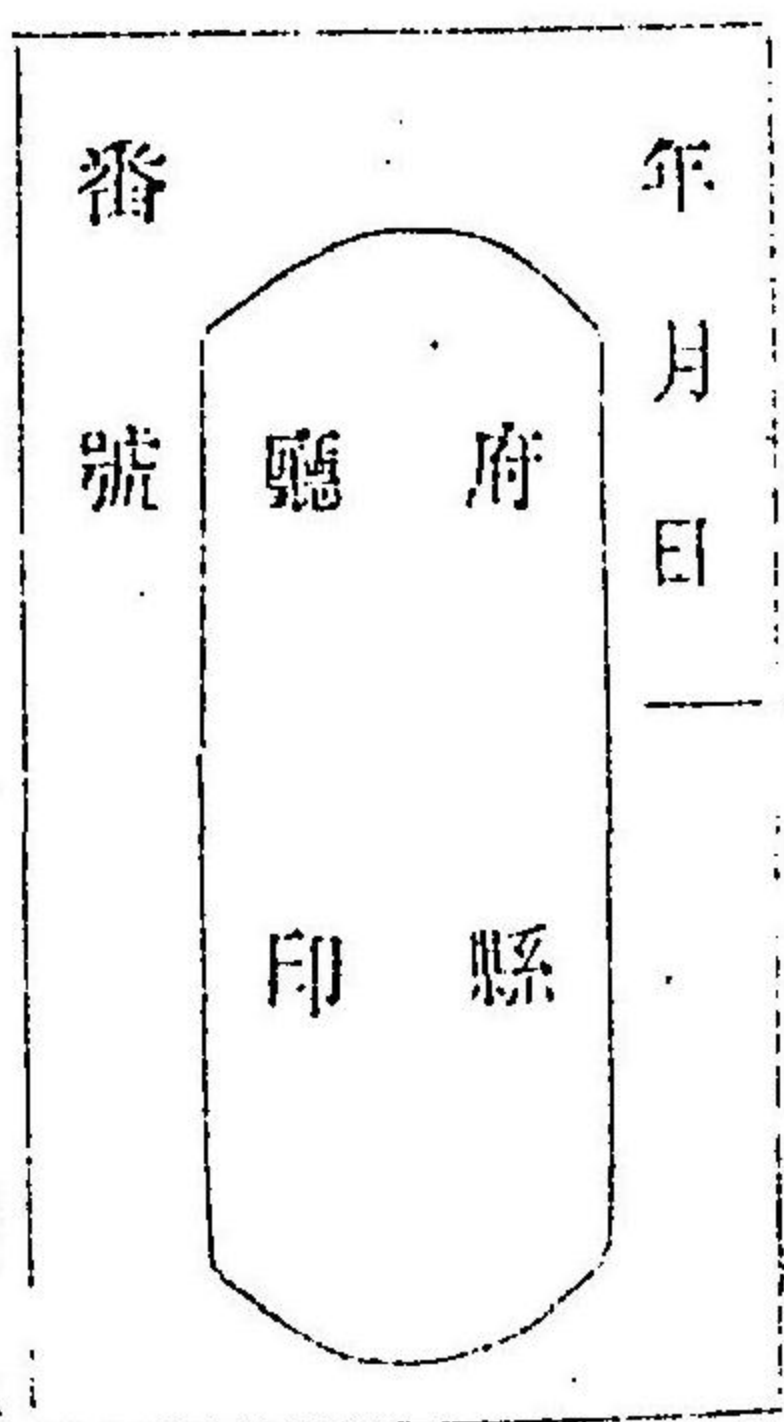
一何湯 一何丸 一何散

一何膏 一何丹

右行商開届候事

明治三十四年

裏



幣印

一賣藥營業鑑札滿期書替願書式用紙

賣藥營業鑑札滿期御書替願書

府 大小區國郡村 番地

營業人 族籍 氏名

一方名

藥品分量 製法 用法服量 功能

但藥方數種アル時ハ上ノ例ニ從テ一々連書スヘシ

右者何年月日御檢査濟鑑札御下渡營業仕候處

來何月滿期相成猶引續營業仕度別紙鑑札幾枚

十一ノ二十一

賣藥營業鑑札并請賣鑑札 遺失之節書替願書
式用紙同上

賣藥營業鑑札 或 賣藥請賣鑑札 遺失
ニ付御書替願

府 大小區國郡村番地

賣藥營業人 族籍 氏名

一方名

賣藥請賣鑑札ナレハ左之通認ムヘシ

府 大小區國郡村番地

賣藥營業人 族籍 氏名

一方名

右請賣人 同

返納仕候間御詮議之上御差支無之候ハ、御書
替被下度此段奉願候也

年月日 願人 區長 或 醫務取締 氏名印

管轄廳長官氏名宛

賣藥營業鑑札讓渡願書式 用紙同上

賣藥營業鑑札讓渡願

府 大小區國郡村番地

營業人 族籍 氏名

一方名

藥品分量 製法 用法服量 功能

但賣藥數種アル時ハ上ノ例ニ從テ連書ス
ヘシ

右者何年月御檢査濟鑑札御下渡營業仕候處今
般府 族籍何某ヘ示談ノ上讓渡申度依テ所持ノ

族籍 氏名

右者何年月 確ト記應セサレハ 御下渡被下候
概略ヲ記スヘシ

賣藥營業鑑札 何月日何々ノ事故ニテ 遺失仕
或ハ請賣鑑札

候間更ニ御下渡被下度此段奉願候也

年月日

賣藥營業人 或ハ請賣人 氏名印

區長 或 醫務取締 氏名印

管轄廳長官氏名宛

〔府縣伺〕

一營業者請賣者ヨリ行商鑑札願出候節該鑑札表面離形ニ賣藥何誰賣子ト有之廉左ノ通記
載可然哉〔大坂府〕

賣藥營業

營業者自カ 苗字名
ヲ行商ノ分 賣藥營業何誰請賣人
大坂府族籍

鑑札返納仕候間御書替被下度此段奉願候也

府 大小區國郡村番地 族籍 氏名印

年月日 同 賣藥鑑札主 族籍 氏名印

右讓受人 氏名印

鑑札主 區長 或 醫務取締 氏名印

所住ノ 區長 或 醫務取締 氏名印

讓受人 區長 或 醫務取締 氏名印

所住ノ 區長 或 醫務取締 氏名印

管轄廳長官氏名宛 但讓受人ノ管轄廳ニ出
鑑札主ノ管轄廳ヘハ
其旨ニ届
出ヘシ

營業者ヨリ直チニ派出サス
ル所ノ賣子ノ分ハ離形ノ通

賣藥營業何誰請賣人
大坂府族籍何誰賣子

請賣者自カ
ラ行商ノ分
(指令)伺之通

苗字名

請賣者賣子ヲ以テ
派出シ行商ノ分

苗字名

十一ノ二十四

但營業者自カラ行商スル鑑札へモ其族籍ヲ記載可致十年四月十七日

一行商鑑札ハ木製ノモノ可相用御成規ニ付十年四月二日付テ以テ行商者遠慮ノ際不便不
勘方數夥多ノ向ハ紙製ニ致度云々相伺候處成規ノ通木製ノ外難開届云々御指令相成候
處本縣ノ如キ賣藥者最モ多ク隨テ行商者モ一人ニシテ數十方ノ鑑札ヲ以テ遠齎スルモ
ノアリ實際不便不勘困難ノ趣追々申立候就テハ一人ニシテ鑑札十五枚以上所持スルモ
ノニ限り紙製ヲ代用爲致度尤モ書職方ハ御達籙形ノ通製シ焼印ハ朱印ニ改メ度有ハ御
成規アリ且前御指令ノ趣モ有之候得共前陳不得止儀ニ付重テ相伺候云々(石川縣)

(指令)再伺之趣開届候事十四年六月十三日

一藥湯營業者戸外ニ掲クル看板ハ(免許藥湯營業)ト書載可然哉(宮城縣)

(指令)伺之通十年十月十九日

○内務省 乙第六十五號 十年七月十三日

府縣

本年三月内務省乙第三十二號ヲ以テ相達候賣藥規則取扱手續書中左之通改正追加候條此旨
可相心得且収稅上ニ關スル事件ハ自今總テ大藏省へ可伺出此旨相達候事(改正前ニ出ツ)

○内務省 乙第七十號 十一年十一月八日

府縣

本年九月太政官第七號ヲ以テ賣藥規則改正公布相成候ニ付テハ左ノ手續並籙形ニ照準シ
取扱可申此旨相達候事

賣藥取扱手續

- 一鑑札料紙ハ別紙籙形之通相製シ當省ヨリ相渡ヘシ
- 一右料紙ハ凡積ヲ以テ每年半期分宛一月七月兩度ニ受取方當省へ申立ヘシ
- 一管廳ニ於テ鑑札ニ記スヘキ方名姓名番號等籙形之通記入押印之上下渡ヘシ
- 一家畜牛馬等ニ用フル賣藥鑑札ハ赤輪廓ノ分ヲ用フヘシ
- 一免許期限内ニ於鑑札書換ヲ要スル分ハ其事由並書換ナル年月日ヲ鑑札裏面ニ記入下附スヘシ
- 一賣藥廢業鑑札是迄當省へ返納致來候處自今其儀ニ及ハス管廳ニ於テ消却スヘシ
- 一賣藥請賣行商共已後明細簿差出ニ不及左ノ表式ニ準シ二月八月兩度ニ當省へ差出ヘシ

十一ノ二十五

○内務省 乙第廿五號 十四年四月三十日

府縣

本年^四太政官第二十六號公布相成候ニ付テハ明治十年^三當省乙第三十二號達賣藥取扱手續申請賣鑑札料及行商鑑札料ノ廉并行商鑑札製作費云々ノ一項削除候條更ニ左ノ條項ニ照準シ取扱可申此旨相達候事

一賣藥請賣及行商ニ地方稅ヲ賦課スルキハ本年府縣會於テ其稅額ヲ議定シ十四年度ヨリ徵收スヘシ

一請賣鑑札料紙ハ自今大藏省ヨリ配賦不致候條各管轄廳ニ於テ從前雛形ノ通製造スヘシ

但大藏省ヨリ下附セシ鑑札所持ノモノハ別段引替ニ及ハス且本年分豫算ヲ以テ受取候料紙未用ノ分ハ同省ヘ返納スヘシ

一請賣者ニテ其賣藥ヲ調製候儀ハ無之筈ニハ候得共或ハ營業者ノ藥方分量ヲ傳ハリ調製候向モ有之候ハ、改正規則第廿三條ノ罰則ニ相當ルヘキモノニ付速ニ調製相止メ更ニ賣藥營業爲願出候様取計フヘシ

〔參考〕

○太政官 第四號 十一年二月十五日

船車賣藥牛馬賣買等税金納期左ノ通明治十一年ヨリ施行候條此旨布告候事

但從前布告達中此布告ニ矛盾スル條目ハ總テ廢止ト心得ヘシ

一船(商船解漁船等)車、賣藥、牛馬賣買等ノ税金前半年分ハ一月二十二日限後半年分ハ七月三十一日限其管轄廳ヘ可相納事

但書略ス

○内務省 乙第四十七號 十一年六月三日

府縣

各府縣於テ一時博覽會相開候節列品中酒類烟草賣藥等販賣方成規有之物品場中於テ賣渡ノ儀ハ其出品人兼テ右營業免許ノ者ニ候ハ、別段受賣免許鑑札申受ニ不及尤烟草ノ儀ハ假令見本品タリ共需求ニ應シ賣渡候節ハ成規ノ通印紙貼用可致此旨相達候事

但開場中一時賣物店開設間屆候向モ本文ニ準シ受賣鑑札申受ニ不及候得共何營業免許人何某ト記載セル木製ノ看板ヲ見易キ場所ヘ必ス揭示可致事(大藏卿連名)

○内務省 番外 十一年十一月十三日

府縣

本年九月太政官第二十七號公布ヲ以テ賣藥規則改正ニ相成候ニ付テハ當省ニ於テ是迄主任者取扱之爲メ假定置候賣藥檢查心得書相渡候間右ニ參照シ檢査禁許可取計此旨相達候事

但不了解之儀有之候ハ、衛生局へ稟議可致事

賣藥檢查心得書

世ノ所謂賣藥ナルモノハ無稽ノ方劑十ノ八九ニ居リ假令間々有効ノモノナキニ非スト雖モ俗間ノ之ヲ服用スルモノ用捨ノ心得ナキヲ以テ到底其効用以テ其弊害ヲ償フニ足ラス故ニ有害ノ方劑ハ勿論危險ノ虞アルモノハ之ヲ禁シ無害ノモノハ無能ト雖モ當分ノヲ許可シ毎五年ノ期ヲ逐ヒ漸次淘汰改正スルヲ要旨トシ毒藥配伍ノモノハ内外用ヲ問ハス一切之ヲ禁シ劇藥ハ其用方分量ニ因テ不取締ノ虞ナキモノニ限り之ヲ許可シ和漢藥ノ性効毒劇藥ニ比スヘキモノハ之ニ準シ禁許ヲ定ムル等今其禁免取捨ノ目的トナスヘキ數款ヲ掲ケ以テ檢査者ノ心得トナス左ノ如シ

一毒藥取締規則及ヒ衛生局雜誌第六號毒藥部ニ記載ノ藥品並ニ左ニ揭示スルモノハ分量

用法ヲ論セス外附藥ニ至ル迄一切之ヲ禁ス第六號雜誌ハ第七項ニ出ス

- 雄黃 水銀 全蝸
- 甘遂 青蒙石 靈砂
- 綿實

一劇藥ハ分量用法ニ依リ危險ノ虞ナク不取締無之ト認ムルモノハ之ヲ許スコアリ其品類分量左ノ如シ

ヒヨスエキス	五 氏	ヨシウム鐵	三 氏
ヒヨス葉	五 氏	硫酸加里	二 匁
ブロームカリウム	八 氏	ヨードカリウム	八 氏
ラクチユカリウム	六 氏	吐根	一 氏
ヤーラツパ下劑トシテ	六 氏	同 脂	一 氏巴下
コロシクム酒	半 氏	吐根酒	三十滴
サントニーチ	三 氏	次硝酸ビスミット	六 氏

但シ連日服用ヲ禁ス

以上大人内服一日ノ極量

但シ十五歳以下ノモノハ之ヲ分テ三等トナス即チ十五歳以下八歳迄ハ半量七歳以下四歳迄ハ三分ノ一三歳以下ハ七分ノ一

- | | | | | |
|----------|-----|-----|----------|-----|
| 硝酸銀 | 點眼劑 | 一 氏 | 蒸餾水 | 一 汚 |
| 醋酸鉛 | 點眼劑 | 二 氏 | 全 | 一 汚 |
| 樟酸亞鉛 | 點眼劑 | 全 | 全 | 一 汚 |
| ヨヂウムチンキ | 藥湯 | 外附劑 | | |
| ケレンチソート | 齒痛 | | 少量配伍スルモノ | |
| 過マンガン酸加里 | 外用 | | 番木鱉膏藥 | |
| 鉛丹 | 膏藥 | | 烏頭膏藥 | |
| 密佗僧膏藥 | | | 石炭酸膏藥 | |
| 綠青膏藥 | | | 硫酸銅膏藥 | |
| 以上外用 | | | | |

一劇藥ノ外注意ヲ要スヘキ品類

天南星 但丸散劑ニ配合スルヲ禁ス

唐土 但膏藥ノ外内用ヲ禁ス

鼠利子 日量

續隨子 全

牽牛子 全

以上六味分量過多ナルキハ再調ヲ命シ之ヲ減少セシメタル後之ヲ許シ若シ一方中ニ六味ノ中二味以上ヲ配合シタルモノハ之ヲ許サス

- | | | | |
|----|-----|-------------------------------------|-----|
| 附子 | 四 氏 | 金硫黃 | 一 氏 |
| 龍腦 | 二 氏 | | |
| 麝香 | 二 氏 | 但麝香ヲ配伍スル功能書中産前後ノ病症ニ用ユル廉アルトハ其廉ヲ削除セシム | |
| 鉄粉 | 一 分 | 綠礬 | 五リン |
| 大黃 | 三分 | 蘆薈 全 | 八リン |

旃 那 三 分

以上丸味記載ノ分量ヲ超過セサルモノハ之ヲ禁セス

辰 砂 二 氏 銀 朱 二 氏

以上二味ハ一種ノ舍密抱合ニ成ルモノニシテ血中ニ吸収スルヲ鮮ク無害ニ屬スルヲ以テ分量用法功能書ニ照シテ不都合ナキモノ及ヒ丸藥衣液等ニ用ユルハ之ヲ禁セス

附總テ丸藥ニ金銀箔ヲ以テ衣被トナスハ妨ケナシト雖モ鉛丹錫粉眞鍮箔等ヲ用ユルモノハ之ヲ除カシム

一配伍ノ藥劑ハ劇劑ニ屬スルモノニ非ス或ハ劇藥ナルモ其分量許用ノ度ヲ超過セスト雖モ數品ヲ合シ劇劑トナリ或ハ墮胎等不良ノ事ヲ目的トナスモノ(朔日丸或ハ坐藥ノ類)ハ内外用ヲ論セス一切之ヲ禁ス

一水藥ハ民間服用ノ際滴量ヲ定ムルヲ尤モ難ク分量ヲ誤リ危害ヲ招クノ虞アルヲ以テ劇藥配伍ノモノハ其用量ヲ藥瓶並ニ能書ニ詳記セシメ一瓶三日ノ量ヲ過クヘカラス但劇藥ノ量ハ一瓶ヲ頓服スルモ大害ナカラシムト要スヘシ

一從來梅毒ヲ療スル多ク毒藥ヲ用ヒ多ク水銀製劑ヲ伍用ス依令水銀劑ニ非サルモ其用法危險ナルヲ以テ藥品ノ劇微ヲ論セス一切之ヲ禁ス

一專ラ滋養ニ供スル品類或ハ夏日飲料或ハ化粧水齒磨粉等ノ如キ間々一二功能ヲ附シタルモノアルモ素ヨリ治病ヲ主トスルモノニ非サルヲ以テ賣藥規則外トナスヘシ

一海水或ハ鑛泉ヲ採酌運搬シテ病者ヲ浴セシムルハ賣藥規則外タルヘシト雖モ鑛泉中ノ固形物俗間湯ノ花ト唱ル類或ハ幾分ノ鑛泉ヲ混合シ或ハ藥物ヲ加ルモノハ既ニ全ク其原泉ト性質効用ヲ異ニシ人造ニ歸スルヲ以テ別ニ湯名ヲ附シ規則ニ從テ鑑札ヲ受ケシム

一鼠取蠅取藥等賣藥規則外タリト雖モ動物ヲ殺ス毒藥ナルヘキヲ以テ誤テ人命ヲ傷害スルノ虞アルニツキ取締緊要ナリトス故ニ誤用ノ害ナキヲ確認スルニ非サレハ販賣ヲ許ス可テス

○大藏省 乙第十二號 十二年二月廿六日

府縣

從來酒類ニ藥品ヲ配伍シ販賣候者ハ賣藥免許鑑札下付致來候向モ有之候處右ハ醫藥ニ供スル別紙記載ノ品類ヲ除クノ外酒類ヲ和シ飲料ニ供スルモノハ假令藥品ヲ配伍スト雖モ

總テ酒類稅則ニ據リ課稅可致就テハ是迄下付致居候鑑札ハ返納致サセ可申此旨和達候事
但鑑札返納ノ上ハ其品目内務大藏兩省ニ届出ツ可シ

精劑

酒精 再餾酒精 ホフマン氏鎮痛液 甘鹽精 甘硝石精 礮砂精 礮砂加阿魏精 複方
白芷精 アチース精 芳香精 芳香礮砂精 複方アルモラシア精 カヤフーテ精 龍腦
精 コロ、フォルム精 桂皮精 枸橼皮精 山蕎菜精 蟻精 杜松子精 複方杜松子精
ラトヘンデル精 複方ラーヘンデル精 檸檬精^{レモン} 複方マスチツク精 英國縮葉薄荷精
椒性薄荷精 薄荷精 ミールシア精 肉豆蔻精 迷迭香精 石鹼精 セルヒルリ精 芥
子精 雙鸞菊精 荳蔻精 失鳩答精 實斐答利精 非沃斯精 葛苳精 番木鱉精 アル
ニカ花精 コロシクム實精 橙皮精

丁幾

亞爾蘇丁幾 複方亞爾蘇丁幾 芳香酸丁幾 雙鸞菊丁幾 蘆薈丁幾 複方蘆薈丁幾 (蘆
薈沒藥丁幾) 苦味丁幾 ホーメ氏苦味丁幾 アルニカ丁幾 芳香丁幾 阿魏丁幾 亞的
兒製阿魏丁幾 橙皮丁幾 新鮮橙皮丁幾 バルサム丁幾 荳蔻丁幾 安息香丁幾 複方
安息香丁幾 ビュッコ丁幾 沉香丁幾 コロンボ丁幾 複方龍腦丁幾 亞的兒製龍腦丁
幾 荳蔻丁幾 亞的兒製荳蔻丁幾 番椒丁幾 益智丁幾 複方益智丁幾 カスカリルテ
丁幾 亞的兒製カストル丁幾 カナダ産カストル丁幾 シベリア産カストル丁幾 阿仙
藥丁幾 褐色機那丁幾 赤色機那丁幾 複方機那丁幾 キノイシチ丁幾 キラタ丁幾
複方コロロホルム丁幾 黃色機那丁幾 桂皮丁幾 コーシチール丁幾 コルシクム丁
幾 コロシント丁幾 失鳩答丁幾 サフラン丁幾 畢澄茄丁幾 (キユベバ丁幾) 楓棹丁^{メルロ}
幾 石鹼丁幾 複方アルモラシア丁幾 シキタリス丁幾 亞的兒製シキタリス丁幾 續^コ
隨子丁幾^{ソコルビ} 醋酸鐵丁幾 鹽化鐵丁幾 亞的兒製鹽化鐵丁幾 林檎酸鐵丁幾 沒食子丁幾
ゲンチアナ丁幾 複方ゲンチアナ丁幾 癩瘡木丁幾 揮發性癩瘡木丁幾 (礮砂加癩瘡木
丁幾) 綠黎蘆丁幾 ヘレニー丁幾 忽布丁幾 ヒオス丁幾 ヨシウム丁幾 複方ヨシウ
ム丁幾 脫色ヨシウム丁幾 吐根丁幾 ヤーラツパ丁幾 複方ヤーラツパ丁幾 キノ丁
幾 ラタニア丁幾 ラリシス丁幾 複方ラーヘンデル丁幾 (ラーヘンデル丁幾) 檸檬丁^{レモン}

幾 ロベリア丁幾 亞的兒製ロベリア丁幾 リユプリニア丁幾 肉豆蔻丁幾 亞的兒製
 肉豆蔻丁幾 麝香丁幾 沒藥丁幾 揮發鹽化鐵丁幾（ベスチユヘフ氏神經丁幾）番木鱉
 丁幾 阿片丁幾 安息香阿片丁幾 舍電華謨氏阿片丁幾 單阿片丁幾 脫臭阿片丁幾
 礆砂精加阿片丁幾 地榆丁幾 複方松芽丁幾 ビレトリユム丁幾 括失亞丁幾 規尼涅
 丁幾 礆砂精加規尼涅丁幾 ヤーロッパ脂丁幾 大黃丁幾 水製大黃丁幾 酒製大黃丁
 幾 大黃加旃那丁幾 サビナ丁幾 麒麟血丁幾 海葱丁幾 加里加海葱丁幾 麥奴丁幾
 遠志丁幾 旃那丁幾 セルペンタリア丁幾 複方スピランナス丁幾 蔓陀羅華丁幾
 亞的兒製馬錢子丁幾 琥珀丁幾 シュンブル丁幾 ナユヤ丁幾 トリエタナ丁幾 トキ
 シコデンドリ丁幾 纈草丁幾 亞的兒製纈草丁幾 礆砂精加纈草丁幾 グアニルラ丁幾
 生姜丁幾 強生姜丁幾 亞的兒製葛若丁幾 亞的兒製失鳩答丁幾 亞的兒製非沃斯丁
 幾 亞的兒製龍腦丁幾 白黎蘆丁幾

酒劑

蘆薈酒 苦味酒 芳香酒 橙皮酒 龍腦酒 機那酒 コロシクム酒 コロシクム根酒

コロシクム實酒 麥奴酒 鐵酒 枸橼酸鐵酒（枸橼酸アンモニア鐵酒）吐根酒 パブシ
 子酒 大黃酒 海葱酒 アンチモニー酒 煙草酒 酒石酸加里鐵酒（內務卿連名）

○大藏省 乙第三十三號 十二年八月廿一日

府縣

本年二月乙第十二號ヲ以テ酒類ニ藥品ヲ配伍シ販賣候者ノ取扱方相達置候處右達書ニ掲
 載セル品目外ノモノニシテ酒類ヲ和スト雖モ全ク藥性ヲ浸出スルニ止マルモノハ酒類稅
 則ノ限ニアラス其種類ニ依テ製藥又ハ賣藥ノ免許ヲ可爲受儀ト可相心得此旨相達候事

但酒造營業人及酒類受賣營業人於テ酒精或ハ再留酒精ヲ蒸餾シ又ハ販賣スル者ハ酒

類稅則中燒酎ノ明文ニ據リ課稅スヘシ（內務卿連名）

追加

○内務省

乙第四十三號

十四年九月八日

府縣

明治十一年當省乙第七十號洋賣藥取扱手續末項刪除候條此旨相達候事

但十二年乙第五十五號達衛生課事務條項第六條中賣藥ノ件ハ從前ノ通可心得事

第十二項 解剖

〔府縣伺〕

一病死體解剖ノ儀雙方熟談ノ上ハ區戸長或ハ區務取締へ届置患部之剖觀不苦旨御達相成候處全體之解剖モ雙方熟談ノ上ハ同様取計可然哉〔京都府〕

〔指令〕 病體解剖ハ其患部ニ限リ候儀ニ付雙方熟談ノ上タリモ全體ノ剖觀ハ不相成儀ト可相心得事 九年十月十三日

一醫學經驗ノ爲メ小兒ノ死體ヲ「アルコール」ニ漬シ貯置度旨其父母並醫員ヨリ願出ノ向有之双方共不都合無之上ハ聞届不苦哉〔東京府〕

〔指令〕 胎兒ノ死體ニ限リ聞届不苦候事 同八月二日

一從來埋置有之引取人ナキ已決囚刑死并病死體及行斃人等數年ヲ經ル屍體ヲ發掘シ濯曝ノ上其骨格ヲ醫術講習用ニ供シ度旨願出之節ハ聞届不苦哉〔廣島縣〕

〔指令〕 難聞届候事 十四年一月七日

〔參考〕

第十二項 解剖

○太政官 第廿二號 十年二月廿二日

變死ニ係ル屍ヲ警察官吏検査スル時ニ於テ解剖ヲ行ハサレハ其致命ノ原由ヲ確知シ難キ旨醫師申立ル時ハ檢事 檢事派出ナキ地方ハ其地方長官ノ許可ヲ受ケ其部分ヲ解剖検査セシムルヲ得
右布告候事

第十三項 飲食物

○内務省 甲第廿五號 明治十一年九月廿日

近年製氷營業人不潔ノ氷ヲ製シ候者有之不都合ノ儀ニ付自今右營業ノ者ハ毎年製造ノ節並翌年發賣ノ節共前以テ管轄廳 東京府下ハ東 へ伺出検査ヲ受候様可致此旨布達候事

〔参考〕

内務省衛生局雜誌第七號 十年五月二日

嬰兒養育牛乳分量概表

左ニ示ス牛乳分量概表ハ嬰兒養育ノ爲メニ普通供用スヘキモノトス然レモ該兒ノ強弱ニ因リテ其分量ニ多少ノ差異アリ猶ホ其體質ニ就キテ斟酌アルヘシ

小兒ノ齡	牛乳ノ分量	水ノ分量	糖ノ分量 乳糖或ハ白糖
自二日至十日	五十五匁	百四十七匁五分	一匁四分二厘五毛
自十日至三十日	五十五匁	百四十匁	一匁三分五厘

第十三項 飲食物

二	月	五十匁	百三十五匁	一匁四分二厘五毛
三	月	七十匁	百三十匁	一匁二分五厘
四	月	八十五匁	百二十五匁	一匁二分五厘
五	月	九十匁	百二十二匁五分	一匁七厘五毛
六	月	百五匁	百五匁	一匁七厘五毛
七	月	百五匁	九十二匁五分	一匁七厘五毛
八	月	百四十匁	百五匁	一匁二分五厘
九	月	百四十匁	百五匁	一匁二分五厘
十	月	百四十匁	九十五匁	一匁
十一	月	百四十匁	九十五匁	一匁
十二	月	百四十匁	八十七匁五分	一匁

右乳、水、糖ノ三種ヲ合セテ一日ノ量トス

第十四項 著色料及染料

○内務省 乙第三十五號 明治十一年四月八日

府縣

近年アニリン其他鐵屬製ノ繪具染料ヲ以テ飲食物ニ著色スルモノ不撓趣ニ候處右ハ自然人身之健康ヲ害スルハ勿論中ニハ甚シキ中毒ニ罹リ忽地ニ非命ノ横夭ヲ致スモノモ有之危險ノ至リニ候條各地方廳ニ於テ注意取締可致此旨相達候事

追テ地方慣用ノ品ニヨリ毒性分ノ有無判然難致モノハ其原物相添當省衛生局へ照會試驗ヲ受可申事

○内務省 乙第十號 十三年三月十七日

府縣

本年一月太政官第一號ヲ以テ藥品取扱規則公布相成候ニ付テハ繪具染料等モ第二類並第三類表中ニ掲載有之モノハ該規則ニ照シ賣買可致等ニ候條心得違ノ者無之様可取計此旨相達候事

〔府縣伺〕

一 飲食物染料客年乙第三十五號達ノ趣モ有之取締方嚴重及布達置候得共染色ノ鮮明ヲ競

第十四項 著色料及染料

フヨリ自然アニリン其他鐵屬製ノモノヲ以テ著色スルモ難計依テ從來慣用ノ染料ヲ取交へ有害無害ヲ區別記載菓子料理商共一定ノ取扱方ヲ指示シ外著色品購求致度節ハ必可否伺出候様縣限及布達度云々

飲食物著色可差許分

本紅 又細 蘇木 竹葉枯礬等ヲ入レ製スルモ不苦 錫 枯礬ヲ入レ製
工紅 鹽類ヲ以テ沈澱シタルモノハ禁ス 茜 スルモ不苦 花田紙 江洲栗
田村ヨリ出 藍 藍葉ヨリ製 青粉 豆葉菜葉艾葉ヨ 挽茶ノ粉 ズミ 山梔子鬱金根ヨ
ルニハウン紙 藍 スルモノ 紫粉 紫根ツルムラサキ、ミム 紅礬 楊梅皮
ラサキヨリ製スルモノ 飲食物著色不差許分

紅粉 緋粉 紺粉 紫粉 舶來品 茶粉 青竹粉 朱 丹 辰砂 扁青 綠青 鬱金砂

石黃 藤黃 洋紅 コーセニール虫ノ色分ヨリ製シ無毒ト雖モ緋 郡青 珪酸礬土鹽ヨリ
扁青ベレンス等ヲ以テ誤稱スルモノアルニヨリ禁ス 郡青 珪酸礬土鹽ヨリ
スルモノアルニヨリ禁ス ベレンス〔廣島縣〕 成り無毒ト雖モ

(指令) 伺之通 十三年三月十七日

一 顔料ノ内紺青始メ十一種ノ試験成績衛生局雜誌ニ御揭示相成候處其内郡青ハ珪酸礬土

硫黃ソイダヨリ成ルモノニシテ無毒ト有之然ラハ右ハ飲食物着色且彩色ノ爲メ少量伍用候テモ差支無之哉果シテ然ラハ十一種ノ内除之紺青綠青洋紅鬱金其他紅粉始六品合十種ノ精製品ハ無毒ニハ候得共無學ノ菓子商購求ノ際精礬ノ鑑別難相成譯ニテ自然誤用瀕死ノ危害ヲ醸シ候テハ萬々不都合ニ付紺青始十種共其製ノ精礬ヲ不論飲食物ニ著色及彩色ノ爲メ伍用共一切差止申度云々〔三重縣〕

(指令) 伺之通 十一年三月十四日

〔参考〕

内務省衛生局雜誌第八號 十年六月廿九日

顔料藥物試驗成迹告示

世ニ早染或ハ染粉ト唱フル顔料ニハ多ク有毒品アリ若シ其價ノ廉ナルト著色ノ艷麗ヨシテ兒童ニ售レ易キトテ貪リ之ヲ以テ飲食物ヲ裝飾スルハ必不測ノ危禍ヲ招カントス已ニ一二ノ地方ニ於テ著色ノ食物ヲ食シ之カ爲メニ死ニ瀕スルモノアリト云フ今東京府神奈川縣ノ請求ニ因リ試験ヲ經テ指示セル顔料十一種ノ成迹ヲ左ニ掲テ之ヲ四方ニ告知ス

紺青 綠青 此二品ハ銅ヲ含有ス故ニ毒アリ

洋紅 洋紅ハ「コーセニール」蟲ノ色分ヨリ製シタルモノニシテ毒無シ然レモ坊間ニ往々「アニリン」製ノ紺粉、紫粉ヲ以テ洋紅ト假稱スル者アリ注意スヘシ

鬱金粉 鬱金粉ハ鬱金根ヨリ製シタル者ハ毒無シト雖モ坊間ニ於テ鬱金砂ト稱スル者ハ即チ「ビシリン」酸ニシテ毒アリ

郡青 郡青ハ珪酸、礬土、硫黃、ソーダ、ヨリ成ルモノニシテ毒無シ

紅粉 紺粉 茶粉 青竹粉 紺粉 紫粉 此六品ハ何レモ「アニリン」ヨリ製スルモノナレハ純乎タル化學的ヨリ論スレハ有毒ノ成分無シト雖モ其製造中ニ砒石、昇汞ノ如キモノヲ用フルニ至リテハ毒有リトス是故ニ甲ヲ分析シテ毒ナキモ乙ヲ分析スレハ毒有ルヲアリ而シテ現今坊間ニ散在スルモノハ粗造品多キカ故ニ是等ノモノハ飲食物ノ著色ニハ用ヒサルヲ以テ善トスルナリ

内務省衛生局雜誌第廿號 十二年一月十六日

戲弄并飲食物染料有害無害表

本邦ニ於テ近頃飲食物及戲弄物ノ染料ニ劇毒ノ色質ヲ用フル者多シ而シテ或ハ慣習ニ由リ或ハ新奇ノ鮮色ヲ好ムニ出テ、其有毒ナルコトヲ悟トラス豈ニ危難ノ至リナラスヤ故ニ其色質ノ有毒無毒ヲ分ナテ用捨セシムルハ亦人民ノ健全ヲ保護スルノ基ナリ本年四月當省乙第三十五號ヲ以テ「アニリン」其他鐵屬製ノ繪具染料ヲ用ヒテ飲食物ニ着色スルコト取締ヲ府縣ニ達シ若シ地方慣用ノ品ニ因リ毒性分ノ有無判然シ難キ者ハ原物ヲ本局ニ出ダシテ試シムル者實ニ此意ニ出ツ今爰ニ有毒無毒ノ色質ヲ分チテニ表トナシ以テ各地方ノ驗セ參觀ニ供スト云爾

第壹表 有害色質

白色ノ色質類

- (一) 鉛白(攪基性炭酸鉛) 鉛霜 鉛粉 白粉
- (二) 亞鉛白(酸化亞鉛) 爐甘石
- (三) 硫酸バリート
- (四) 右ノ合劑及之ニ他ノ白色色質ヲ混シタルモノ

赤色ノ色質類

- (一)朱 人工製

- (二)鉛丹(赤色酸化鉛)

- (三)「コローム」赤(鹽基性コローム酸鉛)

- (四)砒石含有洋紅コヒニル

- (五)アニリチ赤 紅粉

黄色ノ色質類

- (一)雌黃(硫化砒石)天然并ニ人工製ノ硫化砒石 王黃、支那黃ト云フモノ

- (二)鉛黃(鹽基性コロール鉛) 鑛黃ト云フ

- (三)酸化鉛 マシコット

- (四)コローム黃(コローム酸鉛)「ハリーセル」ハ「ル」一名新黃

- (五)ナーペルス黃(アンチモン酸鉛)

- (六)ウルトラマレール黃(コローム酸バリート)「ゲルビーチ」ト云フ

- (七)カルボギユム (劇毒ナリ)

橙黄ノ色質類

此色質ハ右ニ記載スル處ノ赤色并ニ黄色色質ヲ合セタルモノナリ

青色ノ色質類

- (一)扁青(化水鹽基性炭酸銅)岩紺青。鑛青。「ブレーメル」氏青。「パンゲユルヘル」青。

- (二)スマルト 王青。亞酸化コバルトニテ染メタル硝子塊 通常砒石ヲ含ミテ稍々毒トナルモノナリ

- (三)砒石含有コバルト鑛ヲ薰灼シテ製シタル青色質ノ類

紫色ノ色質類

此色質ハ右ニ記載スル所ノ青色并ニ赤色ノニ味ヲ混合シタルモノナリ

綠色ノ色質類

- (一)銅青(鹽基性醋酸々化銅)アラ綠青

- (二)綠青(ブルコンスヴェーケル氏綠)山綠。化水酸化銅ニ白色粘土若クハ他ノ白色物ヲ混シタルモノ

- (三)ブローメル氏綠 化水酸化銅ニ「キプス」ヲ混シタルモノ

(四)シケール氏綠(亞砒酸銅) 鑛綠

(五)シュワインフユルテル氏綠 醋酸及亞砒酸ノ
酸化銅混合物

又「里斯綠。英國綠。」「ベレンス」綠。新綠。ミチス綠。「カッセレル」綠。モス綠。

「ハベガーイン」綠等ノ名アリ

(六)コローム綠 コローム酸鉛ト「ベル
レース」青ノ混合物

又「ナーベルス」綠。油綠ト云フ

(七)リンマンヌ氏綠(亞酸化コバルト酸化亞鉛)「コバルト」綠ト云フ

(八)此他有毒ノ青色及黄色色質ノ混合物ヨリ製シタル綠色色質

褐色ノ色質類

此色質ハ右ニ記載スル所ノ赤色々質ニ黑色質ヲ混シタルモノナリ

黑色ノ色質類

日常用フル所ノ黑色々質中ニハ有毒ノモノナシ

鑛色ノ色質類

(一)假金粉并價金箔 即チ銅并亞鉛及銅
ノ混合物即チ真鍮

(二)假銀粉并價銀箔 即チ亞
鉛并錫

(三)青銅色

(四)青銅

(五)砒石含有ノ「アニリス」色質

第二表 無害色質

白色ノ色質類

(一)胡粉ノ調理セルモノ(炭酸石灰)

(二)キブス末(硫酸石灰) 石膏

(三)アスベスト末

(四)鹿角象牙若クハ骨ノ白ク燒キタルモノ 磷酸及炭酸
ノ石灰鹽

(五)白色ノ滑石ヲ淘汰セルモノ

(六)滑石タルクヲ淘汰セルモノ

(七)白色粘土ヲ淘汰セルモノ

赤色ノ色質類

- (一)鐵丹 ベンガラ
- (二)赤石脂 酸化鐵粘土含有ノモノ
- (三)代赭石ヲ淘汰セル(血石) 酸化鐵ノ粘土ヲ含ムアリ或ハ含マサルモノ
- (四)燒製セル酸化鐵
- (五)洋紅 カザン「コセニルレ」礬土少許ヲ混スルモノ
- (六)麒麟血
- (七)赤色ノ漆用色質

此色質ハ「コセニルレ」護謨ラツク。茜草若クハ赤蘇木ヲ熱湯ニテ浸出シ其浸出液ニ明礬ヲ混シ之ニ曹達ヲ加ヘテ沈澱ヲ生セシムヘシ然ルキハ礬土ノ沈澱スルニ當テ色質ヲ伴フモノナリ是レ即チ漆用ノ色質ナリ

(イ)コセニルレラツク

(ロ)護謨ラツク (是レ大戟科ノ植物 Alnites- Taceifera Will.ヨリ取ル)

(ハ)茜草ラツク 茜草 Rubia tinctorum.ノ根中ニ存スル色質ナリ

(ニ)赤蘇木ラツク 赤蘇木 Haematoxylon Campechianum)ノ色質ナリ

(八)赤蘇木及ブラシリノ木ノ浸出液

(九)日本紅 紅藍花 Carthamus tinctorius Se.花ノ浸出劑ナリ

(十)カルタミーチ (紅藍ノ花ヨリ採リタル色質ヲ云フ)

酒類并ニ「リキユール」ヲ染ムルニ用フヘキ赤色液汁

- (一)狗骨南天ノ實汁
- (二)美人草ノ葉汁
- (三)覆盆子ノ實汁

黄色ノ色質類

- (一)シケート黄 許多ノ植物性黄色々質ノ浸出液ニ明礬ヲ混シ洶汰セル胡粉ト共ニ沈澱セシメタルモノヲ云フ
- (二)黄土 硫酸礬土ノ化水酸化鉄ヲ混スルモノ

- (三)黄柏越幾私 (是レ黄柏 *Morus tinctorius* Se. 明礬ヲ混シ或ハ混セテ煎出シタルモノナリ)
- (四)クエルナトロン越幾私 (是レ北亞米利加産ノ植物 *Quercus tinctoria*. ノ皮ヨリ製ス)
- (五)サフラン (是レ「サフラン」*Crocus sativus* Se. ノ雌蕊ト花柱トヲ云フ)
- (六)狗骨南天根越幾私
- (七)鬱金 (是レ鬱金 *Curcuma longa* Se. 根ノ煎劑ヲ云フ○鬱金沙即チ「ピクリン」酸ト素ヨリ別ナリ)
- (八)カレンシユラ、ヲフヒナナリア (ト稱スル植物花ノ煎劑 (*Calendula officinalis*.)
- (九)山梔子

橙黄ノ色質類

- (一)「ナルンアン」ノ亞爾加里性煎劑 (亞米利加ノ熱帶地方及東印度ニ産スル *Bixaea* 科目 *Bixa orellana* Se. ノ實ヨリ得ル所ノ色質)
- (二)此ノ他前ニ記載スル無害ノ赤色及黄色々質ノ合劑

青色ノ色質類

- (一)純「ベルレーヌ」青 (銅及亞鉛ヲ含マサル純料ノモノ)
- (二)洋藍 (濃硫酸四分ニ溶解シ游離ノ過酸ヲ曹達若クハ炭酸石灰ニテ中和セルモノ)

(三)インシゴカルメル (シユルホインシゴ酸曹達) 洋藍ノ硫酸性溶液ニ「コロイド」ナリシテ混シテ沈澱セシメタル者ヲ云フ

- (四)郡青 瑠璃 (硫化「ナトリウム」及「硅酸礬土」)
- (五)ラツクムース (海藻ヲ浸出シテ得タル青色々質ニ石膏若クハ石灰ヲ混スルモノ)
- (六)赤蘇木ノ「アルカリ」性浸出液并越幾私
- (七)ナルサイレ (海藻ヨリ得タル暗青色ノ泥ヲ云フ)
- (八)青黛 藍草ヨリ製シタル者ヲ云フ近來坊間ニ販賣セル青黛類似ノ品ニハ毒物アリ注意スヘシ

紫色ノ色質類

- (一)ラツクムース
- (二)右ニ記載スル所ノ無害ノ赤色及青色々質ノ混合物
- (三)紫草 *Sithaspernum officinale* Se. ノ根中、根中ノ色質

綠色ノ色質類

- (一)綠汁 是レ鼠李 (*Rhamnus cathartica*) ノ未熟ナル實ヲ細末トナシ泡醸セシメテ其汁ニ明礬ヲ混シ加里ヲ以テ沈澱セシメタル色質ヲ云フ

(二) 綠土 (硅酸亞酸化鉄ノ加里及麻屈
涅矢亞及粘土ヲ混スルモノ)

(三) 綠色ノ郡青 (硫酸「ナトリウム」ト
硅酸礬土トヨリ成ル)

(四) 此他右ニ記載スル無害ノ青色及黃色々質混合物 (例ハ純「ベルレーズ」ト鬱金若
クハ黃柏ノ浸出液又洋藍ト鬱金

浸出液ノ
混合物)

褐色ノ色質類

(一) ケールセチンベル (土様ノ
褐色炭)

(二) 綠土(ウンブラ) 粘土ニ酸化鉄及化水
麻屈涅矢亞ヲ混スルモノ

(三) 鐵綠(ビーステル) 酸化滿俺ト化水過酸
化滿俺トヨリ成ル

(四) 阿仙藥褐色 (阿仙藥
越幾私)

(五) 此他無害ノ赤色及黑色々質ノ混合物

黑色ノ色質類

(一) 骨炭

(二) 煤 (植物性
ノ炭)

(三) 黒石脂 (黒色ノ「パ
ラヒート」)

鐵色ノ色質類

(一) 硫化錫

(二) 錫葉

(三) パラヒート

總テ戲弄物飲食物ノ染色料ハ決シテ左ノ物質ヲ含ムヘキ製劑物及色質ヲ用フヘカラス

砒石

アンチモン

鉛

コローム

銅

コバルト

モリブデン

カドミウム

亞鉛

ニッケル

ウラニウム

蒼鉛

水銀

ゴムギユツテ

ピクリン酸

アニリ子色質

價金銀箔

内務省衛生局雜誌第廿九號

十三年十二月十八日

綠青試驗成績表 東京司藥場試驗ニ係ル

番號	名稱	形狀	購求地	有害成分
第一號	奈良綠青	粗末	東京	鹽基性炭酸々化銅ト痕跡ノ砒石ト含有ス
第二號	岩白綠青	同	同	鹽基性炭酸々化銅ナリ
第三號	華綠青	粉末	同	粘土類ト亞砒酸々化銅トノ混和物ナリ
第四號	和蘭綠青	同	同	亞砒酸々化銅ナリ
第五號	松綠青	粗末	同	亞砒酸及鹽基性硫酸々化銅ヲ含有ス
第六號	岩綠青	同	同	鹽基性炭酸々化銅ト亞砒酸々化銅トノ混和物也
第七號	煉綠青	同	同上	
第八號	粒綠青	粒狀	坂多量ノ銅ト稍多量ノ砒石ト含有ス	
第九號	同	同	同上	
第十號	同	同	同上	
第十一號	同	同	同上	

第十二號	同	同	非森印	東京多量ノ銅ト痕跡ノ砒石ト含有ス
第十三號	板流	板狀	若松印	坂多量ノ銅ト稍多量ノ砒石ト含有ス
第十四號	同	同	杉印	多量ノ銅ト少量ノ砒石ト含有ス
第十五號	同	同	上森印	多量ノ銅ト稍多量ノ砒石ト含有ス
第十六號	同	同	非森印	同上
第十七號	同	同	同	同上
第十八號	和蘭花綠青	粉末	京多量ノ銅ト甚多量ノ砒石ト含有ス	
第十九號	同	同	同上	
第二十號	粉綠青	粗末	阪多量ノ銅ト稍多量ノ砒石ト含有ス	
第二十一號	同	同	同上	
第二十二號	花綠青	粉末	多量ノ銅ト少量ノ砒石ト含有ス	
第二十三號	板綠青	板狀	京多量ノ銅ト稍多量ノ砒石ト含有ス	
第二十四號	粉綠青	粗末	坂多量ノ銅ト少量ノ砒石ト含有ス	

第廿五號	粒綠青	粒	狀長一崎	多量ノ銅ト稍多量ノ砒石トヲ含有ス
第廿六號	岩綠青	粉	末同	多量ノ銅ト多量ノ砒石トヲ含有ス
第廿七號	白綠青	粒	狀同	多量ノ銅ヲ含有スレモ毫モ砒石ヲ含有セズ
第廿八號	粒綠青	同	同	多量ノ銅ト少量ノ砒石トヲ含有ス
第廿九號	洋綠青	粉	末同	多量ノ銅ト多量ノ砒石トヲ含有ス

此成績ニ據リ綠青ノ多量ノ銅ヨリ成リ加之砒石ヲ含有セルヲ明知スヘシ乃チ此色料ハ甚
 タ有害ノ毒物ナルヲ以テ菓子其他食物ノ著色ニ用フルハ勿論兒童ノ玩弄物等ヲ染彩スヘ
 カラス殊ニ第十八號第十九號第廿二號及第廿九號ハ皆純粹ノ「スウエー」ンヒユルテル線
 ナルカ故ニ布帛若シハ家具ヲ彩色スルニ使用スヘカラス是レ其毒ノ揮散スルカ爲メニ健
 康ヲ害シ遂ニ中毒ヲ發スルコト有ルヲ以テナリ

第十五項 清潔法

○内務省 乙第百十七號 明治十年十二月廿八日

東京警視本署 府 縣

便所下水芥溜ノ構造及掃除ノ不行届ヨリ其不潔物自然飲水ニ混シ各種流行病ノ原トナルモ
 ノ不掃就中虎列刺之病毒ハ永ク吐瀉物中ニ存シ土中ニ滲透シテ遂ニ飲水ニ混シ人身ニ入ル
 一ヲ以テ流傳ノ要路トナスカ故ニ本年虎列刺病有之地方ニ於テハ冬日沍寒之時ニ乘シ便所下
 水芥溜等ハ井水近圍コアルモノ各地ノ便宜ニ從テ修繕掃除ノ方法ヲ設ケ該毒再萌ノ豫防精々
 注意可致其他ノ地方モ豫テ管下人民ニ告諭シ漸次行届候様注意可致此旨相達候事

追テ本文施行ノ方法ハ當省へ可届出且右費用之儀ハ本年當省乙第九十七號達臨時費目
 ニ不立候條官民ノ區別ヲ立該廳限適宜可取計事

○内務省 乙第廿六號 十一年三月十四日

東京警視本署 府 縣

昨年十二月乙第百十七號ヲ以テ下水便所芥溜掃除之儀相達候處下水ヲ浚ヘタル淤泥并塵芥
 ナ市街之傍ニ堆積シ及市街之道路修繕ニ供シ候テハ却テ危害ヲ醸シ候條可成市外人家遠隔
 之地ニ搬出候様措置可致此旨爲心得更ニ相達候事

第十五項 清潔法

追テ人家隔リタル田畑ノ培養ニ供シ候儀ハ不苦候事

〔参考〕

○太政官 第百六十三號 六年五月

方今牛豚類ノ收畜盛ニ行ハシ候處温暑ノ時ニ方テハ其臭氣人身ノ健康ヲ害スルノミナラズ近來獸類ノ傳染病流行往々人生ノ傷害ヲ醸シ候ニ付自今三府市街ノ區内ハ勿論各地一般人家稠密ノ場所ニテ豢養ノ儀堅ク禁止候條右區内ニ於テ從前營業ノ者ハ布令到達ノヨリ三十五日以内ヲ以テ郊外便宜ノ地ニ立退豢養可致事

但東京府下朱引内ハ假令草野空間ノ地ト雖モ豢養不相成尤乳汁搾取ノタメ豢養候ハ被差許候得共不潔臭穢ノ儀モ有之候得ハ詮議ノ上司令取拂事

第十六項 埋火葬

○太政官 第八十九號 明治八年五月

明治六年七月第二百五十三號火葬禁止ノ布告ハ自今廢シ候事

○内務省 乙第八十號 八年六月廿四日

府縣

火葬ノ儀第八十九號ノ通御布告有之候ニ付テハ燒場ノ儀左ノ通ノ心得ヲ以テ取扱可申事

一燒場ハ東京府下ハ朱引外其他ノ地方ハ市街村落ノ外渾テ人家遠隔ノ地ニ於テ薄稅地又ハ借地料等無之地ヲ撰ミ最寄市邑申合共用致サスヘク尤官有地又ハ民有地ノ内新規相設ケ候積リ取調可伺出事

一舊燒場官民有地ヲ論セス從前ノ儘使用スル土地及新規拂下タル土地ハ民有地第三種ニ可組入事

(九年十月内務省乙第百廿三號ヲ以テ改正)

一燒場ハ火爐烟筒及牆壁等ヲ設クヘシ尤人家遠隔ノ山野等ニ於テハ適宜簡易ノ裝置ヲナス

モ不苦候事(十二年十二月内務省乙第五十號ヲ以テ改正)

一燒場築造修繕等一切ノ入費ハ人民ノ自辨勿論ニ候得共都テ不都合無之様區戶長ニ於テ注

第十六項 埋火葬

意取締可爲致事

一遺骨ヲ此場中埋葬候儀ハ不相成候事

〔參考〕

○大藏省 乙第三十七號 十三年十一月十日

府縣

耕宅地ニ非サル民有地ヲ共葬墓地ニ撰定候分地租蠲除ノ儀自今委任候條事由ヲ具シ其時々可届出此旨相達候事

第十七項 傳染病豫防

○太政官 第三十四號 明治十三年七月九日

明治十二年八月第三十二號虎列刺病豫防假規則ヲ廢シ傳染病豫防規則左ノ通相定候條此旨布告候事

傳染病豫防規則

總則

第一條 此規則ニ稱スル傳染病トハ虎列刺、腸窒扶私、赤痢、實布埜利亞、發疹室扶私、及痘

瘡ノ六病ヲ云フ

但六病ノ外流行病アリテ其勢盛ナルノ兆アルキハ地方長官ハ內務省ニ具申シ豫防法ヲ

施行スヘシ

第二條 醫師ノ傳染病ヲ診斷スル者ハ遅クモ廿四時間ニ之ヲ患者所在ノ町村衛生委員ニ通知スルヲ要ス衛生委員ハ速ニ之ヲ郡區長及最寄警察署ニ通知シ郡區長ハ速ニ之ヲ地方廳東京府下ハ府ニ届出ヘシ地方廳ハ一週間毎ニ新舊患者及治癒死亡ノ數ヲ內務省ニ申報ス

第十七項 傳染病豫防

但土地ノ便宜ニ依リ醫師ヨリ直ニ警察署ニ届出警察署ヨリ衛生委員ニ通知スルモ妨ナシ(十二年十二月太政官第五十四號公布ヲ以テ改正)

第三條 地方長官ハ管内ニ傳染病流行ノ兆アリト認ムルハ其性狀ヲ記シテ速ニ之ヲ内務省ニ申報シ且其管内及隣接若クハ船舶交通ノ府縣最寄兵營其地碇泊ノ軍艦等ニ報告スヘシ(但書第五十四號ヲ以テ削除)

第四條 (第五十四號削除)

第五條 諸官廳、兵營、軍艦、監獄及官立ノ學校、病院、製作所等ニ於テ傳染病者アルハ其主長ハ該地方官ト協議シ此規則ニ從ヒ豫防法ヲ施行スヘシ

第六條 虎列刺、赤痢、發疹室扶私、痘瘡ノ流行ニ際シ地方長官ニ於テ豫防ノ爲メ避病院ヲ要スヘキト認ムルハ内務卿ニ具狀シテ之ヲ設クルヨリ得

但人民協議ヲ以テ避病院ヲ設クルハ地方長官ノ許可ヲ請フヘシ

第七條 醫師並ニ衛生委員ニ於テ傳染病者ノ看護行届カス若クハ病毒ノ傳播ヲ防キ難シト

認ムル者ハ避病院ニ入ラシムヘシ

第八條 掛リ官吏ハ傳染病者アル家ニハ其病名ヲ書シテ門戸ニ貼付シ要用ノ外他人ト交通ヲ絶クシムヘシ

但患者治愈死亡又ハ避病院ニ入リタル後相當ノ消毒法ヲ行ハサルノ間ハ仍ホ本條ヲ遵守セシムヘシ

虎列刺病

第九條 虎列刺病者ノ排泄物及汚穢物ハ其運搬夫ヲ設ケ一定ノ場所ニ運輸シ燒棄若クハ埋却セシムヘシ

第十條 虎列刺病者ノ死屍ハ其埋葬地ヲ區劃シ濫リニ雜葬セシムヘカラス且他ニ改葬スルヲ許サス

但火葬ハ尋常ノ燒場ニ於テシ其遺骨ハ改葬スルモ妨ナシ

第十一條 虎列刺病者ニ用ヒタル臥具衣服器具及病室船室等ハ消毒法ヲ行フニアラサレハ再ヒ之ヲ用ヒ又ハ受授賣買スルヲ許サス

第十二條 虎列刺流行ノ際ニハ井泉、河流、水道及廁園、芥溜、下水、溝渠等総テ病毒朋生ノ因トナルヘキ場所ニ注意シ掃除清潔ノ法ヲ設クヘシ

第十三條 虎列刺流行スルキハ船舶交通ノ地方ニ於テ流行地ヨリ來ル所ノ船舶ヲ検査シ患者若クハ死者アルキハ此規則ニ從フテ處分スヘシ

第十四條 虎列刺流行ノ勢猛劇ナルトハ地方長官ハ内務卿ニ具狀シ其許可ヲ得テ醫師衛生官吏警察官吏郡區町村吏等ヨリ適當ノ人員ヲ撰ミ檢疫委員トナシ豫防消毒ノ事務ヲ擔任セシムルヲ得

第十五條 前條ノ場合ニ於テハ地方長官ハ祭禮劇場等人民ノ群集ヲ差止ルヲ得
腸室扶私病

第十六條 腸室扶私病ノ流行際ハ第九條第十一條及第十二條ヲ適用スヘシ

赤痢病

第十七條 赤痢病流行ノ際ハ第九條第十一條及第十二條ヲ適用スヘシ

實布埴利亞病

第十八條 實布埴利亞病流行ノ際ハ第十一條ヲ適用シ患者ノ痰唾及之ノニ汚穢スル物ハ燒棄若クハ埋却セシムヘシ

發疹室扶私病

第十九條 發疹室扶私病者アルキハ第十條第十一條ヲ適用シ其流行ノ際ニハ第十二條第十三條第十四條及第十五條ヲ適用スヘシ(第五十四號改正)

第二十條 發疹室扶私病者若クハ其死屍ヲ載セタル車輿等ハ毎回消毒法ヲ行フニアラサレハ他用ニ供スヘカラス

痘瘡病

第二十一條 痘瘡病流行ノ際ハ第十條第十一條第十二條及第廿條ヲ適用シ患者ニ未痘者ヲ接近セシムヘカラス

罰則

第二十二條 醫師衛生委員此規則ニ違背シタルキハ五十圓以内ノ罰金ニ處ス

第二十三條 官吏其管掌ノ事務ニ於テ此規則ニ違背シタルキハ百圓以内ノ罰金ニ處ス

第廿四條 人民此規則ニ違背シタルハ壹圓五十錢以内ノ科料ニ處ス

十七ノ六

〔府縣伺〕

一規則第一條ニ揭示有之病者ニシテ醫師診斷スル時ハ第二條ニ依リ報告スヘキハ勿論ニ候處漢醫ハ從來右ノ如キ病名ヲ呼稱セストシテ報告セサル者有之哉モ難計若シ如斯者有之節ハ第廿二條ニ因リ處分相成儀ニ可有之哉然ル時ハ漢醫ト雖モ第一條ニ有之通ノ病名ヲ以テ報告スヘキ儀ニ有之候哉〔神奈川縣〕

〔指令〕漢醫ト雖モ第一條ニ掲載ノ病名ヲ以テ報告セシムヘキ儀ト可相心得事 十三年七月廿八日

一第二條醫師ノ傳染病ヲ診斷スル者ハ遅クモ廿四時間ニ患者所在ノ町村衛生委員ニ通知云々ト有之然ルニ實際ニ就テ言フキハ町村ノ協議ニ依リ一二人ノ定員アリト雖モ其事務ヲ取扱フ爲メ別ニ詰所ヲ設クルニアラズ又斷ニス在宅スルト限ルヘカアラズ果シテ缺員又ハ不在ナルトハ便宜ヲ以テ戸長役場へ爲届出該役場ニ於テ郡役所其他へ通知方取計候様相達置キ可然哉〔栃木縣〕

〔指令〕伺之通 同十一月十二日

一第二條船舶交通ノ府縣トハ常ニ屢往復スル地方ヲ指候儀ニテ一年間僅々屈指ノ往復ノ如キハ此限ニ無之ト可心得哉〔京都府〕

〔指令〕伺之通 同十一月一日

一第六條ノ避病院ヲ設立セントスル際病勢急劇ニシテ寸時モ猶豫シ難キ場合ニ於テハ假設ノ後直チニ具狀致可然哉〔栃木縣〕

〔指令〕具狀ノ上其裁定ヲ得テ取設ヘシ 同十一月十二日

一傳染病豫防規則第六條第十四條及御省本年乙第九號ノ場合ニハ都度御省へ稟議ノ上可取計成規ニ候處虎列刺病ノ如キ最急劇ナル傳染病ノ流行ニ際シ書面ヲ以テ伺出候テハ往復中時日ヲ費シ夫レカ爲メ時機ヲ失シ候儀有之哉モ難保ニ付前件至急ノ場合ニ限リ電報ヲ以テ可及具狀候條同シク電報ヲ以テ御指令相成度然ルモハ避病院ノ構造位置等詳細ノ儀ハ追テ書面ヲ以テ可及上申 云々〔高知縣〕

〔指令〕伺之通尤其都度病勢ノ景況ヲ詳記シ伺出候儀ト可相心得事 同九月四日

一傳染病アリ地方税ニテ避病院ヲ設クルハ伺ニ不及哉〔大分縣〕

十七ノ七

(指令) 地方税ニテ避病院ヲ設ルハ伺出ニ不及同十一月廿九日

一規則第六條ニ虎列刺赤痢發疹室扶私痘瘡ノ流行ニ際シ云々トアリ然ルハ第七條中單ニ傳染病トアルハ右四病ヲ指稱候儀ト可心得哉〔愛媛縣〕

(指令) 規則各條中傳染病ノ字ハ傳染六病ヲ總稱候儀ト心得ヘシ同九月十一日

一第七條ノ看護行届カス云々ト認ムル者ハ特リ醫師衛生委員ノミヲ限ラス衛生官警察官等ニ於テモ同様相心得可然哉〔栃木縣〕

(指令) 伺之通同十一月十二日

一規則第八條ニ掛官吏ト有之ハ衛生官吏郡役所ノ衛生係又ハ檢疫委員等ヲ指稱スル儀ト存候得共便宜ニヨリ戶長衛生委員等ニ取扱ハシムルモ差支無之哉〔高知縣〕

(指令) 掛リ官吏トハ衛生官吏警察官吏及郡區町村吏戶長ヲモ相合候儀ト可心得尤官吏ヲ依托ニヨリ衛生委員ニ於テ取扱候ハ不苦同十一月四日

一虎列刺病者ハ假令一名有之モ第九條ノ通り運搬夫ヲ設ケ排泄物及汚穢物ヲ燒棄若シハ埋却セシムヘキ如クナレ凡僅ニ數名ノ患者ノ爲メ運搬夫ヲ備フルハ實際行届キ難キ

義ナレハ第九條ハ一市街若クハ一町村ノ流行ニ際シ施行スル規則ト可心得哉〔同縣〕

(指令) 患者一二名ノ時ト雖凡其家族外ノ人ヲシテ運搬セシメ候儀ト可心得同

一前條運搬夫ハ病勢ノ景況ニヨリ縣廳又ハ町村等ニ於テ備置候儀ト可心得哉〔同縣〕

(指令) 伺之通同

一第九條ノ燒棄若クハ埋却セシムル物品極貧者ハ地方税ヲ以テ之ヲ買上ケ相當ノ處分致可然哉若シ重大ノ物品ナルハ不問貧富其補償費ハ同様處分可致哉〔栃木縣〕

(指令) 燒棄若クハ埋却セシムル物品ノ買上ハ貧困者ニ限り候儀ト可心得地方税ヲ以テ買上候ハ伺之通同十一月十二日

一第九條ニ虎列刺病者ノ排泄物及汚穢物ハ云々第十條ニ虎列刺病者ノ死屍ハ云々ト有之候處縣下ノ儀從來燒場至テ少ク埋葬地モ從來ノ場所人家ニ接近或ハ狹隘其他ノ障害有之候ニ付豫メ一町村或ハ數町村聯合ヲ以テ取設ケ置サルヲ得サル儀ニ付芝地荒蕪地等ニ於テ無障害ノ場所選定致置セ候積ノ處人民所有地ヲ一町村又ハ聯合町村於テ之ヲ買上ケ相用候片ハ民有地第二種ニ組替有稅地減租ノ積取調若シ民有地ニ適當場所無之時

ハ官有地中差支無之分ニ限リ撰定共同墓地ノ積取調可然哉〔山梨縣〕

〔指令〕排泄物等燒棄場ノ儀ハ其時ニ臨ミ相當ノ場所相定メ永存ニ不及儀ト可心得埋却場及埋葬地ノ儀ハ伺之通

但官有地ニ取設候節ハ拂下候儀ト心得ヘシ 同十月六日

一規則第十條第十九條及第廿一條ニ虎列刺發疹室扶私及痘瘡病者ノ死屍ハ其埋葬地ヲ區劃云々ト有之ハ三病ノ死屍ヲ通常墓地へ雜葬セシムヘカラサル儀ト存候得共其三病ノ死屍モ各埋葬地ヲ異ニスル儀ニ候哉〔高知縣〕

〔指令〕通常墓地ヲ區劃シ他ノ死屍ト雜葬セシメサル儀ト可心得且三病各其埋葬地ヲ異ニスルニ不及 同十一月四日

一埋葬墳穴ノ深サ定規無之候得共各地ノ燥濕高低ニ從ヒ凡ソ八尺以上一丈二尺以下ニ鑿掘爲致可然哉〔栃木縣〕

〔指令〕伺之通 同十一月十二日

一第十三條ニ虎列刺流行スルキハ云々船舶ヲ検査スヘシトアリ當縣ノ如キハ沿海數百里

ニシテ港灣毎ニ検査所ヲ設置難致就テハ船舶碇泊ニ便宜ノ箇所ヲ撰ミ七八箇所ヲ設ケ検査ヲ遂ケ其他ノ箇所ヨリハ上陸差留可然哉〔愛媛縣〕

〔指令〕規則第十四條ノ検査委員ヲ設ケサル際ハ其地ノ警察官衛生委員等ニ於テ検査候儀ト心得ヘシ

但碇泊ノ箇所ヲ定ムルニ不及 同九月十一日

一縣下虎列刺發病ニ付警察吏郡吏等差出豫防著手爲致候處醫員ノ義ハ常吏員ニ無之ニ付未タ検査委員ヲ命セサル以前ト雖ト適應之者相雇該事ニ充候義ニ付右ハ地方稅衛生費流行病豫防費ヨリ直チニ支辨候儀ハ差支無之哉且此上ノ景況ニ依リ直チニ検査委員申付候テ可然哉〔茨城縣〕

〔指令〕雇醫員費途ノ儀ハ伺之通検査委員ノ儀ハ本年第三十四號公布傳染病豫防規則第十四條ニ照シ病勢猛劇ノ景況具狀ノ上許可ヲ受ケ候儀ト可心得事 同八月十六日

一第十四條中郡區町村吏等トアルハ町村衛生委員モ含蓄候儀ト相心得可然哉〔栃木縣〕

〔指令〕伺之通 同十一月十二日

一醫師衛生官吏以下町村吏ニ至ル迄檢疫委員トナシ豫防消毒ノ事務ヲ擔任セシムル場合ニ至リ候テハ概シテ掛官吏ト可稱乎果シテ然ラハ罰則醫師ハ例ヒ檢疫委員ヲ命スル凡第廿二條ニ照シ衛生官吏以下町村吏ニ至ル迄檢疫委員ノ名稱ヲ冒スモノハ一般之ヲ官吏ト看做シ第廿三條ニ照シ所置可致手〔石川縣〕

〔指令〕醫師衛生委員ハ檢疫委員ヲ命スル場合ト雖モ官吏ノ限ニアラス罰則ノ義ハ其筋へ可伺出事 同十一月二日

一第十八條實布埜里亞病ノ痰唾ヲ受クル器具乃チ銅盤磁皿衣類等汚穢スルモ該條文字ニ拘泥セス第十一條同様可心得哉〔愛知縣〕

〔指令〕伺之通月 同十一月一日

一第十八條實布埜里亞病者ノ痰唾及之ニ汚穢スル物ハ燒却若クハ埋却セシムヘシトハ虎列刺病者排泄物等ノ如ク必シモ一定ノ場所ヲ設ケス各自邸内ニ於テ燒却埋却ノ處分ヲ爲シ可然哉〔愛媛縣〕

〔指令〕燒却ハ伺之通埋却ハ人家遠隔ノ地ニ於テスヘシ 同九月十一日

一規則第廿二條第廿三條醫師衛生委員及官吏罰則ハ地方廳於テ管掌ノ區域ヲ定メ其擔當スヘキ事務ニ違背スル者ハ此規則ニヨリ處分可致儀ト可心得哉〔愛知縣〕

〔指令〕規則中明文アル外管掌ノ區域ヲ定ムルハ不相成儀ト可心得 同十一月一日

一該規則ニ違背セシ者ハ一般犯人同様ノ手續ニテ告訴告發致サセ官吏職務上ノ事ト雖モ敢テ異ナル義無之ト可心得哉〔同縣〕

〔指令〕伺之通 同日

一傳染病豫防規則公布相成候處若シ衛生ノ事務ニ關係アル町村戸長ニ於テ右規則ニ違背シタル者ハ罰則第何條ニ據リ處分可相成モノニ可有之哉〔島根縣〕

〔司法卿指令〕該規則第廿三條ニ依リ處分スル儀ト心得ヘシ 同十月廿日

一第廿二條ニ只此規則ニ違背トシ有之其細目ヲ掲出セスト雖モ例ヘハ醫師ニ於テ患者ヲ誤診シ衛生委員ニ於テ第二條ノ通知ヲ遺失シ官吏ニ於テ第三條ノ報告ヲ遷延シタル類モ皆此罰則ニ照依可致哉若シ有心故造ニ出テスシテ過誤失錯ニ係ルモノハ官吏ト雖モ九年四月第二十四號官吏懲戒例ニ準シ地方長官ニ於テ處分致候儀ニ候ハ、醫師衛生

委員又ハ戸長役場ノ筆生雇等ノ過誤失錯ハ都テ不問ニ付シ可然哉〔朽木縣〕

〔指令〕醫師衛生委員及官吏等ノ過誤失錯ニ係ルモノモ此罰則ニ照シ其酌量ハ法官ノ

處分ニ依ルヘシ 同十一月十二日

一第三十四號公布ハ九年御省第十六號天然痘豫防規則ニハ關係セサル者ト可心得哉〔大

分縣〕

〔指令〕天然痘豫防規則ノ儀伺之通 同八月四日

一虎列刺流行ニ付テハ諸官員以下職工ニ至ル迄家内ニ該病者アル作ハ消毒法ヲ行ヒ醫師

ノ許可ヲ得ル迄ハ本人出務可差止旨十一年九月廿二日太政大臣ヨリ御諭達モ有之候處

第三十四號公布六病ニ係ルモノモ右同様取計不苦哉又ハ六病中虎列刺發疹室扶私ニ可

限儀ニ候哉〔愛媛縣〕

〔指令〕發疹室扶私ノ儀ハ虎列刺ニ可準他ノ四病ハ其實況ニヨリ斟酌候儀ト可相心得

事 同十一月八日

一單身寄留或ハ出嫁先或ハ旅行宿泊所等ニテ俄然傳染病ニ罹リ又ハ死亡セシ時ハ其地僻

邑ニシテ良醫ニ乏ク充分療養ヲ盡ス能ハサル者等本籍又ハ縁故ノ方ヘ引取リ候儀ハ他

ヘ傳染ノ恐アルニ付不相成トハ公認候得共腸室扶私實布埜里亞赤痢等ハ少敷感染ノ勢

力モ薄キニ寄リ充分豫防消毒法ヲ行ヒ候儀ハ臨機本籍其他ヘ昇送爲致不苦乎〔岡山縣〕

〔指令〕六病共患者並縁故アルモノ、所願及土地ノ遠近等ニ因リ適宜處分不苦候儀ト

可相心得事

但昇送ノ途中十分ノ消毒方行届候様可致事 同十二月三日

一傳染病死體ハ一層毒素ヲ逞シ甚タ危險ノモノニ可有之然ルニ從來渾テ死者ハ入棺ノ上

親族隨從シテ寺院ニ至リ佛前ニテ葬式ヲ行ヒ而シテ火葬又ハ埋葬スル習慣ノ處傳染病

死體ハ固ヨリ傳播ノ恐有之右様葬式ハ難爲致筋ト存候得共六病中自カラ輕重アリ渾テ

葬儀ヲ爲行サルモノトスルモ聊民情ニ可相響ト存候ニ付取扱方相定置度 云々〔石川縣〕

〔指令〕充分ノ消毒法ヲ行ヒ蓋棺シタル上ハ尋常ノ葬儀ヲ行ハシメ不苦候事 十四年二月廿一日

一傳染病豫防ニ付縣廳於テ施行スル事項ニ係ル費額ハ臨時御下金可相成候歟〔高知縣〕

〔指令〕臨時費下附ノ儀ハ流行ノ景況ニ依リ詮議可相成候ニ付豫メ指令ニ及難シ 十三年十二月

一月四日

○内務省 乙第九號 十三年三月十六日

東京警視本署
府 縣

虎列刺病流行ノ際内地ニ於テ海陸ノ檢疫所ヲ設ケ行旅船客ヲ抑留候儀ハ經伺ノ上可取計儀ト可心得此旨相達候事

○内務省 乙第四十一號 十三年十一月十日

府 縣

昨年虎列刺病流行ノ餘本年尙再燃ノ兆アリシモ幸ニ蔓延ニ至ラス漸次終熄ニ趨キ候ニ付テハ各地ニ取建候避病院ノ義存廢ノ見込相立夫々處分可致就テハ該院ニ於テ使用候家具物品等取調到底病毒遺傳ノ虞ヲ免レサルモノハ燒棄候様可致尤十二年度虎列刺病豫防臨時費ヲ以テ建設候避病院ニテ將來地方稅若シハ其最寄町村協議費等ヲ以テ保存スヘキ見込有之分ハ建物物品共詮議ノ上下附可致候條精細取調可伺出此旨相達候事

但本文保存ノ見込無之臨時費避病院ノ建物物品ハ消毒ノ後公費ニ附シ代金稅外收入ノ積明細書ヲ以テ可申出事

〔参考〕

内務省衛生局報告第十二號 十二年八月十四日

硫酸鐵「コロールカルキ」ノ如キ藥品ヲ厠圍溝渠等ニ撒布シテ其惡臭ヲ制スルハ未發ノ病毒ヲ豫防スルノ力アリト期ス可ラス然シテ漫ニ之ヲ厠圍ニ投シテ病毒ノ侵襲ヲ防制セんと欲スルカ如キハ多クハ無益ニ屬スルノミナラス其費用モ亦少シトセス抑モ厠圍ヲ清潔ニシテ傳染ノ媒介トナラントスル者ヲ防クハ日ニ厠中ノ淨掃ヲ事トシ且糞池ヲ改良シテ陶器或ハ油樽ヲ用ヒ其穢汁ヲシテ滲透スルヲ無カラシムルヲ以テ第一トセリ故ニ防臭藥ヲ撒布スルニ足ルヘキ費用ヲ有スル者ハ之ヲ移シテ有益ナル糞器ノ構造ニ充テ且屢次淨掃チ之務ムルニ如カス此旨中央衛生會ノ決議ニ因テ報告ス

内務省衛生局報告第十五號 十三年八月十一日

發疹室扶私及腸室扶私兩症ノ辨識

發疹室扶私及腸室扶私ノ二病ハ其病候チ同クスル所アルヲ以テ從來此二病ヲ辨別スルチ得サリシニ二三十年以來病屍剖檢及診斷學ノ進歩セシヲ以テ其病ノ診徵及剖觀ノ大異アルト其傳染性ノ劇易アルトヲ知ルヲ得タリ今此二病ノ全然其性ヲ異ニスルヲ知ラスシテ

唯其名稱ノ略相似タルヨリ診斷ノ際彼此ヲ辨別セサルキハ幸ニシテ其治療ノ法ヲ誤ルコトナシト雖モ其豫防ノ方法ニ至リテ大ニ異ナル所アリ故ニ若シ腸室扶私ノ患者ニ發疹室扶私豫防ノ嚴法ヲ遵守セシメハ畜ニ其目的ヲ達スル能ハサルノミナラス徒ニ病家ノ困苦ヲ招クコト多カルヘシ因テ二病ノ相異ナル所ヲ略記シテ爰ニ報告ス

發疹室扶私

- (一) 傳染ノ性最モ強烈ナリ
- (二) 一回發スレハ蔓延流行スルヲ常トス
- (三) 此病ニ罹ルハ其年齒ノ長幼ニ拘ハラズト雖モ亦時アリテ多ク老者ヲ侵スコトアリ
- (四) 發病ニ先チ前兆至テ短ク大概寒戰シ

テ後病候ヲ頓發ス

腸室扶私

- (一) 傳染ノ性甚タ弱シ
- (二) 流行ニ至ラスシテ不斷散在シ又時々大流行ヲ致スコトアリ
- (三) 此病ニ罹ル者ハ通常十八年ヨリ三十五年ニ至ルノ間チ多シトス
- (四) 發病ニ先チ前兆アルコト數日間ニシテ且病候ノ増進モ亦緩除ナリ

候ノ増進モ亦緩除ナリ

- (五) 顔面潮紅眼目赤色ヲ呈ス
- (六) 病初ヨリ譫語及精神痲鈍症ヲ發ス
- (七) 發疹ノ色暗紅ニシテ全身ニ布滿ス
- (八) 體力大ニ虛脱ス
- (九) 腹部ノ發症ナシ大抵便秘ス
- (十) 肺充血及肺炎ヲ併發ス
- (十一) 治癒ニ赴ク者ハ病候頓ニ減退シ臑症モ亦速ニ輕快ス
- (十二) 本病ノ經過三週ヲ出ツルハ稀ナリ
- (十三) 初週ノ終ニ死スル者少ナカラズ多クハ二週以前ニ斃ル

- (五) 面貌初メハ赤色ナレモ後ニハ忽チ蒼白トナリ且赤目ノ微著シカラス
- (六) 臑症漸次ニ發シ來ル
- (七) 發疹淡色ニシテ通常四肢ニ及ホスコトナシ
- (八) 身體大ニ羸瘦ス
- (九) 腹部鼓脹シ或ハ下利シ屢下血ス
- (十) 氣管支炎及肋膜炎ヲ合併ス
- (十一) 治ニ赴ク者ト雖モ諸症徐ニ退消ス
- (十二) 經過必ス三週ヲ費シ或ハ四週ヲ過クル者アリ
- (十三) 二週以前ニ死スル者ハ稀ニシテ通常三週乃至三週ノ後ニ斃ル

(十四)死體剖觀特異ノ徵ナシ血液暗色ニ

(十四)腸ノ集腺腫起シ或ハ潰爛シ腸間膜腺

ノ流動シ心肉軟化ス但腸ニ病患ノ徵

モ亦腫張シ脾臟軟腫ス

ナシ

上文記スルカ如ク此二病ノ診候自ラ區別アリト雖モ亦其二証候交互錯雜シテ病初發疹室扶私ノ狀ヲナシ末期ニ及テ腸室扶私ノ經過ヲ取ル者又發疹モ初メニ暗紅色ノ者ヲ生シ後ニ淡色ノ者ヲ發シ來ルアリ又或ハ腸室扶私ノ患者便秘シ發疹室扶私ノ患者下利スル者アルカ如キ實ニ彼此ノ辨識至難ナルモノ亦往々無キニ非ストス

內務省衛生局報告第廿二號 十四年五月廿日

今般東京ニ於テ發疹室扶私流行ノ兆候有之ニ付中央衛生會委員ドクトルベルツ、ドクトルブーケマ兩氏ノ申報ヲ譯シ心得ノ爲報告ス

○目下東京ニ流行スル發疹室扶私ノ略說

ドクトル、ベルツ氏述

發病ノ前數日間前兆ヲ呈シ身體違和ヲ覺エ嘔吐スルコト恰モ感冒ニ罹リシ者ノ如ク而シテ四

肢攣痛ス又此前兆ナク卒ニ寒戰スルコト一回或ハ數回ニシテ發病スル者アリ其發スルヤ體温頗ニ昇騰シテ四十度若クハ四十度以上ニ達ス此レ腸室扶私ト異ナル所ノ徵ナリ脈搏ハ百至或ハ百至以上ヲ呈シ患者甚シク疲倦シ大頭痛ヲ發シ乃チ褥ニ就カサルヲ得ス

上記ノ高熱數日間稽留シ其際頭痛劇甚ニシテ食思缺乏シ舌上乾燥シ精神恍惚トシ耳聾ヲ致シ又輕キ結膜炎ヲ發スルヲ見ル發疹ハ通常病ノ第三四日ニ見點ス此時ニ於テハ患者益困倦シテ起坐ニ耐ヘス又強ヒテ四肢ヲ動シ或ハ壓迫スルキハ劇痛ヲ覺エシム是ニ於テ精神痲呆ト爲リ若クハ昏憤シ耳聾愈甚シク夜間或ハ晝日譫語ヲ發シ熱度依然脈實ニシテ其數尙ホ百乃至百二十至ヲ算セシム

發疹ノ形狀ハ二種アリ一ハ稍起脹セル齧齒斑ニシテ猶ホ腸室扶私ニ發スル者ニ似タリ此疹ハ主トシテ軀幹ニ發シ又時トシテ四肢ニ生ス一ハ皮上ニ起脹セサル小斑ニシテ少シク陷凹セルカ如キ狀ヲ呈ス此疹ハ四肢ニ著シク而シテ手足ニ及ホス蓋シテ此赤色斑ハ指ヲ以テ之ヲ壓スレハ乍チ消褪シ指ヲ退クレハ則故ニ復スト雖モ重症ニ於テハ出血性ノ血斑ト爲ルヲ以テ之ヲ指壓スルモ褪色スルコト無シ

眼目光輝アリテ結膜赤色ヲ呈シ眼瞼動モスレハ膠著シ且ツ多少噴嚏ヲ頻發ス然レモ現今流行スル者ニ於テハ多ク氣管枝炎ノ症候ヲ呈セス舌上乾燥シ大概口内ニ褐色ノ汚物ヲ附着ス咽喉ニモ亦加答兒症ヲ發スル者多シ食思全ク廢絶シ大便常ニ秘シ尿ハ少量ニシテ大抵蛋白ヲ含メルヲ無シ而シテ脾臟肥大ス

神經症ハ漸ク増進シ發疹ハ荏苒持續シ或ハ漸次増加シ第十日或ハ第十三日ニ至ルノ後體温、脈搏暫時ニ常態ニ復シ一日乃至三日ノ間ニ發疹モ亦其色ヲ減ス精神昏憤シテ譫語ヲ發セシ者速ニ快了シ食思モ亦漸ク振ヒ一二週ヲ出テスノ忽チ恢復ニ赴ク者多シ然レモ其往間々神經機亢進ノ狀ヲ見ル

第二週ニ於テ發疹鉛色或ハ紫色ト爲リ又同時ニ新ニ血斑ヲ生スル者ハ惡兆ト爲ス本病ノ屢死ヲ致スハ則此時ニ在リトス

第三週ノ初ニ至リテ熱候始メテ退ク者ハ其恢復遷延スルヲ常トス脈搏百二十至ニ過クル者殊ニ衰弱セル者及人事不省昏睡ノ症ヲ呈スル者ハ皆豫後至テ不良ナリトス

又此如キ重症ニ反シテ輕症ナル者アリ此症ニ在リテハ第二週ノ初ニ於テ熱候已ニ減退ス

本病ハ觸接ニ因リテ感染スル者アリ故ニ其發症ノ前他ノ本病患者ニ交通觸接セシコト有ルヲ以テ之ヲ判定スルヲ得ヘシ而シテ腸室扶私トノ識別ハ左ノ如シ

初 徵	發疹室扶私	腸室扶私
一回若クハ數回ノ寒戰ヲ以テ頓發ス	病勢漸進シ惡寒著シカラス	
熱候 卒然四十度乃至四十一度ニ昇リテ稽留シ第十日乃至第十二日ニノ太ク速ニ下降ス	漸次ニ昇騰シテ階梯狀ヲ爲シ第四日乃至第六日ニ至リテ稽留シ第三週若クハ第四週ニシテ徐ニ下降ス	
神經症 速ニ發シ來リ第一週ニ於テ既ニ劇度ニ達ス	漸次ニ之ヲ發シ第二三週ニ於テ最モ著シ	
五官所患 耳聾甚シク結膜炎ヲ發シ且ツ噴嚏アリ	屢耳聾アリト雖著シカラス結膜炎及噴嚏ナシ	
腸諸症 大便秘結シ回腸盲腸部ニ雷鳴ナシ	屢下利シテ黃色ノ稀便ヲ漏泄ス回腸盲腸部ノ疼痛及雷鳴アリ	

皮膚現候

多ク小斑ヲ發シ又屢血斑ヲ交ヘ
遍ク全身ニ之ヲ見ル殊ニ四肢ニ
多シ又蕁薇疹ヲ併ス

輕ク蕁薇疹ヲ發ス殊ニ軀幹ニ在
リテ大概四肢ニ及ホサズ

(本局第十五號報告ト參觀スヘシ)

凡ソ發疹室扶私ハ之ヲ腸室扶私ニ比スルニ大流行ヲ爲シ且ツ往々貧人ノ群居セル市街ニ
在ル者トス

近口輕症麻疹モ亦大ニ行ル、ヲ以テ之ヲ發疹室扶私ト混一スルヲ勿カレ此病ハ經過短ク
熱候輕ク全身症モ亦輕易ニ危險ナルヲ無シ而シテ其發疹ハ通常第二日ヨリ見點シ顔面ニ
波及シテ著シク起脹シ發疹室扶私ニ比スルハ最モ密發シ且ツ速ニ消失ス但粘膜ニ現ル、
所ノ症候ハ發疹室扶私ニ同シ然レヒ此際患者尙ホ能ク起居ヲ營ムヲ得ルナリ

○横濱病院治療熱病患者報告

一千八百八十一年(明治十四年)五月十五日

ドクトル、ブーケマ氏報

本年四月初旬以來熱病ニ罹リ本院ニ投スル者少カラス茲ニ其患者ニ就キテ實驗スル所ノ

症狀ト考按トヲ述フルコト左ノ如シ但症狀ハ甲乙ノ二種ニ別ツ

(甲)前兆ヲ呈セスノ突然發病スル者屢之アリ其現候ハ最初寒戰シ次テ發熱シ頭痛、疲倦、
衰弱ヲ來シ舌上苔ヲ被ヒ乾燥シテ渴ヲ覺エ脈數ニ百至或ハ其以上ニ出ツル者アリ

體温ハ初數日間大約三十九度ニ夜間或ハ四十度以上ニ達シ腹部脹滿セス之ヲ壓試スル
モ痛ヲ覺ユルコト少シ大便秘シ或ハ稀ニ下利シ又嘔氣ヲ發スルコト有リ皮膚殊ニ顔面乾燥シ
テ赤色ヲ呈シ眼瞼及結膜ハ初ヨリ充血シ水樣粘液ヲ分泌スルコト多シ

皮膚ノ發疹ハ多ク之ヲ呈セス然レヒ發病後凡ソ第五日ニ胸腹及四肢ニ赤色ノ小疹(ロゼ
オラ)ヲ疎發スル者アリ其小疹ハ或ハ蚤刺斑ノ景狀ヲ呈ス呼吸稍々頻數ニシテ或ハ咳嗽ア
リ胸部ヲ聽診スルニ類鼾聲ヲ聞ク然レヒ咽喉炎ノ徵ヲ見ス脾臟ハ大抵腫大スト雖著明ナ
ラス或ハ亦著明ナル者アリ食慾缺乏シ尿ハ酸性ヲ帶ヒ或ハ少量ノ蛋白ヲ含ミ劇症ニ於テ
ハ利尿不隨意ナルコト有リ

不眠症ヲ發シ或ハ眠ルヲ得レハ則夢ニ劇症ハ譫妄或ハ昏睡ニ陥ル若シ然ラサルキハ劇甚
ノ頭痛及疲倦ヲ訴フ而シテ解熱ノ前後ニ於テ耳聾ヲ致スコト屢之アリ

通常第十日或ハ第十一日ニ至リ熱候一度或ハ一度以上ヲ減ス然レ其早キ者ハ第七日乃至第八日晚キ者ハ第十三日第十四日乃至第十五日ニ在リトス而シテ頭痛、疲倦及不眠症ハ熱候ト同時ニ減退ス體温ノ平候ニ復スルヤ其第一日或ハ第二日ニ於テ舌上滋潤シ發疹アル者ハ其疹消散シ乃チ恢復期ニ就ク但上皮ノ剝落ハ極メテ少シ

(乙) 患者ノ中二三名ハ初起ニ最モ注意ヲ要スヘキ症狀アリ高度ナル熱候ノ持續ハ二三週ノ長キニ及ヒ後數日間弛張熱ノ徵ヲ呈シ腹部ノ脹滿著明ニシテ按試スルニ痛ヲ訴ヘ屢帶黃色水様ニシテ稍々血色ヲ帶ヒタル大便ヲ排泄シ多クハ脾臟腫大セリ

余カ診察セシ患者ハ二名ヲ除ク外幸ニ全治セリ乃チ其二名ハ昏迷、虛脱ニ陥リ心臓麻痺ヲ以テ死ニ就キシ者ナリ

此二名ノ屍體ヲ剖觀スルニ其所見頗ル相同シク死後ノ僵直甚輕ク血液ハ凝固性ヲ失ヒテ全ク流動形ヲ爲シ胃腸ノ粘膜、肺及胸膜ニ溢血斑ヲ見ル氣管枝ノ粘膜ニ充血アリ心臓及隨意筋柔軟ヲ致シ薄腦膜ニ滲漏物アリテ水腫ノ觀ヲ呈ス脾臟ハ腫大セス腸ノ孤腺及聚腺ニ液ノ滲潤ヲ見ス又腸間膜腺ノ腫大甚ク著明ナラス

以上ノ解剖所見ト其瀕死ノ景狀トヲ參シテ之ヲ觀察スルニ此二患者ハ發疹室扶私ニ因リテ死セシ者ト判定セサル可カラズ此ニ據リテ更ニ考按テ下スニ甲種症狀ノ患者ハ發疹室扶私ノ種類ニ屬スル者ナリ殊ニ其熱候ノ經過ハ歐羅巴ニ於テ見ル所ノ發疹室扶私患者ノ定則ナル經過ニ符セル者ナリ初余ハ此種ノ患者ノ發疹ナク或ハ之アルモ甚ク稀少ナルヲ以テ經過短キ良性ノ腸室扶私ト斷シタリト雖モ後二箇ノ病屍ヲ解クニ至リテ始メテ其然ラサルヲ察セリ

試ニ當地ノ監獄ニ就キテ囚徒ノ患者ヲ視ルニ腸室扶私ニ罹レル者少カラスノ中劇症ノ下利ニ苦メル者アリ然レ其發疹ノ有無ニ至リテハ曾シ患フル皮膚病ノ爲汚色ノ斑點ノ皮膚ニ滿ツルヲ以テ之ヲ視辨シ難シ橫濱市街ノ醫師ヨリ傳聞スルニ市中ニ於テモ甲種之症ニ同シキ病ノ流行スルヲ有リト云ヘリ其傳染性ノ緩劇ニ關シテハ余未ダ確證ヲ得ル致ス機會ニ遭遇セスト雖既ニ今日ニ至ルマテ本院ノ助手二名他ノ患者一名及看病人一名カ傳染ヲ被リタリ是ニ由リテ之ヲ觀レハ直接ト間接ト問ハス觸接ニ因リテ傳染ヲ致スヲ亦信ス可キナリ

然レ市中ニ於テ更ニ檢察ヲ遂ケ之ニ等シキ傳染ノ確證ヲ舉ケ示スニ至ルマテハ此病ヲ以テ傳染性ナリト明言スルノ權ナシ只歐羅巴ニ於テ發疹室扶私ヲ傳染性ノ最モ劇烈ナル者ト爲シ而シテ現今日本ニ流行スル熱病ハ則同一ノ傳染性ヲ有セル者ナルヘケレハ茲ニ之ヲ指明スルハ余カ義務ナリト考フル所ナリ但乙種ノ者ハ腸室扶私ニ類似シ全ク甲種ノ者ト關係ヲ有セスノ自ラ別ニ傳播スル者ナリ

(ブーケマ氏ノ此報告ニ據ルニ發疹室扶私中亦發疹ヲ呈セサル者アリ因リテ考フルニ此ノ如キ症ハ或ハ誤テ他ノ熱性病ト爲シ或ハ輕々之ヲ看過シ爲ニ不測ノ慘害ヲ釀生スルノ虞ナキニ非ス故ニ最モ注意ヲ要スヘシ)

內務省衛生局報告第廿三號 十四年五月廿三日

發疹室扶私ハ其流行スルニ當リテハ感染ノ迅速ニ病性ノ險惡ナル殆ト虎列刺ノ右ニ出ツ此ノ如キ傳染病ニシテ東京及橫濱ニ於テ流行ノ兆アリ今日ニ及テ其發病ノ情勢ヲ審知シテ戒虞ノ計畫ヲ設ケサレハ如何ノ慘狀ヲ來スモ亦知ルヘカラス而シテ此計畫ヲ爲スヤ專ラ實地患者ヲ診シテ治療ヲ施ス所ノ醫師ノ届方ニ據ル者トス然ルニ本病ノ辨識タル宿

醫ト雖モ亦之ヲ難スルノミナラス從前神經熱、腐敗熱、發斑熱、傷寒、痘疫ト稱スル者ノ中ニ間本病ノ存スルアルモ或ハ届方ヲ缺クノ弊ナキヲ保シ難シ又既ニ本病ト診斷シテ届方ヲ了スル者ト雖モ其主要ノ徵候ヲ記載スルニ非サレハ據リテ以テ病勢ノ劇易等ヲ判察スルニ由ナク隨ヒテ亦豫防施行ノ目途ヲ失フテ無キニ非ス故ニ施治醫ニ於テ其辨識ノ若キハ本局報告第十五號及第廿二號ヲ參觀シ届方ハ別紙標式ニ倣ヒ本患者ニ具フル所ノ要候ヲ歴記スルヲ要ス是レ本局ノ届方標式ヲ製シテ地方ノ參考ニ供スル所以ナリ

發疹室扶私届方標式

姓名 男 女	年 齡	備 考
職業	發病 時 日	
既 往 症	發病ノ前徵アリシヤ 利發寒戰セシヤ 病顛ニ發セシヤ 熱候急ニ増進セシヤ	患者曾テ本病患者アル家ニ交通セシヤ 住家ノ近傍ニ本病患者アリシヤ 本病ノ患者ニ近接セシヤ

現		症	
體温ノ度數 午前 午後	脈候 其數	舌候	發疹 色澤 部位 疎密 血斑
			神識ノ景況
			赤目耳聾アルカ
			嘔嘔咳嗽アルカ
			便秘シ若クハ下利スルカ
			四肢掣痛スルカ
本病ノ屍體ニ離接セ	同家ニ本病患アリ	一家内オ病ニ罹ルヲ	貧困過勞等ノ誘因アリシヤ
			家屋ノ廣狹及住人ノ數
			右ノ外原因副因等ノ參考ニ供スヘキ者アラハ成ルベク詳細ニ記載スヘシ
月日	治療	姓名	

最初他ノ病名ヲ以テ届出タル者ト雖モ發疹室扶私ノ病狀ヲ現スニ至リテハ更ニ此標式ニ倣ヒ速ニ届出ヘシ

○内務省 乙第三十六號 十三年九月十日

東京警視本署 府 縣

本年第三十四號傳染病豫防規則布告相成候ニ付傳染病豫防心得書別冊相達候條各地方廳

ニ於テ時宜ヲ量リ節略論達シ實際上海防行届候様取計フヘシ此旨相達候事

傳染病豫防法心得書

凡ソ傳染病ハ其種類多シト雖モ流行性傳染病ノ一旦萌動シテ其蔓延ノ熾ナルニ至テハ救療ノ法モ治ク及ヒ難ク終ニ其猖獗ヲ縱ニシ慘酷ヲ極ムルニ至ル然ルニ豫防法アリテ之ヲ守ル嚴ナルキハ其病害ヲ未熾ニ防遏スヘシ加之消毒法アリテ之ヲ行フ密ナルキハ各種ノ病毒ヲ消滅スルヲ得ヘシ消毒法ハ即豫防法ノ一種ニシテ殊ニ其効驗確實ナルモノナリ目今本邦流行傳染病中最豫防注意ヲ要スヘキハ虎列刺、腸室扶私、赤痢、實布埜利亞發疹室扶私、痘瘡ノ六病トス而シテ各種ノ病症ニ從ヒ豫防ノ法モ亦其趣ヲ異ニスト雖モ其要領ハ之ヲ約スルニ四項ニ出テス其一ハ病毒ノ萌動及蔓延ノ因ヲ除却スルニアリ 即清 潔法 其二ハ各體中有スル所ノ感受性ナカラシムルニアリ 即攝 生法 其三ハ病毒傳播ノ媒介ヲ隔離スルニアリ 即隔 離法 其四ハ傳染病毒ヲ消滅スルニアリ 即消 毒法 右ノ四項ニ依リ豫防ノ事ヲ施サ、ルヘカラス

故ニ其大意ヲ示スヲ左ノ如シ

清潔法大意

流行性傳染病毒ノ眞性ハ確知シ難シト雖モ病理家ノ論斷ニ據ルニ之微ノ有機物アリテ外方ヨリ人體ニ竄入シ以テ其病ヲ發スルモノアルカ如シ蓋シ此毒物ハ多ク地中及水中ニ在テ萌動シ尋テ氣中ニ混シ然ル後人體ニ入ルヲ得ルモノトス故ニ其病ニ罹ル者ノ排泄物地中若クハ水中ニ滲入スルキハ即其毒ヲ散漫シ其地方ニ於テ衆人一齊ニ同一ノ病ヲ發スルヲ理ニ於テ疑フヘカラサルナリ

此有機性病毒ハ地中或ハ水中氣中ニ生殖ヲナスニ必ス多少ノ助養物ナカルヘカラス而ノ其助養物タル凡百ノ有機物體ノ腐敗ニ向ハントスル者之カ發生ヲ助クル者ニ似タリ夫ノ魚市、屠場等不潔ノ地及糞尿塵芥ノ堆積セル地ノ如キハ其腐敗物地中及水中ニ滲透シ又此ヨリ蒸發スルモノ大氣中ニ混入スルヲ以テ病毒ノ助養物甚タ多クシテ忽チ蕃殖ノ速ナルヲ致ス故ニ土地ノ不潔ハ傳染病ヲ蔓延セシムルノ媒介タリ是ヲ以テ其病發生スル所ハ必ス家屋ヲ清潔ニシ溝渠、芥溜、厠圍等ノ汚物ヲ掃除セサルヘカラス是清潔法ヲ要スル所以ナリ

以ナリ

攝生法大意

凡ソ人強健ナルキハ病毒ノ侵襲ヲ拒クヘキノ機能ヲ有スト雖モ過度ニ勞動シ及飲食ノ不食或ハ不足等ヲ以テ身體之カ爲メニ衰弱スルトハ病毒ノ侵襲ヲ受クルト最甚シトス彼ノ發疹室扶私ノ飢饉軍役ノ際ニ乘シ其猖獗ヲ逞フシ又平生飲食不節或ハ不食ニシテ腸胃之カ爲メニ些少ノ損害アルトハ虎列刺ノ侵襲ヲ受クルカ如キ等ヲ以テ證スヘシ其餘精神非常ノ感動及感冒等モ亦能ク病毒ヲ招クノ媒介トナルモノナリ故ニ流行ノ際ニ當テハ殊ニ攝生ノ法ヲ嚴守シ病毒侵入ノ地ナカラシムルヲ專要トス若シ人々普ク此豫防法ノ要訣ヲ守リ得ルニ至ラハ全ク傳染病ヲシテ流行蔓延ノ甚シキニ至ラシメサルヘシ是攝生法ヲ要スル所以ナリ

隔離法大意

傳染病毒ハ啻ニ地中若クハ水中ニ舍リテ傳播スルノミナラス患者ノ排泄物、呼氣、蒸發氣等ヨリ直ニ感染スルコトアリ故ニ病體、死體、其排泄物等ハ速ニ之ヲ隔離シテ觸接ノ憂ナカ

ツシムヘシ隔離法トハ患者ヲ別室ニ移シ門戸ニ病名票ヲ貼附シテ外人ニ表示シ或ハ之ヲ
避病院ニ送致シ要用アル人ノ外務メテ交通ヲ絶ツ等ノ事はナリ殊ニ其恐ルヘキ傳染病ニ
於テハ患者ニ接近シタル看護人等モ亦他ノ健康人ト隔離セサルヲ得ス苟モ能ク其法ヲ守
リ病毒ニ遠サカルヲ得ハ必ス傳染ノ蔓延ヲ致サハルヘシ是隔離法ヲ要スル所以ナリ

消毒法大意

凡ソ傳染病毒ハ其性分極メテ々微ニシテ見ルヘガラスト雖モ傳送物中ニ混入シテ人體ニ
達シ其病症ヲ發現スルモノトス此傳送物ヲ滅スルキハ即チ病毒モ亦消盡ス故ニ烈火ヲ用
ヒ之ヲ燒盡スルハ消毒ノ最良トス然レモ其燒棄ニ付シ難キモノハ或ハ藥劑ヲ用ヒテ蒸蒸
若クハ灌注シ或ハ之ヲ洗滌シ以テ其病毒傳染ノ力ヲ撲滅スルヲ得ヘシ然ラサレハ其病毒
散蔓シテ終ニ消滅スルヲ無カラシ故ニ病毒萌動ノ後ニ在リテハ消毒ヲ以テ豫防法中ノ最
緊要ナルモノトス

消毒法ヲ施スニ當テ其病性ト其施スヘキ物トニヨリ其科ヲ同クセス故ニ之ヲ分チ第一患
者及看護人等消毒法、第二死體及排泄物等消毒法、第三衣服臥具等消毒法、第四家屋船舶等

消毒法、第五什具運搬器等消毒法、第六廁固溝渠等消毒法トス但實布控利亞、發疹室扶私、痘
瘡ノ三病ハ第六ノ消毒法ヲ行フノ限ニアラス

凡ソ病毒ノ最モ合藏シ易キモノ即毛巾、綿布、綿絮、疊、蓆、敷物ノ如キ氣孔鬆疎ナルモノト
居室及室内ノ諸器具ノ如キハ其病毒浸染ノ深淺ニヨリ消毒法ヲ行フヘキモノトス

右ニ載セタル蒸蒸及洗滌ノ外其燒却ヲ憚ル品物ニシテ浸染セル病毒、萌生機能ヲ消滅セシ
メント欲スルモハ熱氣消毒竈ナルモノヲ用ヒテ華氏二百二十度ヨリ二百五十度ニ至ルノ
熱氣ヲ浴ク四方ヨリ通セシメ以テ之ヲ殲滅スル法アリ然レモ其構造宏大ニシテ各地ニ設ケ
難キヲ以テ茲ニ詳記セス且大氣日光ノ如キモ自然消毒ノ功アルモノニシテ善ク微隙ニ達ス
ト雖モ但々其力藥品ニ比スレハ甚ク弱キヲ以テ多少時日ヲ經サレハ其効ヲ奏シ難シトス
消毒藥劑ハ其品類頗ル多ク且其性質功能モ亦同一ナラス故ニ其功能ヲ類別シテ第一號ヨ
リ第十二號ニ至ル以テ各病消毒法ノ條ト相照シテ之ヲ用フルニ便ニス其功用ノ如キハ化
學作用ニ涉ルヲ以テ之ヲ略ス

○消毒藥

(第一) 濃厚石炭酸水

結晶石炭酸四分ヲ百分ノ水ニ溶シタルモノ

但石炭酸一分ニ虞利斯林又ハ亞爾簡保兒二分ヲ和シテ能ク溶解シ後本量ノ水ヲ加フヘシ

(第二) 稀薄石炭酸水

結晶石炭酸二分ヲ百分ノ水ニ溶シタルモノ

但溶解法前ニ同シ

(第三) 石炭酸蒸氣

結晶石炭酸或ハ之ニ二倍ノ亞的兒ヲ加ヘタルモノヲ皿ニ入レ微火ニ上セ蒸發セシメ或ハ石炭酸一分ニ餾

水二十分ヲ和シ布片ニ蘸シ室内ニ懸ケ置キ蒸發セシムヘシ

(第四) 石炭酸末

粗製石炭酸ヲ以テ砂、灰、木炭末、鏽屑等ヲ濕滯セシメタルモノ

但粗製石炭酸ハ四十分ヨリ六十分ノ「フェニール」酸即結晶石炭酸ヲ含ミ稍々色ヲ帯ヒタル

流動石炭酸ナリ

以下消毒同功アルモノニソ通常用ヒサル品

サリシル酸 二百倍ノ水ニ溶解ス

テール油

石炭酸石灰 石灰百分石炭酸三分

(第五) 硫酸鐵合劑

綠礬三百匁ヲ常水一斗ニ和シ粗製石炭酸百匁ヲ加ヘタルモノ

但此合劑ハ久ク貯フヘカラス用ニ臨ミテ調製スヘシ

(第六) 硫酸硫酸鐵合劑

硫酸五分硫酸鐵六分水八十九分ヲ和シタルモノ

以下消毒同功アルモノニソ通常用ヒサル品

鹽化亞鉛 八倍ノ水ニ溶解セルモノ

明礬

粗製明礬ノ過量ヲ水中ニ投シ能ク攪拌シテ後其上清ヲ取ル

コロール明礬 四倍ノ水ニ溶解ス

皓礬 百二十倍ノ水ニ溶解ス

(第七) 木炭 木炭二分生石灰二十分

(第八) 石灰

其他木灰、鋸屑、土等ハ又多少收結ノ功アルモノトス

(第九) 亞硫酸瓦斯

硫黃ヲ燒テ瓦斯ヲ發生セシム其法ハ疊敷ノ室ニ硫黃大約三百匁(木炭末大約十匁ヲ加フルキハ更ニ宜シ)ヲ要ス但一時ニ火焰ノ昇騰スル恐アルヲ以テ二三ノ火鉢ニ分配シ熾炭ヲ之ニ點シテ徐々ニ焚燒セシムヘシ

但多數ノ物品ヲ消毒スルニハ密閉シタル室土藏ニ索ヲ張り消毒スヘキ衣服等ヲ掛ケ或ハ竹架ヲ設ケテ之ヲ排列シ本量ノ硫黃ヲ薰スヘシ又人々各自ノ衣服等ヲ消毒スルニハ一握ノ粗製硫黃ヲ火鉢ニ入レ火ヲ點シ伏籠ノ類ヲ覆ヒ之ニ衣服ヲ被ラセ 薰蒸スヘシ

(第十) 亞硫酸溶液

(甲) 強百分ノ十ヲ含ムモノ

(乙) 弱百分ノ五ヲ含ムモノ

但製法ハ略ス

(第十一) 過滿俺酸加里溶液 百倍ノ水ニ溶解ス

(第十二) コロール瓦斯

十分ノ食鹽ヲ五分ノ褐石末ニ密和シテ磁皿上ニ置キ十分ノ硫酸ヲ十分ノ水ニ混和シタルモノヲ注ギテ之ヲ發生セシム

以下消毒同功アルモノニシテ通常用ヒサル品

亞硝酸瓦斯

磁皿ニ銅屑ヲ盛り置キ硝酸ニ少許ノ水ヲ加ヘテ稀釋シ徐徐ニ之ヲ注ギテ瓦斯ヲ發生セシム

コロール石灰溶液

コロール石灰一分ヲ水百分ニ溶解ス

硝酸

磁皿ニ盛り微火ニ上セ蒸發セシム

○

以下六病各四項ノ區別ニ因リ豫防法實施ノ事ヲ類別開示ス而シテ其手續ハ各項自ラ連帶シテ唇齒相保ツモノトス故ニ一事ニシテ其項ヲ同シクセサルモノアリ例ヘハ虎列刺病ヲ豫防スルニ先ツ廁厠ノ掃除ヲ要スルハ清潔法ニ屬シ其患者ヲ尋常ノ厠ニ上ラシメス吐瀉物ヲ遠隔ノ地ニ運搬セシムルハ隔離法ニ屬シ其之ヲ運搬セシムル前ニ消毒ヲ行フハ消毒法ニ屬ス其事ハ一途ニシテ前半ハ隔離法中ニ載セ後半ハ消毒法中ニ載スルカ如シ此心得書ニヨリ實施スル者宜シク相對照シテ其順序ヲ誤ルテ勿レ

○虎列刺

虎列刺ハ特異ノ流行性傳染病ニシテ其病毒ハ病者ノ吐瀉物中ニ在リ然シテ其吐瀉物ノ泡醃ニ向ハントスル時最傳播ノ媒介ヲナスコト甚シトス故ニ此病毒一回不潔汚穢ノ地中水中

ニ入ルキハ更ニ其蕃殖ノ力ヲ加ヘ動モスレハ飲料水ニ混シ途ニ人體中ニ入リテ發生ス其症タル暴ニ吐瀉シ性力忽チ沈衰シテ而シテ斃ル傳染病中最急劇ナルモノト謂フヘシ印度地方ニ於テハ毎歲發動シテ地方病トナルト雖モ人民ノ交通ニヨリ四方ニ蔓延シ到處或ハ三四年間流行シ或ハ全ク其痕跡ヲ絶タスノ散發スルコトアリ總テ此病毒ハ夏月温熱ノ候ニ當リ其發動ヲ見ルモノトス眞症及類似症ノ二種アリト雖モ俱ニ傳染スルモノナリ故ニ其豫防ニ至テハ同様ノ注意ヲ要スヘシ

第一項 清潔法

第一條 虎列刺病ノ吐瀉物ハ一滴タモ汚穢ノ地ニ滲入セシムヘカラス若シ滲入スルキハ其泡醃力ヲ助ケ忽チ蕃滋増殖スルモノナリ故ニ土地ヲシテ不潔ナラシムヘキ芥溜、下水、廁厠、魚市、屠場等ハ常ニ之ヲ掃除スヘシ其掃除スル毎ニ防臭藥即コロール石灰、明礬強溶液、テール油等ヲ適宜ニ撒注スルヲ良トス

第二條 虎列刺病毒ハ容易ニ水土ニ滲入シテ傳播スルカ故ニ常ニ飲料水ニ注意ヲ加ヘ井戸側及敷石若クハ敷板ヲ堅牢緻密ニシテ傍地水潦ノ滲透ヲ防クヘシ其他飲料ニ供スル

河水及水道ノ源ハ汚穢物ノ流入ヲ防クヘシ

第三條 虎列刺ノ病毒ハ排泄物ニヨリ傳播スルヲ以テ糞壺若クハ桶ヲ堅牢ニスヘシ且常

ニ注意シ糞尿ヲ汲取リテ之ヲ充滿セシムヘカラス殊ニ衆人群集スル所ノ厠圍又井水若クハ水道近傍ノ厠圍ノ如キハ最注意ヲ加フヘシ

第四條 糞壺若クハ桶等ニ罅隙アルキハ糞汁之ヨリ滲漏シテ忽チ病毒ヲ地中ニ滋蔓セシ

ム此ノ如キモノハ消毒藥ヲ施スモ其功ヲ奏スル能ハス故ニ豫メ壺桶ヲ點檢シ罅隙アルモノハ之ヲ改良スヘシ

第五條 芥溜ハ雨水滲入スルニヨリ其汚穢ヲ廣ク地中ニ浸漫セシムルヲ以テ木箱或ハ鐵

葉箱等ヲ以テ其貯器トナシ板蓋等ヲ設ケ雨水ヲ禦キ且塵芥ヲ堆積セシムヘカラス

第六條 下水溝渠ハ石若クハ堅質ノ木材ヲ用ヒテ有底ノ放水樋ヲ設ケ遠隔ノ地ニ流注セ

シメ汚水ノ地底ニ滲入スルヲ防クヘシ其樋上ハ蓋ヲ以テ密閉スヘシ若シ其接合密ナラザレハ却テ其間ニ腐敗氣ヲ停蓄スルカ故ニ此ノ如キモノハ寧ロ上面ヲ開放シテ大氣ニ曝スヲ以テ愈レリトス

但塵芥ハ必ス溝渠ニ投棄セシムヘカラス

第七條 溝渠ハ注意シテ塵芥ヲ除キ淤泥ヲ浚フヘシ且其泥芥ハ溝側ニ留置カスシテ人家

遠隔ノ地ニ搬送スヘシ然レモ炎熱ノ候ニ當テ日中ニ泥芥ヲ攪動スレハ惡臭ヲ發シテ空

氣ヲ汚濁スルノ恐アルニヨリ必ス他ノ時候ニ於テ之ヲ浚除スヘシ

第八條 魚市屠場ニ於テハ其流出スル所ノ汚水地中ニ滲入スルノ恐アルヲ以テ第六條ニ

同シキ放水樋ヲ設ケ流注セシムヘシ且屠屑、腥汁ヲ培料ニ供スルカ爲メニ久ク貯積ス

ヘカラス必ス有益ノ箱若クハ桶ニ入レ置キ速ニ人家遠隔ノ地ニ搬送スヘシ其他牛馬ノ

廐舎及羊豚雞鶩ノ畜場等モ亦此旨意ヲ以テ掃除スヘシ

第九條 人家稠密ノ場所ニ於テハ培料ノ置場ヲ設クヘカラス若シ止ムヲ得スシテ設クル

キハ久シク堆積セシムヘカラス前條ノ旨意ヲ以テ人家遠隔ノ地ニ搬送スヘシ其汚汁滲

入スルモノハ更ニ新土ヲ以テ之ヲ覆フヘシ

但村落廣潤ノ地ニ於テハ必スシモ之ヲ要セス

第十條 學校、囚獄、製造所、旅店、劇場等ハ流行ノ際更ニ清潔法ニ注意シ又避病院ニハ掃

除事務ノ人夫ヲ設ケ殊ニ注意ヲ加フヘシ

第二項 攝生法

第十一條 虎列刺病ハ各人皆之ニ感スルノ素因アルニ似タリト雖モ就中不攝生ノ人之ニ感スル最多シトス故ニ流行ノ際殊ニ飲食ヲ慎ミ其他不攝生ノ事ヲ戒ムルヲ以テ至要トス

第十二條 飲料水ハ必ス無色無味無臭ノモノヲ撰ヒテ之ヲ用フヘシ若シ止ムヲ得ス其稍不良ノ疑アルモノヲ用フルハ之ヲ濾過スヘシ然レモ煮沸ノ後之ヲ用フルノ最良ナルニ如カス蓋シ病毒ハ公微ニシテ濾過力ヲ以テ盡ク之ヲ除キ去ルヘカラスト雖モ之ヲ煮沸スルモ其毒分ヲ全ク殲滅スルノ効アリトス

第十三條 氷及冷水ハ縱令ヒ其質不良ナラサルモ之ヲ過度ニ飲用スルモハ之カ爲メニ下利ヲ發スルモノナリ故ニ流行ノ際ハ過量ノ飲用ヲ戒ムヘシ但不良ナリト認ムルモノハ決シテ之ヲ用フヘカラスト

第十四條 酒ノ清醇ナルモノハ之ヲ適度ニ用フレハ害ナシト雖モ暴飲或ハ酸敗セルモノヲ用フレハ腸胃ヲ害シ或ハ下利ヲ發スルモノナレハ流行ノ際ハ必ス其品種ヲ擇ヒ務メテ飲量ヲ節減スルヲ良トス

第十五條 食物ハ新鮮ノ肉類消化シ易キ蔬菜ヲ用ヒ平生ノ慣用ヲ改メサルヲ良シトス但良好ノ食物ト雖モ之ヲ過食スレハ亦腸胃ヲ害シ此病ニ感シ易キ故ニ流行ノ際ハ務メテ適度ニ食シ不消化物ヲ避ケ殊ニ不熱ノ果實ヲ食フヘカラスト

第十六條 雨濕或ハ夜氣ニ胃觸シ或ハ過度ノ勞役等皆此病ニ感シ易キヲ以テ流行ノ際ニハ殊ニ之ヲ慎ムヘシ

第十七條 流行ノ際ニ當テハ感冒下利ヲ豫防センカ爲メ紋羽、木綿等ニテ小腹ヲ巻キ務メテ適度ノ温暖ニ其身ヲ保持スルヲ良トス

第十八條 流行ノ際能ク此攝生法ヲ守リ腸胃健全ナルモハ些少ノ病毒ヲ受シルモ猶ホ其病害ヲ免ル、ト無シトセス看護人及汚穢物、死體等ニ直接スルモノ、如キハ尤之ニ注意セサルヘカラスト

第十九條 凡ソ豫防ハ平日攝生ノ謹嚴ナルヲ至要トス世間往々豫防藥ト稱スル方劑アリ

ト雖モ多クハ無稽ノ考案ニ出テ之ヲ服用スルモ功ナキモノ多シトス

第三項 隔離法

第廿條 虎列刺病ハ患者ニ直接スルモ必スシモ感染スルノ理ナシト雖モ其吐瀉物ニ汚レタル患者ニ接シ又ハ其汚染セル物品等ニ觸ル、キハ其媒介ニ因リ病毒ヲ傳フ故ニ患者ト健者トチ隔離スルヲ以テ豫防ノ要法トス

第廿一條 虎列刺病ハ眞症ト類似トナ論セズ醫師診斷シタルキハ直ニ其家ノ門戸ニ病名票ヲ貼附スヘシ

但患者治癒又ハ死亡若クハ避病院ニ送致シ其病室ニ消毒法ヲ行ヒタル後ハ即其病名票ヲ去ルヘシ

第廿二條 患者ノ吐瀉物ハ之ヲ金屬製或ハ陶製ノ漱盤、便器等ニ承ケ木製ノ器ハ其毒滲浸ノ恐アリトス毎回消毒法ヲ施シ壺或ハ桶ニ入レ戶外ニ置き之ニ密蓋ヲナシ運搬夫ニ付シ人家遠隔ノ地ニ搬送セシメ溝渠、芥溜、田圃等ニ投棄スヘカラス且患者ノ入りタル廁圍ハ決シテ他人チシテ入ラシムヘカラス又初發嘔吐セシ地面等ノ處置ハ第八十一條消毒法ニ依ルヘシ

シ但吐瀉物等ヲ運搬スルキ日中ハ虎列刺吐瀉物ト表記アル號旗ヲ用ヒ夜中ハ之ニ換フルニ提燈ヲ以テスヘシ

第廿三條 患者ハ其室ヲ異ニシ看護人ノ外ハ成タケ接近スヘカラス又止ムヲ得サル事故アルノ外他人ト交通ヲ絶ツヘシ

但家人ニ要用アリテ來訪スル人アルトハ成タケ戶外ニ於テ之ト應接シ屋內ニ入ラシムヘカラス此時ニ於テハ家人及來訪人ニ消毒法ヲ行フヲ要セス

第廿四條 家族中ニ於テモ看護人ヲ定メ其他要用アル者ノ外老幼ハ成タケ早ク他家ニ避退セシムヘシ

但看護人ハ成タケ其人ヲ更換セサルヲ良トス

第廿五條 病室內ニハ不用ノ器具ヲ置クヘカラス

第廿六條 患者若シ死亡スルキハ成タケ其屍傍ニ接近シ又ハ死體ニ沐浴セシムル等ノ事ヲセサルヲ良トス

第廿七條 患者治癒若クハ死亡シ病室ニ消毒法ヲ行ヒシ後ハ家人其室內ニ起臥スルモ妨

ナシト雖モ若シ之ヲ用ヒサルモ日用ニ差支ナキ家ニ於テハ數日間空室ノモ、窓戸ヲ開放シ大氣ヲ流通セシムヘシ

第廿八條 西洋形船舶航海中ニテ發病者アルキハ其室ヲ異ニスヘシ或ハ之ヲ艙ノ方ニ移スモ可ナリ其看護人ノ外交通ヲ絶ツテ猶ホ人家ニ於ケルカ如クスヘシ

第廿九條 船舶内ノ病室ニハ看護人ヲ定メテ吐瀉物ヲ承クルヲ第廿二條ノ如クシ航海中ハ每回海中ニ投棄スヘシ尤港灣、河湖等ニ於テハ之ヲ投棄スヘカラス必ス最密ノ地方ニ著シ其地警察官吏或ハ衛生委員ノ指圖ヲ受クヘシ

第三十條 船舶ヨリ患者若クハ死者ノ届アルキハ警察官吏、衛生委員ニ於テ検査ノ上患者ハ之ヲ隔離シ死者及汚穢物ハ消毒法ヲ行ヒ第五十四條ヨリ第五十八條マテニ依リ處置スヘシ

第三十一條 製造所、會社、學校、旅店等ニ在テ發病シ引取人ナキ者並ニ狹隘不潔ノ地ニ雜居スル者等ニシテ看護、消毒法行届カス病毒ノ傳播ヲ防キ難キ時ハ之ヲ避病院ニ送ルヘシ若シ避病院アラサルキハ適當ノ空屋ニ移シテ之ヲ隔離スヘシ

第三十二條 避病院ノ位置ハ人家ニ接近セス且運搬ニ便ナル地ヲ撰フヘシ然レモ井泉、河流ノ近傍或ハ往來多キ路傍等ニ設クヘカラス又監獄、墓地、火葬場等ノ跡ハ用ヒサルヲ良トス

第三十三條 避病院ヲ新ニ構造スル時ハ空氣ノ流通ヲ主トシ善美ヲ要セス其牀ヲ高クシ窓戸ヲ潤大ニシ且板壁ヲ用ヒテ洗淨ニ便ニスヘシ但シ板葺、苫葺等ハ其一時ノ便ニ任セテ可ナリ

第三十四條 避病院ノ廣狹ハ大約人口千人ニ患者一人ノ割合ヲ以テシ例ヘハ人口六千人ノ町村ナレハ患者六人分ニシテ每人二坪ト見積リ十二坪ノ病室ヲ要スルノ類ナリ尤流行ノ勢ニ因リテハ建坪ヲ増加スルヲ得ルノ餘地ヲ豫メ計畫シ置クヘシ

第三十五條 避病院ノ病室ハ重症、輕症及快復期ノ患者ヲ區別シテ之ヲ分隔シ二坪ニ患者一人ヲ置クヲ常トシ縱令ヒ患者輻湊ストモ一坪ニ一人ノ割合ヨリ狹クスヘカラス但此他醫師詰所、事務所、看護人休息所等便宜ニ之ヲ設クヘシ

第三十六條 避病院ニハ簡易ノ蒸室ヲ設クヘシ其構造ハ凡ソ一二坪許ノ小室ニシテ蒸

蒸氣ノ漏散セサル様密閉シ得ヘカラシメ其内ニ竿ヲ架シ或ハ繩ヲ張り衣服等ヲ掛クルニ便ニス其小ナルモノハ尋常ノ戸棚等ヲ以テ之ニ當ツヘシ

第二十七條 避病院ノ門側ニハ輕易ナル風呂ヲ設ケ見舞人、看護人等外出ノ時入浴ノ用ニ供スヘシ

第三十八條 避病院ニハ別ニ清淨ナル屍室ヲ設ケ患者若シ死亡シタルトハ直ニ此ニ移スヘシ

但屍室ハ親族ノ弔者ヲ容ル、カ爲メ其餘地ヲ設クヘシ

第二十九條 人家稀疏ノ村落ニ於テハ必スシモ避病院ヲ設クルヲ要セス若シ相當ノ空屋等アラハ假リニ之ヲ用フヘシ

第四十條 普通病院ニハ決シテ虎列刺患者ヲ入ルヘカラス

但別ニ傳染病室ノ設アルモノハ此限ニアラス

交代セシムヘシ

但看護人ニハ其表記アル衣服ヲ著セシメ且成タケ其人ヲ交換セシメサルヲ良トス

第四十二條 避病院ニ在ル患者ノ親族又ハ別段ノ交誼アル者看護ヲ爲サンコトヲ望ムトハ之ヲ許スヘシ

但其看護人ハ多人數ナラサルヲ要シ且屢更替スルヲ許サルヘシ

第四十三條 避病院ニ在ル患者ノ親族又ハ別段ノ交誼アル者ハ其見舞ヲ許スヘシト雖モ室内ニ於テ飲食ヲ嚴禁シ且吐瀉物ニ接觸セサル様切ニ注意スヘシ

第四十四條 避病院ニ在ル患者ノ病况危篤ニ至ルトハ速ニ其家ニ通知シ若シ死亡スルトハ入棺セサル前ニ其死體ヲ家族ニ示スヘシ

第四十五條 流行ノ勢猛劇ニ及ヒ其地ノ群集事業ヲ差止ムルトハ先ツ祭禮、劇場、寄席等ヲ差止メ止ムヲ得サル場合ニ至ラサレハ學校、製造所等ヲ差止ムヘカラス又社寺參拜等ノ爲メ多人數旅行スルトチ差止ムルコトアルヘシ

第四項 消毒法

第四十六條 虎列刺ノ病毒ハ其吐瀉物ニ含レリ故ニ吐瀉物及之ニ汚染スルモノハ嚴ニ消毒法ヲ行フヘシ就中之ヲ燒滅スルヲ以テ最良法トス患者及其死體ハ直ニ病毒ヲ傳フル者ニ非スト雖モ吐瀉物ニ汚染スルヲ以テ亦病毒汚染物ト同視スヘシ

第四十七條 消毒法ハ其物ニ從テ區別スルヲ左ノ如シ

第一 患者及看護人等消毒法

第四十八條 患者治癒ノ後始テ他人ト交通シ又ハ避病院ヨリ退出ノ節ハ必ス沐浴シ石鹼水ヲ用テ全身ヲ洗ヒ他ノ衣服若クハ消毒法ヲ施シタル衣服ヲ著スヘシ吐瀉物運搬人及避病院ノ醫師、看護人、死體取扱人等ノ他人ニ接スルキモ亦此法ニ從フヘシ

第四十九條 看護人及患者死體運搬人又ハ船中ニテ患者ト同席シタル者ノ他人ト交通スルキニハ必ス沐浴更衣スヘシ

第五十條 病家ニ於テ止ムヲ得サル事故アリテ看護人其他患者ニ親接セル者ノ他出スルキハ必ス其身體ヲ洗淨シテ更衣スヘシ

第五十一條 自宅患者ヲ往診セル醫師及患者ノ家人ニシテ直接セサル者親戚朋友ノ一時

見舞タル者等ハ消毒法ヲ行フヲ要セサレモ其家ヲ出ルニ臨テ盥漱スルヲ良トス

但若シ誤テ吐瀉物ノ爲メニ其衣服等ヲ汚シタルキハ稀薄石炭酸水(第二)ヲ噴注シ或

ハ沸湯ヲ以テ之ヲ洗ヒ然ル後第六十二條六十三條ニ依リ消毒法ヲ行フヘシ

第二 死體及排泄物等消毒法

第五十二條 死體ハ充分ニ稀薄石炭酸水(第二)ニ浸シタル單衣若クハ綿布等ヲ以テ之ヲ包ミ成タケ速ニ棺内ニ斂ムヘシ若シ濃厚石炭酸水(第一)ヲ用テ瀧腸シ然ル後綿ヲ以テ肛門ヲ塞クヲ得ハ最良トス

第五十三條 西洋形船舶航海中ニ死者アルキハ速ニ濃厚石炭酸水(第一)ニ浸シタル單衣若クハ綿布ヲ以テ之ヲ包ミ成タケ前條ノ瀧腸ヲ行ヒ假ニ棺内ニ斂メ通常屍室或ハ船中適宜ノ場所ヲ見計ヒ此ニ入レ置キ時々濃厚石炭酸水(第一)ヲ瀧注スヘシ

但陸地ニ著スル上ハ其地方ノ警察官吏衛生委員ニ届出處分スヘシ

第五十四條 死體ハ醫師確認ノ後速ニ火葬セシムヘシ火葬場ナキ地方ハ人家ニ離レタル所ニシテ地質鬆疎ナラサルノ地ヲ擇ヒ簡易ノ火葬場ヲ設ケテ之ヲ燒クヘシ

第五十五條 吐瀉物ハ之ヲ便器漱盤等ニ承ケ之ト同量ノ濃厚石炭酸水(第一)石炭酸若シ
際シテハ硫酸鐵合劑、硫酸錒鐵合劑、亞硫酸
溶液、生石灰等ヲ撰用スヘシ以下之ニ倣ヘ
二條ニ依ルヘシ

第五十六條 避病院及各病家ヨリ運搬シタル吐瀉物汚穢物ヲ燒却スルニハ其地方ニテ
定メ置キタル地質鬆疎ナラサル所ニ適宜ノ穴ヲ掘リ厚ク灰或ハ石灰ヲ穴底ニ敷キ乾キ
タル藁、飽屑、落葉、枯草ノ類ニ石炭油ヲ澱キテ其上ニ置キ之ニ吐瀉物ヲ投シ再ヒ同前ノ
燃料ヲ覆ヒテ火ヲ點スヘシ火勢滅スルトハ更ニ油ヲ注キテ屢々攪挑シ全ク燒盡スルヲ
期スヘシ且ツ其汚汁ノ地中ニ滲透セサル様注意スルヲ要ス

但燃料及裝置等ハ其地ノ便宜ニ隨フヘシ

第五十七條 患者ノ入りタル廁圍ノ糞汁ハ法ノ如ク燒却スヘキモ若シ大量ニシテ燒却シ難
キモノハ亞硫酸溶液(第十)糞汁ノ石炭酸末(第四)糞汁ノ若シ其缺乏ニ際シテハ生石灰
糞汁ノチ投シテ汲取リ一定ノ所ニ埋却シ其廁圍ニハ稀薄石炭酸水(第二)ヲ注入スヘシ
第三
第五十八條 吐瀉物ノ水分多クシテ燒却シ得サルキ之ヲ埋却スルニハ多量ノ濃厚石炭酸

水(第一)若クハ亞硫酸溶液(第十)ヲ灌キ一定ノ場所ニ於テ深ク埋却スヘシ

但吐瀉物ノ埋却場ハ豫メ井泉、河流及人家、道路等ニ接近セサル地ヲ撰定スヘシ

第五十九條 吐瀉物、汚穢物ヲ運搬スルニハ其地方ニ於テ豫メ取扱人夫ノ手續ヲ定メ流
行ノ間ハ毎日二三回病家ノ吐瀉物、汚穢物ヲ取集メ燒却若クハ埋却セシムヘシ尤其運
器ハ極テ注意シ臭氣ノ洩レサル様只臭氣ヲ恐ル、ニアラス其毒蒸發シテ空氣ニ混スルヲ恐ル、ナリ相當ノ器ヲ用ヒ且
其汚汁多量ニシテ蕩溢ノ恐アルキハ銹屑、落葉、枯草等ヲ入レテ之ヲ防クヘシ

但運器ノ木製ナルモノハ流行終熄ノ後盡ク燒却シ其金屬製及陶製ノモノハ稀薄石炭

酸水(第二)若クハ亞硫酸溶液(第十)ヲ以テ洗淨スヘシ

第六十條 食料ニ供スヘキ物品ノ現ニ病毒ニ汚染シタルモノハ勿論病毒侵染ノ嫌アルモ
ノハ都テ之ヲ燒却スヘシ

但現ニ病毒ニ汚染セサルモ其汚染ノ疑アルモノハ「サリシル」酸溶液(三百倍ノ水ニ溶解セルモノ)
ヲ以テ之ヲ洗淨スヘシ

第三 衣服、臥具等消毒法

第六十一條 衣服、臥具、蚊帳、疊、蓆等ノ甚シク吐瀉物ニ汚染シタルモノハ之ヲ燒却スヘシ
但船中積荷ノ吐瀉物ニ汚レタルモノモ亦之ニ倣フヘシ

第六十二條 衣服、臥具、蚊帳等吐瀉物ニ汚穢スル少ナクシテ洗濯ニ堪フヘキモノハ之ヲ
桶ニ入レ稀薄石炭酸水(第二)ヲ灌キ浸シ置クコト廿四時間ニシテ更ニ沸湯ヲ注キ四五分
時ヲ經ルノ後水ヲ以テ洗淨シ日光ニ曝スヘシ石炭酸等ノ缺乏スルキハ熱湯中ニ入レ一
時以上之ヲ煮沸スヘシ

第六十三條 衣服、臥具、蚊帳等ノ少シク吐瀉物ニ汚染シ洗濯ニ堪ヘサルモノハ其品種ニ
ヨリテ亞硫酸瓦斯(第九)若クハ石炭酸蒸氣(第二)ヲ以テ薰蒸シ或ハ熱氣消毒法ヲ行ヒ
シ後日光及大氣ニ曝スヘシ

第六十四條 死體ニ著セシ衣服ハ其消毒法ヲ行フコト第六十一條第六十二條及第六十三條
ニ同シ

第六十五條 避病院ニ用ヒタル蚊帳ハ其病室ニ在ルコト久キヲ以テ吐瀉物ニ汚染セサルモ
ノト雖モ都テ之ヲ煮沸シ或ハ熱氣消毒法ヲ施スヘシ

第六十六條 吐瀉物運搬人及避病院ノ醫師、看護人、死體取扱人等ハ患者及汚穢物ニ親接
スルコト久ク若クハ屢次ナルヲ以テ其衣服等ニ消毒法ヲ施スコト第六十二條第六十三條ニ
同シ

但本文ニ掲グル所ノ者日々衣服ヲ更換セハ沸湯中ニ入レ一時以上之ヲ煮沸スルヲ可
トス

第六十七條 看護人及患者死體運搬人又ハ船中ニテ患者ト同席シタル者ノ衣服、手道具
ハ直ニ病毒ニ汚染セサルモ稍々病毒侵染ノ疑アルヲ以テ第六十三條ニ依リ消毒法ヲ行
フヘシ

第四 家屋、船舶等消毒法

第六十八條 患者及死體ヲ置キタル室ノ疊、蓆類ハ之ヲ柱若クハ壁ニ倚セ懸ケ戸棚等ヲ
開放シ室内ニ在リシ諸器具ハ之ヲ排列シ窓戸ヲ密閉シテ六時乃至八時間亞硫酸瓦斯
(第九)ヲ薰シ然後窓戸ヲ開キ吐瀉物ニ汚染ノ嫌アル板敷等ハ稀薄石炭酸水(第二)ヲ
以テ之ヲ拭淨シ其他器具ハ石鹼水又ハ沸湯ヲ以テ洗淨シ充分大氣及日光ニ曝スヘシ避

病院ノ病室及屍室モ亦之ニ做フヘシ

但金銀器、書畫其他彩色ヲ施セル物及絹帛等亞硫酸ノ爲ニ其色質ヲ變化スルノ恐アルモノハ初ニ之ヲ取除ケ別ニ石炭酸蒸氣(第三)或ハ熱氣消毒法等ヲ適宜撰用スヘシ

第六十九條 患者アリタル西洋形船舶ハ其處置尋常ノ家屋ニ大異ナシト雖モ下等客室ニ至テハ衆多ノ乘客皆積荷ノ間ニ枕藉シ幾ント彼我ノ別ナキカ故ニ若シ其中ニ發病者アルキハ滿室ノ乘客積荷、手荷物等モ皆病毒ニ汚染シタル者ト看做シ乘客、手荷物ハ上陸ノ時充分ニ消毒法ヲ行ヒ積荷ハ其儘其室ニ於テ六時乃至八時間亞硫酸瓦斯(第九)或ハ品物ニヨリ石炭酸蒸氣(第三)ヲ薰スルノ後ニアラサレハ陸揚スルヲ許サス

第七十條 日本形小船ハ前條ノ方法ヲ斟酌シテ消毒法ヲ行ヒ海水ヲ以テ遍ク船身ヲ洗淨スヘシ

但海水モ亦消毒ノ効アルモノトス

第七十一條 避病院其他便宜ニヨリ他ノ家屋ヲ假用セシモノハ其病室ニ供セシ部分並ニ厠房ニ亞硫酸瓦斯(第九)ヲ薰シ後稀薄石炭酸水(第二)或ハ亞硫酸溶液(第十)ヲ注キ石

鹼水ヲ用ヒテ洗淨スヘシ尤亞硫酸薰蒸法ノ充分ナルキハ石炭酸水ヲ用フルヲ必要トセ

第七十二條 病室ハ不斷換氣法ニ注意スヘシ是亦多少消毒ノ効アルモノトス

第七十三條 臨時假設ノ避病院ニシテ其保存スヘカラサルモノハ流行終ル後之ヲ取毀ツヘシ尤其前先ツ汚穢シタル板敷、板壁及柱等ハ濃厚石炭酸水(第一)又ハ亞硫酸溶液(第十)ヲ以テ充分ニ洗淨シ數日間開放シテ大氣ニ曝スヘシ

第五 什具、運搬器等消毒法

第七十四條 吐瀉物ヲ承ケタル漱盤、便器等ハ之ヲ用フル毎ニ稀薄石炭酸水(第二)或ハ亞硫酸溶液(第十)ヲ以テ洗淨スヘシ其吐瀉物ニ汚染シタル紙屑、手拭其他之ニ類スル

モノハ悉皆取集メ第廿二條ニ載セタル壺或ハ桶ニ投シ濃厚石炭酸水(第一)或ハ亞硫酸溶液(第十)ヲ注キ吐瀉物ト共ニ之ヲ運搬セシムヘシ

第七十五條 患者必要ノ手道具ヲ携ヘ避病院ニ入ル者ハ出院ノ時必ス亞硫酸瓦斯(第九)ノ薰蒸法ヲ行ヒ之ヲ交付スヘシ

第七十六條 患者及死體若クハ病毒ニ觸レタル物品ヲ運ヒタル舁舟、車駕及運搬器等ハ稀薄石炭酸水(第二)ヲ灌注シ更ニ石鹼水若クハ沸湯ヲ以テ洗淨スヘシ其舁舟ノ如キハ海水ヲ以テ洗フモ可ナリ

第七十七條 病室ニ用ヒタル什具ハ總テ稀薄石炭酸水(第二)或ハ亞硫酸溶液(第十)ヲ灌キ然ル後石鹼水又ハ沸湯ニテ洗淨シ乾カスヘシ其洗フヘカラサルモノハ病室ニ消毒法ヲ行フノ際其内ニ排列シハ之ヲ濕スナ良トス 亞硫酸瓦斯(第九)或ハ石炭酸蒸氣(第三)ヲ以テ一時間蒸蒸スヘシ

第七十八條 書籍、新聞紙ノ類病室ニ在リタルモノハ之ヲ緋展シ石炭酸蒸氣(第二)若クハ亞硫酸瓦斯(第九)ヲ蒸蒸スヘシ或ハ熱氣消毒法ヲ行フモ可ナリ

第七十九條 醫術器械及木製、金屬製、陶製、漆製等ノ諸器ハ總テ稀薄石炭酸水(第二)ヲ以テ洗フヘシ

第六 厠屋、溝渠等消毒法

第八十條 患者ノ入りタル厠屋及嘔吐シタル地ニハ充分亞硫酸溶液(第十)或ハ硫酸鐵合劑(第五)ヲ注キ其厠屋ノ糞汁ハ速ニ悉皆之ヲ汲取リ相當ノ消毒ヲ行ヒ終ルノ間ハ他人ノ入ルヲ禁シ其嘔吐シタル地ハ速ニ之ヲ掃除シ其土ヲ更換スヘシ且其糞尿及嘔吐シ穢土ハ人家遠隔ノ地ニ於テ燒却若クハ埋却スヘシ

第八十一條 糞壺及桶ノ破壞シテ病毒滲漏ノ疑アルモノハ速ニ之ヲ掘除ケ其周圍并ニ底面ノ土モ亦深ク掘取リ濃厚石炭酸水(第一)或ハ亞硫酸溶液(第十)ヲ十分ニ灌注シテ人家遠隔ノ地ニ埋却シ其跡ニモ同様ノ消毒藥ヲ注キ更ニ新土ヲ填ムヘシ 但其消毒藥ノ量ハ其壺中糞汁ノ多少ニ因リ斟酌スヘシ大抵糞汁五分ノ一乃至三分ノ一タルヘシ嘔吐物モ亦之ニ準ス

第八十二條 若シ誤テ吐瀉物ヲ溝渠、下水等ニ投棄スルコトアルトハ十分ニ亞硫酸溶液(第十)或ハ硫酸硫酸鐵合劑(第六)ヲ注キ其淤泥ヲ撈ヘ得ヘキモノハ之ヲ撈ヘテ人家遠隔ノ地ニ搬送シテ埋却スヘシ或ハ多量ノ水ヲ灌キテ疏通セシムヘシ

但本條ノ如キ場處ニ於テ既ニ病毒ヲ混入スルルハ消毒法モ其功ヲ奏シ難ク終ニ増殖ヲ致サシムヘシ故ニ豫メ戒諭シテ誤テ之ニ投棄シ或ハ陰ニ投棄スル等ノ事ナカラシ

ムルヲ要ス

○腸室扶私

腸室扶私(英名泰裏士)ハ從來神經熱、稽留熱、腸熱、傷寒、溫疫等ト稱スルモノ多ク之ニ屬ス而シテ此病ハ時ヲ撰ハス不斷散在性トナリ或ハ地方性ト爲リ或ハ流行性トナリテ發スト雖モ夏月旱魃後秋涼ノ候ニ於テ最多ク流行スルモノナリ此病ノ流行ハ空氣ノ不潔、飲料水ノ汚濁、食物ノ不良等之カ因トナルモノニシテ其病毒ハ特ニ患者ノ糞尿ニ由リテ傳播スル者ナリ然レモ其毒發疹室扶私、天然痘等ノ如ク揮發性ノモノニ非サルヲ以テ豫防ノ方法モ亦其趣ヲ異ニシ專ラ其糞尿ニ注意スルヲ以テ緊要ノ目的ト爲スヘシ

第一項 清潔法

第一條 腸室扶私ノ病毒ハ汚穢ノ地ニ萌動シテ飲料水ニ混シ其毒ヲ傳播セシムルノ例少カラス蓋シ是等ノ害ハ清潔法ヲ怠リ或ハ排泄物ヲ漫ニ放棄シ或ハ糞壺若クハ桶ニ破隙アル等ノ疎漏ヨリ生スルモノニシテ廁間ト飲料水トノ注意ハ最肝要ナリ故ニ廁間、芥

溜、溝渠、下水等ノ掃除ヲ忽ニスヘカラス

但一處ノ水ヲ飲ム者一時ニ此病ニ罹ルコト多人数ナルキハ直ニ其水ヲ試驗シ不長ナレハ其飲用ヲ禁スヘシ

第二項 攝生法

第二條 此病ハ不潔ノ飲料水若クハ食物等ヨリ來ルモノナルカ故ニ消化シ易キ物ヲ食シ清淨ナル水ヲ飲ムヘシ若シ善良ノ水ヲ得難キトハ必之ヲ濾過煮沸シテ用フヘシ其他胃寒、疲勞等ヲ戒ムヘシ

第三項 隔離法

第三條 醫師ノ腸室扶私ト診斷シタルキハ直ニ其家ノ門戸ニ病名票ヲ貼附スヘシ但患者治癒又ハ死亡若クハ避病院ニ送致シ其病室ニ消毒法ノ行ヒタル後ハ即其病名票ヲ去ルヘシ

第四條 患者ハ成タケ其室ヲ異ニシ他人ト交通ヲ絶テ看護人ハ年齡四十歳以上ノ者若クハ一回此病ニ罹リシ者ヲ撰フヘシ少壯ノ者ヲ用フヘカラス

但航海船中ニ於テ發病者アルキモ本條ニ從ヒ處置スヘシ

第五條 一家ニ數人此病ニ罹ル者アルキハ相當ノ看護人ヲ留メ其他ノモノハ他家ニ避退セシムヘシ

第六條 流行盛ナルニ際シ既ニ避病院ヲ設クルニ至ラハ狹隘不潔ノ地ニ雜居シ隔離行届キ難キモノハ入院セシムヘシ

但避病院ノ位置、廣狹及區別法等ハ虎列刺ノ部第三十二條以下第三十八條迄ニ照依シテ之ヲ斟酌スヘシ

第四項 消毒法

第七條 腸室扶私患者ノ瀉下物及之ニ汚染シタル衣服、器具等並ニ其病室、廁間、便器等ハ盡ク病毒傳播ノ恐アルキヲ以テ左ノ區別ニ從ヒ消毒スヘシ

第一 患者及看護人等消毒法

第八條 患者治癒ノ後始テ他人ト交通シ又久シク此患者ニ親接セル看護人ノ他人ト交通スルキハ沐浴換衣スヘシ

第二 死體及排泄物等消毒法

第九條、死體ハ速ニ棺内ニ斂メシムヘシ若シ濃厚石炭酸水(第一)ニ浸セル綿ヲ以テ肛門ヲ塞クコトヲ得ハ最良トス

第十條 糞尿ハ之ヲ便器ニ承ケ稀薄石炭酸水(第二)ヲ注キ速ニ人家遠隔ノ地ニ搬送シテ之ヲ埋却スヘシ

但埋却ノ地ハ井泉、河流ノ近傍ヲ避クヘシ

第三 衣服、臥具等消毒法

第十一條 衣服、臥具ノ糞尿ニ汚染シタルモノハ稀薄石炭酸水(第二)ヲ以テ洗淨シ或ハ之ヲ煮沸シテ後石鹼水ヲ以テ洗淨スヘシ

第四 家屋、船舶等消毒法

第十二條 患者及死體ヲ置キタル家屋、船舶及避病院ノ病室、屍室ハ亞硫酸瓦斯(第九)ヲ蒸シ或ハ石炭酸水(第二)ヲ以テ拭淨スヘシ

但室内ハ常ニ注意シテ空氣ヲ流通スヘシ

第五 什具、運搬器等消毒法

第十三條 什具、運搬器ハ直ニ糞尿ニ汚穢スルニ非サレハ消毒ヲ要セサレハ其汚穢セルモノハ亞硫酸溶液(第十)ヲ以テ洗滌スヘシ或ハ其品種ニヨリ熱湯ヲ注キテ後石鹼水ヲ以テ洗フヘシ

但木製ノ便器ハ其用ヲ終ルノ後之ヲ燒却スヘシ

第六 厠間、溝渠等消毒法

第十四條 若シ誤テ患者ノ糞尿ヲ厠間、溝渠ニ混入セシキハ硫酸鐵合劑(第五)ヲ注キテ之ヲ汲取り人家遠隔ノ地ニ搬送シテ埋却スヘシ溝渠ハ「コロール」石灰ヲ撒布シ水ヲ以テ疏通セシムヘシ

○赤痢

赤痢ハ一種ノ傳染病ニシテ其病毒地中ニ萌動シ人體ヲ侵スキハ必ス大腸ニ着キテ下利ヲ發スルモノナリ然シテ此患者ノ瀉下スル所ノ糞尿ハ其病毒ヲ含有シテ水中、地中或ハ氣中ニ散漫シ因テ廣ク他人ニ侵染スルニ至ルモノトス

此病毒ノ發生ヲ助クルハ温熱ト濕滯トニ因ルモノナレハ熱帶地方ニ於テハ殆ント周歲絶ルヲナク且多クハ惡性ナリ又暖帶地方ニ於テハ季夏初秋ノ候ニ行ル、ヲ以テ常トス又土地ノ景況ニ從テ一地方ニ限り流行スルヲアリ或ハ惡性ニシテ廣ク流行スルヲアリ此ノ如キ時ニ臨テハ務テ豫防法ニ注意シ其宜キヲ得ハ良性ノモノハ之ヲ撲滅スヘク惡性ノモノハ之ヲシテ良性ニ至ラシムルヲ得ヘシ故ニ流行ニ際シテ豫防ノ法ヲ忽ニスヘカラス

第一項 清潔法

第一條 此病毒ハ汚濕ノ土地ニ萌動シテ氣中或ハ水中ニ混シ終ニ人體ヲ侵襲スルモノナルカ故ニ厠間、溝渠、芥溜、下水及魚市、屠場等ノ不潔ナル場所ハ勿論殊ニ監獄、製造所等ハ最掃除ヲ嚴ニスヘシ

但一處ノ水ヲ飲ム者一時ニ此病ニ罹ルト多人數ナルキハ直ニ其水ヲ試驗シ不良ナレハ其飲用ヲ禁スヘシ且清潔法ノ細目ハ能ク虎列刺ノ部ヲ參考シテ之ヲ斟酌スヘシ

第二項 攝生法

第二條 此病ハ老少ノ別ナク皆之ニ感スルノ素因アルカ如シト雖モ就中一回之ヲ患ヘシ

者及不潔ノ地處ニ住居スル者不良ノ水ヲ飲用スル者及露臥、夜行、過度ノ勞力等都テ不攝生ノ者ハ之ニ感シ易シトス又流行ノ際ニ當テハ下利、秘結モ亦此病ノ誘因トナル故ニ宜ク之ニ注意シテ攝生ノ法ヲ守ルヘシ殊ニ此病ニ罹リシ者快復ニ向ハントスルルハ更ニ飲食ノ攝生ヲ嚴ニスヘシ些少ノ不消化物ヲ食フモ亦此病ノ再發ヲ促スノ恐アレハナリ

第三項 隔離法

第三條 此病毒ハ專ラ其瀉下物ニ在ルヲ以テ之ニ汚染セル衣服、便器、醫術器械等ハ勿論其他ノモノモ亦皆傳播ノ媒介トナル故ニ患者ヲ隔離スルヲ以テ豫防ノ第一要法トス其惡性ノモノハ最此注意ヲ忽ニスヘカラス

第四條 醫師ノ赤痢ト診斷シタル時ハ直ニ其家ノ門戶ニ病名票ヲ貼附スヘシ

但患者治癒又ハ死亡若クハ避病院ニ送致シ其病室ニ消毒法ヲ行ヒタル後ハ即其病名票ヲ去ルヘシ

第五條 患者ハ其室ヲ異ニシ看護人ノ外ハ成ダケ之ニ接近スヘカラス又老幼等ハ速ニ他

家ニ避退セシムヘシ

第六條 若シ一家ニ數人此病ニ罹ル者アルキハ看護人ヲ留メ其他ノモノハ他家ニ避退セシムヘシ

第七條 患者ハ必他人ト廁圍、便器等ヲ共用セシムヘカラス其瀉下スル所ノ糞尿ハ成ダケ之ヲ便器ニ承ケ速ニ消毒法ヲ行ヒ之ヲ人家遠隔ノ地ニ搬送シテ燒却スヘシ

但便器ハ成ダケ金屬製或ハ陶製等ニシテ蓋アルモノヲ良トス

第八條 患者治癒若クハ死亡ノ後ト雖モ病室ニ消毒法ヲ行フニアラサレハ其中ニ起臥スヘカラス

第九條 航海船中ニ患者アルキハ看護人ヲ定メ便器ヲ以テ其瀉下物ヲ承ケ毎回必海中ニ投棄スヘシ

但港灣及河湖等ニ於テハ瀉下物ヲ投棄スヘカラス最寄陸地ニ於テ之ヲ燒却スヘシ

第十條 避病院ノ位置、廣狹及區別法等ハ虎列刺ノ部第三十二條以下第三十八條迄ニ照依シテ之ヲ斟酌スヘシ

第十一條 狹隘不潔ノ住居若クハ製造所、會社、學校、旅店等ニ於テ發病スル者ハ成ク尠シ
病院ニ送致スヘシ

第十二條 避病院看護人ノ分配、來訪人ノ處置等ハ虎列刺ノ部第四十一條ヨリ第四十四
條迄ニ照依シテ之ヲ斟酌スヘシ

第十三條 普通病院アル地方ニ於テハ、院内ヲ區隔シ避病室ト爲シ患者ヲ入ルヘシ又人家
稀疎ノ村落ニ於テハ相當ノ空屋ヲ用フルモ可ナリ

第四項 消毒法

第十四條 患者ノ瀉下物及之ニ汚染セル衣服、臥具等并ニ病室、廁間、便器等ハ盡ク病毒傳
播ノ恐アルヲ以テ左ノ區別ニ從ヒ消毒スヘシ

第一 患者及看護人等消毒法

第十五條 患者治癒ノ後始テ他人ト交通シ又ハ避病院ヨリ退出ノ節ハ必ス沐浴シ石鹼水
ヲ用テ全身ヲ洗ヒ他ノ衣服若クハ消毒法ヲ施セシ衣服ヲ着スヘシ瀉下物運搬人及避病
院ノ醫師、看護人、死體取扱人等ノ他人ニ接スルキモ亦此法ニ從フヘシ

第十六條 看護人及患者屍體運搬人ノ他人ト交通スルキニハ必ス沐浴更衣スヘシ

第二 死體及排泄物等消毒法

第十七條 死體ハ充分ニ稀薄石炭酸水(第二)ニ浸シタル單衣若クハ綿布等ヲ以テ之ヲ包
ミ成クケ速ニ棺内ニ歛ムヘシ若シ濃厚石炭酸水(第一)ヲ用テ灌腸シ然ル後綿ヲ以テ肛
門ヲ塞クヲ得ハ最良トス

但此患者ノ死體ハ最腐敗シ易キヲ以テ速ニ棺内ニ歛メ且成クケ速ニ之ヲ火葬若クハ
埋葬セシムヘシ

第十八條 便器ニ承ケタル瀉下物ハ濃厚石炭酸水(第一)或ハ硫酸鐵合劑(第五)硫酸硫酸
鐵合劑(第六)亞硫酸溶液(第十)等ヲ混和シ屋外ニ持出シ壺或ハ桶ニ入レテ密蓋シ人家
遠隔ノ地ニ搬送シテ燒却スヘシ其燒却法ハ虎列刺ノ部第五十六條ヲ參照スヘシ

第十九條 甚シク瀉下物ニ汚染シタル紙及綿布等ハ悉皆取集メ之ヲ燒却スヘシ

第三 衣服、臥具等消毒法

第二十條 衣服、臥具、蚊帳、疊、蓆等ノ甚シク瀉下物ニ汚染シタルモノハ之ヲ燒却スヘシ其汚

穢スル少クシテ洗濯シ得ヘキモノハ之ヲ桶ニ入レ稀薄石炭酸水(第二)ヲ濯キ浸シ置ク
一廿四時間ニシテ更ニ沸湯ヲ注キ四五分時ヲ經ルノ後水ヲ以テ洗浄シ日光ニ曝スヘシ
若シ石炭酸等ノ缺乏スルキハ熱湯中ニ入レ一時以上之ヲ煮沸スヘシ

第廿一條 其少ク瀉下物ニ汚染シ洗濯スヘカラサルモノハ其品種ニヨリ亞硫酸瓦斯
(第九)若クハ石炭酸蒸氣(第三)ヲ以テ薰蒸シ或ハ熱氣消毒法ヲ行ヒシ後日光及大氣ニ
曝スヘシ

第廿二條 死體ニ着セシ衣服ノ消毒法ハ前二條ニヨリ之ヲ施スヘシ

第廿三條 瀉下物運搬人及避病院ノ醫師、看護人、死體取扱人等ハ患者及汚穢物ニ久シク
觸接セルヲ以テ其衣服等ニ消毒法ヲ施スコト第廿一條第廿一條ニ依ルヘシ

但日々衣服ヲ更換スル者ハ沸湯ニ入レ一時以上之ヲ煮沸スルヲ以テ足レリトス

第廿四條 看護人及患者死體運搬人ノ衣服、手道具等直ニ病毒ニ汚染セサルモ稍、浸染ノ
疑アルモノハ石炭酸蒸氣(第三)或ハ亞硫酸瓦斯(第九)ヲ以テ薰蒸シ日光及大氣ニ曝ス
ヘシ

第四 家屋、船舶等消毒法

第廿五條 患者及死體ヲ置キタル室ノ疊、席類ハ之ヲ柱若クハ壁ニ倚セ掛ケ戸棚等ヲ開
放シ室内ニ在リシ諸器具ハ之ヲ排列シ窓戸ヲ密閉シテ六時乃至八時間亞硫酸瓦斯(第
九)ヲ薰シ然ル後窓戸ヲ開キ病毒附着ノ恐アル板敷等ハ稀薄石炭酸水(第二)ヲ撒布シ
更ニ之ヲ拭淨シ其他器具ハ石鹼水又ハ沸湯ヲ以テ洗浄シ充分大氣及日光ニ曝スヘシ避
病院ノ病室及屍室モ亦之ニ倣フヘシ

但亞硫酸ノ爲メ其色質ヲ變化スルノ恐アルモノハ石炭酸蒸氣(第三)或ハ熱氣消毒法
等ヲ撰用スヘシ輕症痢病ノ如キハ必スシモ本條ノ處置ヲ要セス醋水若クハ「コロト
ル」水ニテ室内ヲ拭淨スルヲ以テ足レリトス

第廿六條 患者アリタル船室ノ消毒法モ亦前條ニ同シ

第廿七條 普通病院ニシテ區隔セシ病室及一時假用セシ家屋等ノ消毒法モ亦前條ニ同シ
但病室ハ數多ノ患者交、此内ニ入ルヲ以テ惡性ノ痢病ナラサルモ尙ホ前條ノ消毒法
ヲ用フヘシ

第五 什具、運搬器等消毒法

第廿八條 便器ハ之ヲ用フル毎ニ稀薄石炭酸水(第二)亞硫酸溶液(第十)ヲ以テ洗滌スヘシ

第廿九條 患者及死體若クハ瀉下物ニ汚染シタル物品ヲ運ヒタル諸器ハ稀薄石炭酸水

(第二)ヲ灌注シ更ニ石鹼水若クハ沸湯ヲ以テ洗滌スヘシ

第三十條 病室内ニ用ヒタル什具及醫用器械等ハ稀薄石炭酸水(第二)或ハ亞硫酸溶液

(第十)ヲ注キ然ル後沸湯ニテ洗淨スヘシ

第六 厠間、溝渠等消毒法

第三十一條 患者ノ入りタル厠間ハ他人ノ入ルヲ禁シ亞硫酸溶液(第十)或ハ硫酸鐵合劑

(第五)ヲ注キ其瀉下物ハ速ニ之ヲ汲取り人家遠隔ノ地ニ搬送スヘシ而シテ其糞壺ニハ復々同様ノ消毒法ヲ行フヘシ

第三十二條 糞壺及桶ノ破壊シテ病毒滲漏ノ疑アルモノハ之ヲ掘除ケ其周圍ノ土ヲ掘取リ濃厚石炭酸水(第一)或ハ亞硫酸溶液(第十)ヲ充分ニ灌注シ人家遠隔ノ地ニ搬送シテ

埋却スヘシ

但消毒藥ノ量ハ其壺中糞量五分一乃至三分一ナルヘシ

第三十三條 若シ誤テ吐瀉物ヲ溝渠、下水等ニ投棄スルコアルキハ充分ニ亞硫酸溶液(第十)

(甲)或ハ硫酸硫酸鐵合劑(第六)ヲ注キ其淤泥ノ撈ヘ得ヘキモノハ之ヲ撈ヘテ人家遠隔ノ地ニ搬送シテ埋却スヘシ或ハ多量ノ水ヲ灌キテ疏通セシムヘシ

但本條ノ如キ場處ニ於テ既ニ病毒ヲ混入スルキハ消毒法モ其功ヲ奏シ難ク終ニ増殖

ヲ致サシムヘシ故ニ豫メ戒諭シテ誤テ之ニ投棄シ或ハ陰ニ投棄スル等ノ事ナカラシムルヲ要ス

○實布埤利亞

實布埤利亞ハ一種ノ猛烈ナル傳染病ニシテ其毒ハ患者ノ痰唾、涕汁等ニ含リ又呼出スル所ノ空氣モ其毒ヲ包含スルヲ以テ之ニ觸ル、時ハ老少ニ論ナク皆之ニ感スルモノナリ而シテ幼穉ノ者ハ之ニ罹ルコト最多クシテ且危險ナリトス抑、此病毒ハ其發生時季ヲ擇ハス又風土ニ關涉スルコトナク不斷散在スルコトアリ又一時ニ廣ク流行スルコトアリ此症ハ必咽喉ニ

發スルモノニシテ之カ爲メニ其部ノ壞爛ヲ致シ甚シキモノハ須臾ニシテ斃ル故ニ從來喉風、喉痺、馬癩風、纏喉風、咽氣ト唱フルモノ、中亦往々之有リ此病ハ患者ニ觸接セサルモ、尙感染ノ恐アルモノニシテ且其毒久ク消滅セサルカ故ニ隔離消毒ノ方法ヲ忽ニスヘカラス

第一項 清潔法

第一條 此病流行ノ際ハ務テ一般清潔法ニ注意シ既ニ發病スルキハ其室内ノ掃除ヲ怠ルヘカラス家屋、衣服等清潔ニシテ且隔離法充分ナルキハ廣ク流行ニ至ラスシテ消熄スルヲ得ヘシ

第二項 攝生法

第二條 此病ハ殊ニ咽喉ヲ侵スモノニシテ既ニ些少ノ咽吭炎アルモノハ自ラ侵襲ヲ被リ易シ故ニ專ラ口内、喉頭、氣管等ノ炎症ヲ誘發スヘキ事件ヲ戒メ常ニ含漱スルヲ良トス

但其誘發スヘキ事件トハ頸圍ヲ温保セシモノ、驟ニ寒冷ニ觸シ或ハ苛烈ノ飲食料ヲ

用ヒ或ハ高談放歌シ或ハ幼稚ヲシテ頻ニ號泣セシメ及小學校ニ於テ妄ニ高聲ヲ發シ讀書唱歌セシムル等ニシテ皆宜ク之ヲ戒ムヘシ

第三項 隔離法

第二條 醫師ノ實布埜利亞ト診斷スルキハ其家ノ門戸ニ病符票ヲ貼附スヘシ

但患者治癒或ハ死亡若クハ避病院ニ送致シ其病室ニ消毒法ヲ行ヒタル後ハ即其病名票ヲ去ルヘシ

第四條 此病ハ患者ニ接觸シ或ハ患者ノ痰唾ニ汚染セル物品若クハ室内ノ空氣ヨリ傳染スルヲ以テ患者ハ速ニ之ヲ隔離シ看護人ノ外ハ漫ニ接近セシム可カラス殊ニ小兒ヲ遠サシヘシ

但室内ノ空氣ハ常ニ新鮮ナラジムルヲ要ス

第五條 病兒ハ健兒ト共ニ遊戯セシムヘカラス又學校等ニ行カシムヘカラス

第六條 病室内ニハ不用ノ衣服及器具ヲ置クヘカラス

第七條 患者ノ用フル所ノ飲食器及玩具等他人ト共用スヘカラス

第八條 若シ其流行ノ勢盛ニシテ避病院ヲ要スルコトアルキハ普通病院ヲ區隔シ或ハ相當ノ空屋ヲ以テ之ニ充ツル等其便宜ニ任スヘシ

第九條 避病院ヲ設ルキハ別ニ清淨ナル屍室ヲ設ケ患者死亡シタルキ之ニ移スヘシ但屍室ハ親族ノ弔者ヲ入ルカ爲メ豫メ其餘地ヲ設クヘシ

第十條 避病院ニ在ル患者ノ親戚又ハ別段ノ交誼アル者看護ヲ爲サンコト望ムキハ之ヲ許スヘシ但屢ニ交替スルハ許スヘカラス

第四項 消毒法

第十一條 此病毒ハ患者ノ痰唾及呼吸或ハ涕汁等皆之カ傳送物アリ故ニ此等ノ排泄物ニ汚染シタル物ハ必消毒法ヲ行フヘキモノトス

第十二條 消毒法ハ其物ニ從テ區別スルコト左ノ如シ
第一患者及看護人等消毒法

第十三條 患者治癒ノ後他人ト交通シ又ハ避病院ヨリ退出ノ節ハ必沐浴シ石鹼水ヲ用テ全身ヲ洗ヒ他ノ衣服若クハ消毒法ヲ施シタル衣服ヲ着スヘシ看護人及避病院ノ醫師、

看護人、死體取扱人等ノ他人ニ接スルキモ亦此法ニ從フヘシ

第十四條 自宅患者ヲ往診セル醫師及患者ノ家人ニシテ直接セサル者親戚朋友ノ一時見舞タル者等其室ヲ出ルキハ必盥漱スヘシ

第二 死體及排泄物等消毒法

第十五條 死體ハ醫師確認ノ後速ニ棺内ニ斂メシムヘシ若シ濃厚石炭酸水(第一)ニ浸シタル綿ヲ以テ口鼻ヲ栓塞スルコトヲ得ハ最良トス

但死體ハ成タケ火葬スルヲ良トス

第十六條 痰唾及涕汁等ヲ拭ヒタル手巾及紙、綿布ノ類ハ悉皆取集メ之ヲ焼却スヘシ但水分剰多ニシテ燒盡シ難キ片ハ稀薄石炭酸水(第二)ヲ注キ人家遠隔ノ地ニ搬送シ

テ埋却スヘシ

第三 衣服、臥具等消毒法

第十七條 衣服、臥具ノ甚シク汚穢シタルモノハ之ヲ燒却スルヲ良トス其僅ニ穢レタルモノハ稀薄石炭酸水(第二)ヲ注キ浸シ置クコト廿四時間ニシテ更ニ沸湯ヲ注キ且洗滌シ

日光ニ曝スヘシ或ハ亞硫酸瓦斯(第九)ヲ以テ薰蒸セシ後日光及大氣ニ曝スヘシ

第四 家屋、船舶等消毒法

第十八條 此病毒ハ極テ頑強ニシテ善ク粗糙ナル物ニ附着スルカ故ニ最注意シテ下條ノ消毒法ヲ充分ニ行フヘシ

第十九條 患者及死體ヲ置キタル病室ノ疊、蓆類ハ之ヲ柱ニ倚セ掛ケ戸棚等ヲ開放シ窓戸ヲ密閉シテ六時乃至八時間亞硫酸瓦斯(第九)ヲ薰シ然ル後窓戸ヲ開キ疊、蓆、障等ニハ更ニ稀薄石炭酸水(第二)ヲ撒布シ或ハ之ヲ以テ拭淨シ其他棚架及板敷等ハ石鹼水又ハ沸湯ヲ以テ洗淨シ充分大氣及日光ニ曝スヘシ避病院ノ病室、屍室及普通病院ヲ區隔セシ病室又ハ臨時假用セル家屋モ亦之ニ倣フヘシ
但亞硫酸ノ爲メニ其色質ヲ變化スルノ恐アルモノハ石炭酸蒸氣(第三)或ハ熱氣消毒法等ヲ撰用スヘシ

第五 什具、運搬器等消毒法

第廿條 病室ニ用ヒタル什具、飲食器及玩具等ノ甚シク汚穢シタルモノハ之ヲ燒却スヘシ其燒却スヘカラサルモノハ稀薄石炭酸水(第二)或ハ亞硫酸溶液(第十)ヲ灌キ然ル後石鹼水又ハ沸湯ニテ洗淨スヘシ其洗フヘカラサルモノハ病室ニ消毒法ヲ行フノ際其内ニ排列シ濕潤ニ堪フヘキモノ亞硫酸瓦斯(第九)或ハ石炭酸蒸氣(第二)ニテ一時間薰蒸スヘシ然ラサレハ室外ヘ出スヘカラス

第廿一條 患者ノ玩弄セシ圖書、書籍ノ類ハ之ヲ緋展シ石炭酸蒸氣(第三)或ハ亞硫酸瓦斯(第九)ヲ薰蒸スヘシ

第廿二條 患者及死體ヲ運搬セシ器具等ハ稀薄石炭酸水(第二)ヲ灌注シ更ニ石鹼水若クハ沸湯ヲ以テ洗淨スヘシ其舁舟ノ如キハ海水ヲ以テ洗フモ可ナリ

第廿三條 醫術器械等ノ木製及金屬製ニシテ病毒ニ接觸シタルモノ例ヘハ壓舌鏡ノ如キハ總テ稀薄石炭酸水(第二)ヲ以テ洗フヘシ

○發疹室扶私

發疹室扶私(英名泰扶私)ハ特異ノ揮發性傳染毒ニシテ飢饉熱、軍陣疫、囚獄熱等ノ稱アリ從來腐敗熱、神經熱、發斑熱、温疫、傷寒ト唱ヘシモノ、中ニモ亦此病アルコト多シ其病タルヤ

地方ヲ撰ハス氣候ニ關セスル流行スルト雖モ多クハ衆人群集大氣流通ノ不佳ナル所ニ萌動シ衣服身體ノ不潔或ハ飲食ノ不食不足及過度ノ勞力、露臥、夜行其他身體ヲ衰弱セシムル事項ヲ誘因トシ傳染蔓延スルモノナリ其流行スルニ及テハ貴賤老幼ノ別ナク其誘因アルカ或ハ隔離法ノ行届サルヨリ倍、傳染ノ勢ヲ盛ニシ動モスレハ年ヲ亘リ消滅セサルアリ故ニ此病ノ豫防法ハ最忽ニスヘカラサルモノトス

第一項 清潔法

第一條 發疹室扶私ノ病毒ハ不潔、狹隘、空氣ノ汚濁ヨリ生スルモノナレハ其發現スルニ當テ囚獄、兵營及製造所、貧院、棄兒院其他群集雜居稠密ノ場所ハ勿論一般ノ家屋タリモ掃除ニ怠ラス務テ清潔ニシテ且空氣ヲ疏通セシムヘシ最其身體ニ切ナル清潔法ヲ至要トシ日々沐浴シ衣服ノ洗濯ヲ怠ルヘカラス殊ニ病毒ノ發生ヲ助クヘキ一切ノ汚穢物即廁間、芥溜、溝渠等ノ掃除ニ注意ヲ加フヘシ

第二條 避病院病室ニ於テ用フル所ノ臥具ハ無色若クハ淡色ノモノヲ要スヘシ其汚染ノ見易キカ爲メナリ自宅療養ノ者モ亦同様ノ注意ヲ要スヘシ

第二項 攝生法

第三條 此病ニ感スルノ素因ハ各人多クハ之ヲ有スト雖モ就中飢饉ノ窮民、軍陣ノ兵卒、監獄ノ囚徒等ノ如キハ其居處及攝生ノ不食ナルヨリ此病ニ罹ルモノ多シトス夫レ飢饉ノ時ニ當テハ攝生ノ事皆其宜キヲ得スト雖モ其最甚シキハ食物ノ不足ト不食トニ在リ故ニ衛生官吏ハ務テ其食品中成タケ滋養分多キモノヲ撰ヒ有害ノ物ヲ指示シテ之ヲ避ケシムヘシ

第四條 兵卒ノ軍陣ニ在ルキハ固ヨリ攝生ノ方ヲ講スルニ違ナカルヘシト雖モ若シ一人發病スルキハ直ニ全軍ニ波及スルノ虞アルヲ以テ成タケ無用ノ露臥過勞ヲ慎ミ且飲料ノ良否ニ注意ヲ加フヘシ囚獄、懲役場ノ如キハ流行ノ際殊ニ空氣ノ流通及其食物ニ注意ヲ加ヘ工役等モ過度ナラシメサルヲ要ス一旦病毒ノ蔓延スルニ至テハ高貴豪富ノ人ト雖モ猶其傳染ヲ免ル、能ハス是各人其素因アルヲ證スルニ足ル故ニ此時ニ當テハ務テ身體ノ溫度ヲ過宜ニ保持シ飲食ヲ攝シテ過度ノ勞力ヲ爲スヘカラス且夜氣、風雨等ノ感冒及身體ヲ衰弱セシムルノ諸件ヲ戒ムヘシ

第三項 隔離法

第五條 醫師發疹室扶私ト診斷シタルキハ直ニ其家ノ門戸ニ病名票ヲ貼附スヘシ但患者治癒又ハ死亡若クハ避病院ニ送致シ其室ニ消毒法ヲ行ヒタル後ハ即其病名票ヲ去ルヘシ

第六條 發疹室扶私ハ其毒揮發性ニシテ患者ノ皮膚、蒸發氣、呼氣ヨリ發スルモノナレハ直ニ患者ニ接觸セサルモ尙ホ之ヲ感受スルコトアリ故ニ患者ノ身體ヲ以テ皆病毒ナリト看做スヘシ又患者數名ヲ狹隘ノ一室ニ入ルキハ病毒稠厚ト爲リ感染ノ勢益々烈シク此室内ニ入ルモノ忽チ其病害ヲ受クルノ恐アリ故ニ患者ハ速ニ之ヲ隔離シ且相當ノ廣室ニ移サ、ルヘカラス

第七條 病室ハ適宜ニ窓戸ヲ開キ換氣法ニ注意シ常ニ其内ノ空氣ヲ清鮮ナラシメ看護人ノ外必接近セシムヘカラス

第八條 家族中ニ於テモ看護人ヲ定メ止ムヲ得サル事故アルノ外他人ト交連ヲ絶チ又老幼等ハ成タケ速ニ他家へ避退セシムヘシ否ラサレハ音ニ其害ヲ受クルノミナラス之カ

媒介ト爲リ大ニ傳播スルノ恐アレハナリ

但家人ト雖モ要用アルノ外其室内ニ入ルヘカラス若シ外人ノ要用アリテ來ルキハ戶外ニ於テ之ヲ辨スヘシ且看護人ハ成タケ更換スヘカラス是レ其揮發毒ノ衣服等ニ附着シテ廣ク他人ニ傳染スレハナリ

第九條 病室内ニハ不用ノ器具ヲ置クヘカラス殊ニ毛布ノ類ハ其病毒ヲ包含シ易キカ故ニ必要ノ外決シテ之ヲ置クヘカラス

第十條 此病ハ死體ヨリモ尙ホ其病毒ヲ發出シ以テ感染セシムルノ例少ナカラス故ニ死體ニハ速ニ消毒法ヲ行フヘシ死體ニ沐浴セシメ或ハ屍傍ニ接近スル等ノコトハ決シテ爲スヘカラス

第十一條 患者治癒死亡ノ後ハ病室ニ消毒法ヲ行ヒ數週間窓戸ヲ開放シ風氣ヲ流通スヘシ蓋シ消毒ノ後ト雖モ即室内ニ起臥スルキハ傳染ノ恐ナキニアラサルカ故ナリ

第十二條 船舶中ニ此病ヲ發スル者アルキハ速ニ其室ヲ異ニシ看護人ノ外交通ヲ絶ツコト尙ホ人家ニ於ルガ如クスヘシ

但此病ハ動モスレハ衆人群集セル船室ニ發シ又船中飲食ノ不良不足等其素因ト爲ルカ故ニ若シ患者アラハ速ニ之ヲ隔離シ室内ノ清潔法ニ注意スヘシ

第十三條 製造所、會社、學校、旅店等其他衆人群集ノ處ニ於テ發病セシ者アラハ成タケ速ニ之ヲ避病院ニ送ルヲ良トス若シ避病院ナク他ニ相當ノ空屋アラハ直ニ此ニ送致スヘシ然レ凡其發病セシ所ノ室廣闊ニシテ且他人ト充分ニ隔離スルヲ得ハ必シモ他ニ送ルヲ要セサルヘシ

第十四條 避病院ノ位置ハ人家ニ接近セス且恆風ノ上ニアラサル地ヲ撰ヒ必ス往來繁多ノ路傍等ニ置クヘカラス

但其門前ニ高ク病名標旗ヲ掲クヘシ

第十五條 避病院ノ建築ハ簡易ヲ旨トシ善美ヲ要セス是レ流行終熄ノ後燒却スルヲ良トスレハナリ

第十六條 避病院ノ病室ハ最闊大ナルヲ要スル故ニ患者一人ニ二坪半ト見積リ其人數ノ概計ハ虎列刺第三十四條ニ載セタル割合ニ從ヒ之ヲ設クヘシ其他醫師詰所、事務所、看

護人休息所並ニ簡易ノ蒸室等ヲ設クヘシ 虎列刺第三十六條參照

第十七條 避病院ノ門側ニ輕易ナル風呂ヲ置キ看護人、見舞人等退出ノ時必之ニ浴セシムルヲ良トス又病室ハ空氣ヲ流通セシメンカ爲メ窓戸ヲ開キ冬時ハ暖爐ヲ置キ其溫度ヲ適宜ニシテ空氣ノ代謝ヲ助クヘシ

但患者退院若クハ死亡スルノ後ハ毎回其病室内ニ消毒法ヲ行フヘシ

第十八條 避病院ニハ清淨ナル屍室ヲ設ケ患者若シ死亡シタルキハ直ニ之ニ遷シ病室ニ留置クヘカラス

但其屍室ニハ親族ノ弔者ヲ入ルカ爲メ其餘地ヲ設クヘシ其弔者ハ成タケ速ニ來ルヘキ手續ヲ爲スヲ要ス此病ハ死體モ亦發毒ヲ逞クスルモノナレハ必久ク留置クヘカラス

第十九條 人家稀疎ノ村落ニ於テハ必シモ避病院ヲ要セス若シ相當ノ空屋アラハ之ヲ假用シ或ハ苦葺等ノ屋舎ヲ假設スルモ可ナリ

第二十條 尋常ノ病院ニハ決シテ此患者ヲ入ルヘカラス若シ院内ニ從來傳染病室ノ設アリ

テ充分ニ隔離法、消毒法ヲ行ヒ得ヘキノ目的アルモノハ入院ヲ許スヘシト雖モ尋常ノ病院ヲ區隔シテ之ヲ用フヘカラス

第廿一條 避病院看護人ノ員數ハ重症ノ患者ニハ二人ニ一人ヲ附シ經症ノ者ニハ四人ニ一人ヲ附シ其快復ニ赴ク者ニハ六人ニ一人ヲ附スル割合ヲ以テ便宜斟酌シ且晝夜交代セシムヘシ

但看護人ニハ其表記アル衣服ヲ着セシメ且成タケ其人ヲ更換セシムヘカラス

第廿二條 避病院ニ在ル患者ノ親族又ハ別段ノ交誼アル者看護ヲ爲サンコトヲ望ムキハ之ヲ許スヘシ但其看護人ハ多人數ナラサルヲ要シ且屢々更替スルヲ許スヘカラス

第廿三條 避病院ニ携ヘ來リシ衣服、手道具等ハ別室ニ置シテ良トス

第廿四條 患者ノ親族又ハ別段ノ交誼アル者來訪スルモ成タケ室内ニ入ルヲ許サ、ルヲ良トス

第廿五條 此病ハ揮發性ニシテ一時ニ衆人ヲ侵シ若シ一人發病スルキハ其衣服等ニ附着セル病毒忽チ傳播シ大ニ流行ノ媒介ト爲ルヲ以テ流行ノ際ニハ成タケ衆人群集スルノ

事業ヲ差止メ且社寺參拜等ノ爲メ多人數旅行スルヲ差止ルコトアルヘシ

第四項 消毒法

第廿六條 此病毒ハ患者及死者ノ身體ヨリ發シテ衣服、臥具、器具ハ勿論居室ノ疊、蓆、屏障等ニ至ルマテ盡ク附着シテ其病毒久ク潛匿スルモノナレハ病體及死體ニ近接セルモノハ都テ病毒ト同視シ消毒法ヲ行フヲ要ス

第廿七條 消毒法ハ其物ニ從テ區別スルコト左ノ如シ

第一 患者及看護人等消毒法

第廿八條 患者治癒ノ後始テ他人ト交通シ又ハ避病院ヨリ退出ノ節等ハ必沐浴シ石鹼水ヲ用テ全身ヲ洗ヒ他ノ衣服若クハ消毒法ヲ施シタル衣服ヲ著スヘシ看護人及患者死體運搬人並ニ避病院ノ醫師、死體取扱人及船中ニテ患者ト同席セシ者等他人ト交通スル時七亦此法ニ從フヘシ

第廿九條 自宅患者ヲ往診セシ醫師及患者ノ家人ニシテ直接セサル者親戚朋友ノ一時見舞タル者ハ成タケ石鹼水或ハ醋水ニテ顔面及手ヲ洗拭スヘシ

第二 死體及排泄物等消毒法

第二十條 死體ハ充分ニ稀薄石炭酸水(第二)ニ浸シタル單衣若クハ綿布ヲ以テ之ヲ包ミ速ニ棺内ニ斂ムヘシ

但死體ハ成ダゲ之ヲ火葬スルヲ良トス

第二十一條 西洋形船舶航海中ニ死者アルキハ速ニ濃厚石炭酸水(第一)ニ浸シタル單衣若クハ綿布ヲ以テ之ヲ包ミ假ニ棺内ニ斂ム通常屍室或ハ船中適宜ノ場所ヲ見計ヒ此ニ入レ置キ時々濃厚石炭酸水(第一)ヲ灌注スヘシ

但陸地ニ著スルキハ速ニ其地方ノ警察官吏衛生委員ニ届出處分スヘシ

第二十二條 此病ハ必シモ排泄物ヨリ傳染セスト雖モ空氣ヲ汚スノ恐アルヲ以テ成ダケ速ニ之ヲ取除ケ病室内ニ留置ヘカラス

第三 衣服、臥具等消毒法

第二十三條 患者ノ久ク著シタル衣服臥具ノ汚垢ニ染ムタル者、又ハ死體ニ直接シタル臥具、避病院ニテ用ヒタル臥具、蚊帳等ハ成ダケ燒却スルヲ良トス其燒却ヲ憚ルヘキモ

ノニシテ洗濯スヘキハ之ヲ桶ニ入レ稀薄石炭酸水(第二)ヲ灌キ浸シ置ク一廿四時間ニシテ更ニ沸湯ヲ注キ四五分時ヲ經ルノ後水ヲ以テ洗淨シ日光ニ曝スヘシ石炭酸等若シ缺乏スルキハ熱湯中ニ入レ一時以上煮沸スヘシ

第二十四條 同前ノ品種ニシテ洗濯スヘカラサルモノハ亞硫酸瓦斯(第九)石炭酸蒸氣(第三)ヲ以テ薰蒸シ或ハ熱氣消毒法ヲ行ヒシ後日光及大氣ニ曝スヘシ

第四 家屋、船舶等消毒法

第三十五條 患者及死體ヲ置キタル室ノ疊蓆類ハ之ヲ柱若クハ壁ニ倚セ掛ケ戸棚等ヲ開放シ室内ニ在リシ諸器具ハ之ヲ排列シ窓戸ヲ密閉シテ六時乃至八時間亞硫酸瓦斯(第九)ヲ薰シ然後窓戸ヲ開キ病毒附着ノ恐アル柱、板、敷等ハ稀薄石炭酸水(第二)ヲ撒布シ更ニ之ヲ拭淨シ其他器具ハ石鹼水又ハ沸湯ヲ以テ洗淨シ充分大氣及日光ニ曝スヘシ避病院ノ病室及屍室モ亦之ニ倣フヘシ

但金銀器、書畫其他彩色ヲ施セル物及絹帛等亞硫酸ノ爲メニ其色質ヲ變化スルノ恐アル者ハ初ニ之ヲ取除ケ別ニ石炭酸蒸氣(第二)或ハ熱氣消毒法等ヲ適宜撰用スヘシ

第三十六條 患者アリタル西洋形船舶ハ其處置尋常ノ家屋ニ大異ナシト雖モ下等客室ニ至テハ衆多ノ乗客皆積荷ノ間ニ枕藉シ幾ント彼我ノ別ナキカ故ニ若シ其中ニ發病者アルキハ滿室ノ乗客、積荷、手荷物ハ皆病毒ニ浸染シタル者ト看做シ乗客、手荷物ハ上陸ノ時充分ニ消毒法ヲ行ヒ積荷ハ其儘其室ニ於テ六時乃至八時間亞硫酸瓦斯(第九)或ハ品種ニヨリ石炭酸蒸氣(第二)ヲ薰スルノ後コ非サレハ陸揚スルヲ許サズ

第三十七條 日本形小船ハ前條ヲ斟酌シテ消毒法ヲ行ヒ海水ヲ以テ普ク船身ヲ洗フヘシ

第三十八條 尋常家屋ヲ避病院ニ假用セシモノハ其病室トナセシ部分ハ亞硫酸瓦斯(第九)ヲ薰セシ後稀薄石炭酸水(第二)或ハ亞硫酸溶液(第十)ヲ洒キ石鹼水ヲ以テ洗淨ス

第三十九條 病室ハ不斷換氣法ニ注意スヘシ是亦多少消毒ノ効アルモノトス

第四十條 避病院ハ流行ノ後成タケ焼却スルヲ良トス否ラサレハ先ツ汚穢シタル板敷、

板壁及柱等ハ濃厚石炭酸水(第一)又ハ亞硫酸溶液(第十)ヲ以テ充分ニ洗濯シ數日間開放シテ大氣ニ曝シ然ル後之ヲ取毀ツヘシ

第五 什具、運搬器等消毒法

第四十一條 病室ニ用ヒタル什具ハ總テ稀薄石炭酸水(第二)或ハ亞硫酸溶液(第十)ヲ濯

キ然ル後石鹼水又ハ沸湯ニテ洗淨スヘシ其洗フヘカラサル者ハ病室ニ消毒法ヲ行フノ際其内ニ排列シ濕潤ニ堪フヘキモノハ之ヲ濕スヲ良トス 亞硫酸瓦斯(第九)或ハ石炭酸蒸氣(第三)ヲ以テ一時間薰蒸スヘシ

第四十二條 書籍、新聞紙ノ類病室ニ在リタルトハ之ヲ緋展シ石炭酸蒸氣(第二)若クハ亞硫酸瓦斯(第九)ヲ薰スヘシ或ハ熱氣消毒法ヲ行フモ可ナリ

第四十三條 醫術器械及職人手道具其他木製、金屬製、陶製、漆製ノ諸器類ハ總テ稀薄石炭酸水(第二)ヲ以テ洗フヘシ

○痘瘡

痘瘡ノ病毒ハ揮發性及固性傳染毒ニシテ全ク患者ノ身體ヨリ發出シ又ハ死體及痘漿、痘痂ニ直接シテ感染スルノミナラス其患者ニ接觸セシ衣服、臥具其他一切ノ物品ヨリモ傳染シ又其病室内ノ空氣、塵埃モ之カ媒介ト爲リテ其病毒ヲ傳送スルモノトス

痘瘡ハ古來ヨリ全世界ニ發現シ殊ニ悪性流行スルキハ其勢猖獗ニシテ無數ノ人衆ヲ害シ
良醫モ亦手ヲ束テテ其術ヲ施スヘカラサルアリ但人生一回此病ニ罹ルキハ感受性ヲ脱盡
シ得ルヲ以テ英國ノ醫博士ジエンチル氏牛痘接種ノ法ヲ發明セシ以還其善感スル者ハ復
タ天然痘ニ感スルコトナシ故ニ此法行ハレテヨリ大ニ患者ノ數ヲ減シ偶ニ流行スルモ其病
性劇悪ニ至ラス殆ソト其性ヲ變スルニ至ルヲ證スルニ足ル是故ニ種痘ヲ普及スルハ全ク
此病ヲ防盡スル所以ニシテ即豫防ノ第一トス

第一項 清潔法

第一條 此病ハ各人感受性ヲ具フル故ニ一般清潔法ヲ要スルモ他病ニ於テ緊要トスルカ
如クナラス但患者ノ居室ヲ清潔ニシ痘漿等ニ汚染セル衣服ヲ屢ニ更換シ周圍ノ塵埃ヲ
掃除シ專テ他人ニ傳染スルヲ防クヲ要スルニ在ルノミ

第二項 攝生法

第二條 前條ニ載スルカ如ク牛痘ヲ接種シテ其素因ヲ脱盡スルキハ復タ天然痘ニ感スル
コトナシ然レモ一回種ヲ以テ足レリトスヘキニ非ス再三接種シ其善感ノ確徴ヲ取ラサル

ヘカラス唯衣服、飲食等ノ攝生ヲ以テ此病ノ侵襲ヲ豫防スヘキニアラス

第三項 隔離法

第三條 醫師痘瘡ト診斷シタルキハ直ニ其家ノ門戸ニ病名票ヲ貼附スヘシ
但患者治癒又ハ死亡若クハ避病院ニ送致シ其病室ニ消毒法ヲ行ヒタル後ハ即其病名
票ヲ去ルヘシ

第四條 痘瘡ノ毒ハ患者ノ身體又ハ其衣服、臥具等ヨリ傳染シ又患者ニ接近シタル者ノ
衣服等ヨリモ傳染スルヲ以テ成タケ患者ニ接近シ又ハ患者ノ用ヒタル衣服、器具等ニ
觸ルヘカラス

第五條 自宅療養ノ患者ハ其室ヲ異ニシ看護人ノ外ハ成タケ接近スヘカラス已ムヲ得サ
ル事故アルノ外ハ他人ト交通ヲ絶テ殊ニ未癒者ヲ近クヘカラス

第六條 家族中ニ於テモ看護人ヲ定メ其他要用アル者ノ外成タケ之ヲ室内ニ入ラシムヘ
カラス

但看護人ハ既痘者ニ限ルヘシ

第七條 病室内不用ノ器具ハ勿論殊ニ不用ノ毛布等ヲ置クヘカラス

第八條 患者死亡ノ後其屍傍ニ接近シ並ニ死體ニ沐浴セシムル等ハ爲サ、ルヲ長トス

第九條 縦令輕症ナル患者ト雖モ落痂後一週日ヲ經ルニアラサレハ學校其他衆人群集ノ場所ニ行カシムヘカラス

第十條 蚊蠅ハ好テ患者ノ皮膚ニ聚リ頗ル病毒傳播ノ媒介チナスモノナレハ病牀ニハ常ニ蚊帳ヲ張り蚊蠅及其他ノ小蟲ヲモ防クヘシ

第十一條 病室ハ消毒ノ後ト雖モ數週間未瘡者ヲ入ルヘカラス

但同家内ニ於テ若シ復タ此病ニ罹ル者アルキハ此病室ヲ用フルモ妨ナシ

第十二條 西洋形船舶航海中若シ發病者アルキハ其室ヲ異ニシ看護人ノ外他人ト交通ヲ絶ツコト猶ホ人家ニ於ケルカコトクスヘシ

第十三條 製造所、會社、學校、旅店等ニ在テ發病シ引取人ナキ者并ニ狹隘不潔ノ地ニ雜居スル者等ニシテ看護、消毒法行届カス病毒ノ傳播ヲ防キ難キ者ハ之ヲ避病院ニ送ルヘシ若シ避病院アラサルトハ適當ノ空屋ニ移シテ之ヲ隔離スヘシ

第十四條 避病院ノ位置ハ人家ニ接近セス且恒風ノ上ニアラサル地ヲ撰ヒ必往來繁多ノ路傍等ニ設クヘカラス

但其門前ニ高ク病名標旗ヲ掲クヘシ

第十五條 避病院ヲ新ニ構造スルキハ空氣ノ流通ヲ主トシ善美ヲ要セス其牀ヲ高ク窓戶ヲ闊大ニシ且板壁ヲ用ヒテ洗淨ニ便ニシ其屋根ハ板葺、苔葺等一時ノ便ニ任シテ可ナリ且其病室ハ闊大ナルヲ要スルヲ以テ凡患者一人ニ二坪半ト見積リ之ヲ建設スヘシ

第十六條 避病院ノ病室ハ重症輕症ノ患者ヲ區別シテ之ヲ分隔シ二坪半ニ患者一人ヲ置クヲ常トシ縦令幅濶スルトモ一坪若クハ一坪半ニ一人ノ割合ヨリ狹クスヘカラス

但此他醫師詰所、事務所、看護人休息所等便宜ニ之ヲ設ケ且簡易ノ薰蒸室ヲ設クヘシ

第十七條 避病院ノ門側ニハ輕易ナル風呂ヲ設ケ看護人、見舞人等外出ノ時入浴ノ用ニ供スヘシ

第十八條 避病院ハ窓戶ヲ濶大ニシ空氣ヲ流通セシメ冬時ハ暖爐ヲ置キ室内ノ溫度ヲ適宜ニシ空氣ノ代謝ヲ助クヘシ

但病室ハ患者治癒死亡ノ後毎回消毒法ヲ施スヘシ

第十九條 避病院ニハ別ニ清淨ナル屍室ヲ設ケ患者若シ死亡シタルトハ直ニ此ニ移ヘシ但屍室ハ親族ノ弔者ヲ入ルハカ爲メ其餘地ヲ設クヘシ且其弔者ハ成タケ速ニ來ルノ手續ヲナスヲ要ス

第廿條 尋常病院ニハ決シテ此患者ヲ入ルヘカラス若シ院内ニ從來傳染病室ノ設ケアリテ充分ニ隔離法、消毒法ヲ行ヒ得ヘキノ目的アルモノハ入院ヲ許スヘシト雖モ尋常ノ病院ヲ區隔シテ之ヲ用フヘカラス

第廿一條 人家稀疎ノ村落ニ於テハ必シモ避病院ヲ設クルヲ要セス若シ相當ノ空屋アラハ假ニ之ヲ用フヘシ

第廿二條 避病院看護人ノ員數ハ重症ノ患者ニハ一人ニ一人ヲ附シ輕症ノ者ニハ三人ニ一人ヲ附スル割合ヲ以テ便宜斟酌シ且晝夜交代セシムヘシ

但看護人ハ既痘者ニ限ルヘシ且其表記アル衣服ヲ著セシメ成タケ其人ヲ更換セシムヘカラス

第廿三條 避病院ニ在ル患者ノ親族又ハ別段ノ交誼アル者看護ヲ爲サントテ望ムキハ既痘者ニ限リ之ヲ許スヘシ但屢々更替スルヲ許スヘカラス

第廿四條 患者ノ親族等一時見舞ヲ爲サント請フトハ之ヲ許スト雖モ成タケ屢スヘカラス其出ツル時ニハ必充分ノ消毒法ヲ施スヘシ

第廿五條 流行ノ勢猛烈ナルキハ祭禮、劇場等衆人群集ノ事業ヲ差止メ學校モ成タケ之ヲ閉ツルヲ良トス

第四項 消毒法

第廿六條 此病毒ハ膿漿、痘痂、呼氣、津唾及死體ヨリ傳染シ又患者ノ衣服、臥具其他患者ニ接觸セシ器具及居室等ヨリモ傳染スルカ故ニ甚シク汚染セシモノハ成タケ燒却スヘシ

第廿七條 消毒法ハ其物ニ從テ區別スルヲ左ノ如シ

第一 患者及看護人等消毒法

第廿八條 患者治癒落痂ノ後一週日ヲ經テ初テ他人ト交通シ又ハ避病院ヨリ退出ノ節ハ

必沐浴シ石鹼水ヲ用テ全身ヲ洗ヒ他ノ衣服若クハ消毒法ヲ施シタル衣服ヲ着スヘシ看護人及患者、屍體運搬人並ニ避病院ノ醫師、死體取扱人等ノ他人ニ交接スルキモ亦此法ニ從フヘシ

第廿九條 自宅患者ヲ往診セル醫師及患者ノ家人ニシテ直接セサル者、親戚朋友ノ一時見舞タル者等ハ石鹼水或ハ醋水ニテ顔面及手ヲ洗フヘシ

第二 死體及排泄物等消毒法

第三十條 死體ハ充分ニ稀薄石炭酸水(第二)ヲ浸シタル單衣若クハ綿布ヲ以テ之ヲ包ミ速ニ棺内ニ歛ムヘシ

第三十一條 死體ハ成タケ火葬セシムルヲ良トス埋葬シタルモノハ其病毒數十年ヲ經ルモ消滅セサルモノトス

第三十二條 西洋形船舶航海中ニ死者アルトハ速ニ濃厚石炭酸水(第一)ニ浸シタル單衣若クハ綿布ヲ以テ之ヲ包ミ假ニ棺内ニ歛メ通常屍室或ハ船中適宜ノ場所ヲ見計ヒ此ニ入レ置キ時々濃厚石炭酸水(第一)ヲ灌注スヘシ

但陸地ニ着スルキハ速ニ其地方ノ警察官吏、衛生委員ニ届出處分スヘシ

第三十三條 落珈及病室ノ塵埃又ハ患者ニ觸レタル綿、布、紙等ノ斷片ニ至ル迄時々收拾シテ之ヲ焼却スヘシ

第三 衣服、臥具等消毒法

第三十四條 患者ノ久シク用ヒタル衣服、臥具及避病院ニ用ヒタル蚊帳ノ甚シク病毒ニ浸染シタル者並ニ避病院ノ臥具、疊、蓆等ハ之ヲ焼却スヘシ

第三十五條 患者ノ着シタル衣服、臥具及手巾、蚊帳等又ハ死體ニ着セシ衣服等ノ洗濯ニ堪フヘキモノハ之ヲ桶ニ入レ稀薄石炭酸水(第二)ヲ灌キ浸シ置ク一廿四時間ニシテ更ニ沸湯ヲ注キ四五分時ヲ經ルノ後水ヲ以テ洗淨シ日光ニ曝スヘシ石炭酸等若シ缺乏スルキハ熱湯中ニ入レ一時以上之ヲ煮沸スヘシ其洗濯ニ堪ヘサルモノハ品種ニヨリ亞硫酸瓦斯(第九)若クハ石炭酸蒸氣(第三)ヲ以テ薰蒸シ或ハ熱氣消毒法ヲ行ヒ後日光及大氣ニ曝スヘシ

第三十六條 避病院ノ醫師、看護人及死體運搬人等ノ衣服ニ施スヘキ消毒法ハ前條ニ同

第四 家屋、船舶等消毒法

第三十七條 患者及死體ヲ置キタル室ノ疊、蓆類ハ之ヲ料若クハ、壁ニ倚セ掛ケ戸棚等ヲ開放シ室内ニ在リシ諸器具ハ之ヲ排列シ窓戸ヲ密閉シテ六時乃至八時間亞硫酸瓦斯(第九)ヲ薰シ然後窓戸ヲ開キ病毒附着ノ恐アル柱、板敷等ハ稀薄石炭酸水(第二)ヲ撒布シ更ニ之ヲ拭淨シ其他ノ器具ハ石鹼水又ハ沸湯ヲ以テ洗淨シ充分大氣及日光ニ曝スヘシ避病院ノ病室及屍室モ亦之ニ倣フヘシ

但金銀器、書畫其他彩色ヲ施セル物及絹帛等亞硫酸ノ爲メニ其色質ヲ變化スルノ恐アル者ハ初ニ之ヲ取除ケ別ニ石炭酸蒸氣(第三)或ハ熱氣消毒法等ヲ適宜撰用スヘシ

第三十八條 患者アリタル西洋形船舶ハ其處置尋常ノ家屋ニ大異ナシト雖モ下等客室ニ至テハ衆多ノ乘客皆積荷ノ間ニ枕藉シ幾ント彼我ノ別ナキカ故ニ若シ其中ニ發病者アルキハ滿室ノ乘客、積荷、手荷物ハ皆病毒ニ浸染シタル者ト看做シ乘客、手荷物ハ上陸ノ時充分ニ消毒法ヲ行ヒ積荷ハ其儘其室ニ於テ六時乃至八時間亞硫酸瓦斯(第九)或ハ

品種ニヨリ石炭酸蒸氣(第三)ヲ薰スルノ後ニ非レハ陸揚スルヲ許サス

第三十九條 日本形小船ハ前條ヲ斟酌シテ消毒法ヲ行ヒ海水ヲ以テ普ク船身ヲ洗淨スヘシ

第四十條 避病院或ハ便宜ニヨリ池ノ空屋ヲ假用セシモノハ其病室ニ供セシ部分ニ亞硫酸瓦斯(第九)ヲ薰セシ後稀薄石炭酸水(第二)或ハ亞硫酸溶液(第十)ヲ注キ石鹼水ヲ以テ洗淨スヘシ

但消毒ノ後モ數週間其内ニ入ルヘカラス且空氣ヲ流通セシムヘシ

第四十一條 病室ハ不斷換氣法ニ注意スヘシ是亦多少消毒ノ効アルモノトス

第四十二條 臨時假設ノ避病院ニシテ其保存スヘカラサルモノハ流行熄ムノ後之ヲ取毀ツヘシ尤其前汚穢シタル板敷、板壁及柱等ハ濃厚石炭酸水(第一)或ハ亞硫酸溶液(第十)ヲ以テ充分ニ洗淨シ數日間開放シテ大氣ニ曝スヘシ

第五 什具、運搬器等消毒法

第四十三條 避病院ニ携ヘ來リシ手道具玩具等ハ治癒若クハ死亡ノ後亞硫酸瓦斯(第九)

蒸蒸法ヲ行ハサレハ之ヲ出スヘカラス

第四十四條 患者及死體ヲ運搬セシ器具等ハ稀薄石炭酸水(第二)ヲ灌注シ更ニ石鹼水若クハ沸湯ヲ以テ洗淨スヘシ其舁舟ノ如キハ海水ヲ以テ洗フモ可ナリ

第四十五條 病室ニ用ヒタル什具、玩具ハ總テ稀薄石炭酸水(第二)或ハ亞硫酸溶液(第十)

ヲ濯キ然ル後石鹼水又ハ沸湯ニテ洗淨スヘシ其洗フヘカラサルモノハ病室ニ消毒法ヲ行フノ際其内ニ排列シハ之ヲ濕スヲ良トス 亞硫酸瓦斯(第九)或ハ石炭酸蒸氣(第二)ヲ以テ一時間之ヲ蒸蒸スヘシ

第四十六條 患者ノ玩弄シタル圖書、書籍、新聞紙ノ類ハ之ヲ緋展シ石炭酸蒸氣(第三)若クハ亞硫酸瓦斯(第九)ヲ蒸蒸スヘシ或ハ熱氣消毒法ヲ行フモ可ナリ

第四十七條 醫術器械及木製、金屬製、陶製、漆製等ノ諸器ニシテ病毒ニ觸レタルモノハ總テ稀薄石炭酸水(第二)ヲ以テ洗フヘシ

〔府縣伺〕

一傳染病豫防心得書虎列刺ノ部第五十四條ニ死體ハ醫師確認ノ後云々簡易ノ火葬場ヲ

設ケ之ヲ燒クヘシト有之右ハ其病勢激烈ノ場合ニ際シ臨時之ヲ設置シ病毒鎮滅ノ期

ニ至レハ尋常ノ地ニ復スヘキモノト心得本廳限聞届處分不苦候哉〔嶋根絲〕

(指令)伺之通 十三年十一月十八日

追加

○太政官 第五十八號 十四年十月七日

明治十三年七月第三十四號布告傳染病豫防規則第十五條へ左ノ一項追加候條此旨布告候事
虎列刺已ニ市街村落ノ全部若クハ一部分ニ於テ蔓延ノ兆候ヲ顯ハシ其他ノ部分 及ホサ
、ル様遮斷シ得ヘキモノト見認ルキハ地方官ヨリ内務卿ニ稟議シ交通ヲ絶タシムルノ處
分ヲ爲スヲ得

但要用ノ者ハ掛官吏檢察ノ上交通ヲ許スヲ得

○内務省 乙第四十九號 十四年十月十日

警視廳
府縣

昨明治十三年太政官第三十四號公布傳染病豫防規則第十三條船舶検査之儀ハ左ノ手續書ニ
據リ可取扱此旨相達候事

傳染病豫防規則第十三條船舶検査手續

一虎列刺有病地方ヨリ來ル船舶ハ之ヲ検査シ船中ニ該病者死者ナキモノハ乗客積荷共直ニ
上陸ヲ許スヘシ

一 虎列刺病者死者アル船舶ハ陸上ニ離レタル場所ニ停置キ先ツ其病者死者ニ消毒法ヲ行ヒ
テ之ヲ處置シ次ニ乗客ニ消毒法ヲ行ヒテ上陸セシメ終リニ積荷船舶ノ消毒法ヲ行ハシム
ヘシ而シテ全ク其消毒ヲ終リタルキハ何時ニテモ他港ニ向ケ出帆シ又ハ他ノ船舶ニ交通
スルヲ得ヘシ

第十八項 檢疫停船

○太政官 第廿九號 明治十二年七月廿一日

明治十二年七月廿八號布告海港虎列刺病傳染豫防規則別冊ノ通更正シ檢疫停船規則ト改稱
候條此旨布告候事

檢疫停船規則

第一條 日本政府ハ虎列刺病ノ蔓延ヲ防カン爲メ茲ニ左ニ掲グル規則ヲ開港場ニ施行スル
ヲテ布告ス而シテ更ニ其施行ノ停止ヲ令スル迄ハ之ヲ實施スルモノトス

第二條 中央衛生會ニテ決スル處ノ開港場ニ官吏及至當ノ教育ヲ受ケ能ク職任ニ堪ユヘキ
日本又ハ外國醫士化學士及相當ノ助役ヲ以テ地方檢疫局ヲ設置スヘシ而シテ其局員ノ數
ハ其港入船ノ多寡ニ應シテ増減アルヘシト雖モ檢疫一切ノ事務ヲ速ニ整理スルニ差支ナ
キヲ以テ足レリトスヘシ

都テ此地方檢疫局ハ中央衛生會ノ管轄ニ屬スヘシ(十二年七月第二十號公布ヲ以テ正誤)

第三條 政府ハ檢疫停船規則ヲ施行スル各開港場ニ於テ停船場ヲ定メ且虎列刺患者ヲ容ル

第十八項 檢疫停船

ヘキ病院並ニ該病ノ疑アル患者ヲ容ルヘキ病院ヲ建設シ且遺骸ヲ處置スヘキ地消毒法ヲ施行スヘキ場所並ニ停留セラレタル人ノ爲メ都テ必需ノ具ヲ備ヘタル屋舎ヲ設置スヘシ

第四條 檢疫信號旗ヲ掲ケタル番船ヲ各港口ノ近傍ニ置キ各船入港ノ前檢査ノ爲メ之ヲ停止シ地方檢疫局ノ人員少クモ二名ヲ派出シテ之ヲ檢査スヘシ但右局員ノ内一名ハ必醫士タルヘシ而シテ船長醫士或ハ船内ノ人ハ誰ニテモ檢疫官吏ノ尋問ニ對シ都テ之ニ應答シ又所定ノ式紙ニ事項ヲ記入シ其氏名ヲ記シタル明告書ニ調印シテ差出スヘシ

船長ハ檢疫官吏ノ求メニ應シ船内ノ各部ヲ開キ檢査ヲ受クヘシ但艙ハ航海中船客又ハ乗組人ニテ占居シタルト又ハ他ノ事故ニ依テ病毒ニ感染シタル恐レアルトハ其檢査ヲ受クヘシ

檢疫官吏ハ該船ノ航海日記ヲ査閲シ乗組人及船客ノ人名錄ヲ船内現在ノ人員ト引合ハスヲ得ヘシ(第二十號正誤)

第五條 虎列刺病流行セサル港又ハ其疑ナキ港ヨリ來航スル船ノ船長ハ明告書及ヒ其他ノ手續ヲ以テ該船有病ノ港又ハ其疑アル港ニ立寄ラス又有病ノ船舶若シハ其疑アルモノト

直チニ交通セス且航海中眞性虎列刺病又ハ疑似症ヲモ船内ニ發セシモノ無キ旨ヲ證明シテ檢疫官吏ヲ満足セシムルトハ該船ハ直ニ入港スルヲ得ヘシ輪

軍艦ハ其艦長及醫官ニテ調印セル書面ヲ以テ前條ノ趣ヲ明告スル迄ニテ足レリトスヘシ而シテ該艦ハ檢査ヲ經ス入港スルヲ得ヘシト雖モ若シ右ノ書面ヲ差出サ、ルキハ檢疫停船規則ニ從フヘシ(第二十號正誤)

第六條 船内ニ眞性虎列刺病若シハ疑似症ニ罹リタル者無シト雖モ有病ノ港又ハ其疑アル港ヨリ來ルカ又ハ其航海中直ニ有病ノ船若シハ其疑アルモノト交通シタル船舶及船内ノ人員ハ其港ヨリ出帆ノ日又ハ有病若シハ其疑アル船ト交通ノ日ヨリ起算シテ七日ノ期滿ル迄ハ停留セシムヘシ但地方檢疫局ニ於テ右ノ時間ヲ短縮スルモ其支ナキヲ認ムルキハ此限ニアラス

右七日ノ期該船來著ノ上又ハ其前既ニ過キ去ルキハ消毒法ヲ行ヒシ上速ニ船客ノ上陸ヲ許スヘシ

一般ノ積荷ハ消毒法ヲ施スニ及ハス自餘ノ物品ハ檢疫官吏ノ見込ヲ以テ消毒法ヲ行ヒ或

ハ行ハサルヘシト雖凡爛布古衣夜具ハ勿論其他檢疫官吏ニ於テ殊ニ危険ナリト見込ムモ
ノハ消毒法ヲ行フヘシ

消毒法ヲ行ヒタル物品ハ速ニ陸揚スルヲ得ヘシト雖モ消毒法ヲ行ハサル物品ハ停船ノ
定期満ル迄陸揚スヘカラス若シ停船中眞性虎列刺及疑似症ヲ發スルキハ其船及ヒ人員物
品ハ都テ第八條第九條ニ從ヒ處置スヘシ

第七條 有病ノ港又ハ其疑アル港ヨリ來ル軍艦ハ其艦長及醫官ヨリ書面ヲ以テ該艦來港前
七日以內艦内ノ者有病ノ港或ハ其疑アル港ニ上陸セシコ無ク又ハ病毒感染ノ恐ナク且得
航海中艦内ニ眞性虎列刺病又ハ疑似症ヲ發セシコ無キ旨ヲ明告スルキハ直ニ入港スル
ヘシ右ノ書面ヲ差出サ、ルキハ該艦ハ檢疫停船規則ニ從ハシムヘシ(第二十號止誤)

第八條 船舶來港ノ上其艦内ニ眞性虎列刺病若クハ疑似症ヲ發スル者アルキハ檢疫官吏ニ
テ指示シタル停船場ニ移シテ要用ノ消毒法ヲ行ヒシ日ヨリ起算シテ七日ノ間停船セシム
ヘシ

船舶來港前病毒消滅シ而シテ檢疫官吏ノ満足スヘキ方法ヲ以テ消毒法ヲ施行セル上ハ設

地方檢疫局ニ於テ可トスル程停船ノ時間ヲ短縮シ得ヘシ

消毒法施行後停船中眞性虎列刺病若クハ疑似症ヲ發スル者アルキハ地方檢疫局ノ必要ト
考斷スル程消毒法ヲ復施行シ其施行ノ時ヨリ起算シテ尙三日間停船セシムヘシ但最初
定メタル時限猶三日以上アルキハ最初定メタル時限ニ達スル迄停船セシムヘシ
患者及死者ノ遺骸ハ第九條ニ從ヒ處置スヘシ(第二十號正誤)

第九條 前條ニ記スルカ如キ船舶ノ來著スルニ方リ其乗組ノ患者未タ癒エサレハ其容體ニ
依リ之ヲ避病院ニ移シ若シ已ニ死シテ遺骸ノ處置未タ済マサルキハ其爲メニ設ケタル場
所ニ於テ火葬スルカ又ハ其關係アル者ノ望ニ任セテ十分消毒法ヲ行ヒシ後埋葬スヘシ
患者及遺骸ヲ船中ヨリ他ニ移シタル後夜具衣類其他ノ物品及船内何レノ部分ニテモ病毒
感染ノ恐アル者ハ地方檢疫局ニ於テ指示セル如ク十分ニ消毒法ヲ施スヘシ而シテ消毒法
ヲ施ス爲メ要用ノ人ト船中ヲ取締ルヘキ人トノ外都テ船内ノ人員ハ其人ノ爲メ特ニ設ク
ル所ノ家屋ニ移シ消毒法ヲ行フヘシ船内ニ残りタル人員ハ船内ニテ消毒法ヲ受クルカ又
ハ交代シテ陸上ニアル適當ノ家屋ニ於テ之ヲ受クヘシ

第十條 有病ノ港或ハ其疑アル港ヨリ出帆シ途中ノ港ヲ經ルト雖モ其港ニ於テ檢疫處置ヲ受ケサル船舶ハ直チニ有病ノ港又ハ其疑アル港ヨリ來ルモノト認メ處置スヘシ

第十一條 定期郵便ヲ運搬スル諸船ハ著港ノ上速ニ其郵便物ヲ運送スルヲ得ヘシ而シテ政府ハ右ノ郵便物ヲ運送配達ノ爲メ至當ノ方法ヲ設クヘシ(第二十號正誤)

第十二條 病院ニ入ル患者ハ治療及必需品ヲ受クルヲ得ヘシ

病院或ハ停泊ノ船内ニ在ル患者ヲ尋訪セント欲スル人ハ地方檢疫局ニ於テ定メタル方法ニ從フヘシ

避病院ニ關係ナキモ醫業ニ達シタル醫士ハ患者又ハ其代理人ノ請ニ由テ診察協議スルヲ得ヘシ

患者ハ醫士ヨリ退院ヲ許ス迄ハ病院ヲ退去スルヲ得ス

第十三條 船中ニ於テ眞性虎列刺病若クハ疑似症ヲ發スルコトナキ時ハ停留セラレタル人ヲ船中ニ停メ置クヲ得ヘシ又ハ地方檢疫局ニ於テ衛生上ノ見込ニ從ヒ特ニ陸地ニ設ケアル避病ノ場所ニ移サル、コアルヘシ

第十四條 檢疫停船規則施行ノ港ニ來著スル船舶ニ於テ檢疫官吏之ヲ虎列刺ノ源因ナラント思考スル疑似ノ病徵ヲ發スル者アルキハ其患者ハ病院ノ別室ニ移シ船ハ醫士ニ於テ其病症ヲ審斷スルニ充分ノ時間ヲ終ル迄停留セシムヘシ但其時間ハ四十八時ニ過クヘカラズ而シテ地方檢疫局ハ醫士ノ報告ニ依リテ該規則ノ内其場合ニ適スル條款ヲ實施スヘシ(第二十號正誤)

第十五條 有病ノ港又ハ其疑アル港ヲ發シ船用品或ハ荷物積込ノ爲メニ途中檢疫ノ所設ケアル無病ノ一港ニ立寄タル船舶ハ豫メ檢疫官吏ノ検査ヲ經且必要ト認メタル消毒法ヲ行ヒ船用品或ハ貨物ヲ積入ル、毎ニ地方檢疫局ヨリ指示スル方法ニ從フヘシ
又該船内ニ眞性虎列刺病若クハ疑似症ヲ發シタルキハ該船又ハ其乗込人及物品ヲ處置スルハ第八條第九條ニ準スヘシ但該船内ヨリ上陸スル者アルキハ他船ニテ到着シタル人ニ行フヘキ同一ノ處置ヲ爲スヘシ

第十六條 船舶ノ検査ハ其來著後成ルヘク速ニ施行スヘシ若シ來著後十二時間ヲ過キテ検査ヲナサ、ル時ハ入港スルヲ得ヘシ但其遲延天氣惡キカ爲メカ又ハ避ケ難キ事情アルカ

爲メカ又ハ船長若クハ該船ニ關係アル人ノ所行或ハ詐僞ニ出ツルカノトハ此限ニアラス
其場合ニ於テ其遅延シタルノ事故終リタルキ検査ヲ爲スヘシ

第十七條 地方檢疫局ヨリ指圖シタル消毒法ハ檢疫官吏之ヲ施行シ其船ノ士官及船員之ヲ
補助スヘシ但消毒法ハ之ヲ命シタル時ヨリ成ルヘク廿四時間ニ完了シ而シテ其入費ハ船
主又ハ其責アル者ヨリ辨償スヘシ

第十八條 檢疫停船規則ヲ施行スル港内ニ碇泊中船内ニ眞性虎列刺病又ハ疑似症ヲ發シタ
ル船舶ハ直ニ第八條第九條ノ規則ニ從フヘシ

然リト雖モ若シ其船既ニ本港ニ於テ停留ヲ經タル時ハ檢疫官ハ地方檢疫局ニテ必要ト考
斷スル丈ケノミノ消毒及検査ノ方法ヲ反復施行スヘシ(第二十號正誤)

第十九條 虎列刺病既ニ流行スル港内ニ來著スル船舶検査消毒法患者及死者ノ處置ヲ爲ス
ハ前記ノ規則ニ從ハシムヘシ右ヲ施行スル爲メノ豫備ハ政府ニ於テ爲スヘシト雖モ船及
人員停留ノ規則ハ休止スヘシ(第二十號正誤)

第廿條 第六條第八條及第九條ニ記スル船舶ノ景狀地方檢疫局ニ於テ特ニ公衆ノ健康ニ危

險ナリト思慮シ非常ノ處置ヲ必要トスルトハ此規則外ニ豫防ノ嚴制ヲ施ストテ得ヘシ其
場合ニ方リテ地方檢疫局ハ直ニ中央衛生會ニ臨時ノ報告書ヲ差出スヘシ而シテ右報告書
ノ寫ハ請求ニ依リテ地方檢疫局ヨリ之ヲ該船ノ船長船主又ハ其用達ニ付與スヘシ

第廿一條 検査中又ハ停留中ノ船舶又ハ停留人ノ寓所ニハ凡ソ何人ヲ問ハス地方檢疫局ノ
許可ナクシテ往クヲ許サス

第廿二條 前條ノ規則ヲ施行スルニ就テ其人ニ係ル所ノ食料醫藥其他欠クヘカラサル費用
ハ其本人又ハ代理人ヨリ辨償スヘシ

第廿三條 此規則ニ背キ或ハ從フヲ拒ム者ハ犯ス毎トニ貳百圓以内ノ罰金ヲ科スヘシ若
シ其船長船主若クハ其船ノ用達又ハ其各人若クハ一人ノ命令又ハ利益ノ爲メ此規則ニ背
キ或ハ從フヲ拒ムキハ每犯罰金五百圓ニ至ルマテ増加スルヲアルヘシ

此規則ニ就テ拂フヘキ費用ヲ辨償セサルモノアルキハ民事ノ訴訟ヲ以テ之ヲ要求スヘシ
但罰金ハ科セサルヘシ

此規則ヲ犯シ停留場ヲ脱去スル者ハ(船又ハ人)罰金ヲ科シ且即時停留場ニ返ラシムヘシ

○太政官 第三十三號

十二年八月廿五日

本年七月第廿九號布告檢疫停船規則ニ因リ神奈川縣下相州長浦灣長崎縣下長崎港外ニ於テ檢疫法施行候處自今右停止候條此旨布告候事

第十九項 地方病

○内務省 乙第百九號 明治十年十二月八日

府縣

脚氣病取調ニ付入用候條左之廉々各管下公立病院之見込經驗等取調來ル十一年一月中差出候様可取計尤此節ノミニ不限今後病理療法及病死體解剖等新ニ見込之論說有之候ハ、其時々可申出旨豫テ相達置可申此旨相達候事

脚氣病取調之目

- 一病症
- 一病因
- 一療法
- 一經驗之レナキモノハ此一項ヲ除ク
- 一病體解剖說同斷
- 以上

第廿項 家畜傳染病

○内務省 乙第二十號 明治九年二月廿九日

府縣

傳染牛疫豫防ノ儀去明治四年六月七日太政官公布ノ趣モ有之候處近年内地ニ流行シ既
 ニ明治六年ヨリ七年ニ至ル迄牛疫ニ罹リ斃ル、モノ全國四萬二千餘頭ニ及ヒ農業ヲ妨碍シ
 牧畜ノ進路ヲ遮斷スル等巨害枚擧スルニ暇アラス元來右傳染牛疫ノ儀ハ歐洲諸邦ニ於テ屢
 流行シ慘毒無量結局難治ノ症ニシテ甚シキハ殆ト一國ノ健牛ヲ蕩盡スルニ立至候儀モ往々
 有之候處未彼地ニ於テモ治療ノ方法不相立到底之ヲ左右スルモ徒費徒勞ニ屬シ還テ人手ヨ
 リ他ニ傳ラルノ實害アルニ付速ニ患牛ヲ撲殺シ傳染ノ原根ヲ斷テ健牛ヲ豫防スルヲ以テ古
 今良醫ノ定論トスル處ニ付右牛疫ノ徵候有之節ハ斷然牛主共ニ於テ撲殺スルハ當然ノ事ニ
 候得共一時姑息ノ情ヨリシテ因循時機ヲ失ヒ終ニ疫毒蔓延候テハ不容易儀ニ付特別ノ詮議
 ナリテ賠償撲殺法取設候條別紙疫牛處分假條例ニ照準シ以來各府縣ニ於テ精密其徵候ヲ探
 偵シ牛疫ノ疑アラハ牛價ヲ其主ニ償與シ速ニ之ヲ撲殺シ疫毒ノ源根ヲ滅却候様取計可申尤
 照會ノ爲メ牛病新書并疫牛容體書下渡候條篤ト照準夫々處分方厚注意尙管内人民ニモ告諭

第廿項 家畜傳染病

可致此旨相達候事

二十ノ二

疫牛處分假條例

第一條 人民飼立ノ牛疾病アルキハ其牛主ニ於テハ兼テ管轄廳ヨリ告示スル所ノ醫ニ請フテ診察セシメ若シ牛疫ノ徵候アラハ直ニ之ヲ區戸長ニ届出區戸長ヨリハ速ニ其旨管轄廳ニ届出ツヘシ

但醫員懸隔ノ地等ニ於テ之ヲ迎フルノ際既ニ牛疫ノ徵候アルキハ直ニ區戸長ニ届出ツヘシ

第二條 管轄廳ニ於テハ區戸長ヨリノ具狀ニヨリ速ニ官員ヲ派出セシメ検査ノ上疑アルモノハ病ノ輕重ヲ不問直ニ之ヲ撲殺シ其他ハ專ラ豫防法ヲ行フヘシ

第三條 牛疫感染ノ牛ヲ撲殺スルキハ相當ノ代價ヲ其主ニ下渡スヘシ故ニ所有主ニ於テ之ヲ拒ムヘカラス

但牛價ハ其品位ニ依リ相當支給スヘシト雖モ必一頭ニ付金三十圓ヲ超ユヘカラス

第四條 牛疫發見セハ直ニ管内ニ布達シ及勸業寮并接近ノ地方廳ヘモ之ヲ通知スヘシ

第五條 牛疫發見シタルキハ其場處ヨリ凡方二里以内ノ地ヲ限リ直ニ道筋ニ標札ヲ建テ病牛ハ勿論健牛ト雖モ右限外ニ出ルコトヲ禁シ又他ヨリ限内ニ入ルコトヲ禁スヘシ假令病根全ク滅却ノ後タリモ尙三ヶ月ヲ經サレハ其出入ヲ許スヘカラス尤四方十里以内畜牛無之場ニ往復或ハ移轉スルハ此限ニ非ス

但標札文面及寸方等ハ其地方ノ適宜ニ任スヘシ尤右費用ハ府縣稅ノ内ヨリ支出スヘシ

(九年五月內務省乙第六十號ヲ以テ改正)

第六條 牛疫起發ノ地ハ直ニ巡查ヲ派出シ該病ニ係ル諸般ノ取締ヲ爲サシムヘシ

第七條 牛病新書及疫牛容體書一府縣ニ付廿部宛下渡スヘキニ付各管内適宜ノ地ニ於テ相當ノ醫生ヲ撰ミ右書類ヲ下渡シ豫メ講習セシメ牛病ノ診斷ヲナサシムヘシ且該醫ノ住所姓名ハ管内ニ告示スヘシ

但醫員手當金ノ儀ハ昨八年四月太政官第四拾九號(十四年四月廢止)公布第二條ニ準據シ其時々豫備金ヲ以テ支給致置三ヶ月分取纏メ大藏省ニ請取方申立ヘシ(乙第六十號但書退

加)

二十ノ三

第八條 牛主へ償付スル金額ハ伺ニ不及豫備金ノ内ヲ以テ速ニ施行シ醫員ノ診斷書及牛主姓名頭數年齡金額等詳細取調書相添其時々當省へ届出ヘシ

但金員受取方ノ儀ハ三ヶ月分取束ヲ大藏省へ申立ヘシ(十一年三月内務省乙第九號ヲ以テ改正)

第九條 疫病ニ斃レ或ハ撲殺シタル牛ノ遺骸ハ辛未年ノ公布ニ照準シ燒棄スルハ勿論ナリト雖モ其地方ノ便適ニヨリ一丈二尺ノ地下ニ埋没スルモ妨ナシトス

但撲殺燒棄埋没等ノ費用ハ所有主ノ自費タルヘシ(乙第六十號及九年八月内務省乙第九十四號ヲ以テ改正)

第十條 第五條中健牛ノ他ヨリ限内ニ入ルヲ禁スルト雖モ各開港場等外國人在留ノ地ニ於テ目下食料ニ欠乏スルカ如キハ嚴重檢査ノ上屠牛ニ限リ此例ニ非ラス(乙第六十號追加)

第十一條 隣府縣接比ノ村落ヨリ牛疫發起スルキハ該廳ト協議シ管轄ノ内外ニ關セス限内ヲ定ムヘシ(乙第六十號追加)

茲ニ紀元千八百六十五年英國ニ於テ牛疫流行ノ際同國家畜醫ノ中最卓越ナル博士シモンズ

氏ヲシテ書セシムル所ノ左ノ説ヲ以テ議員之ヲ公論トセシナリ

牛大ニ沈鬱シテ活潑ナラス食ヲ反芻スルヲ止メ頻リニ戰慄シ行步蹣跚タリ寒甚シ呼吸促迫シテ頭ヲ低レ眼球紅色ヲ潮シテ涕液ヲ流セリ鼻孔ヨリ粘液ヲ生シ内脣及上顎ニ於テ生色ナルモノヲ碁布シテ且下痢アリ

ポーランド國ノ學士セーマン氏ノ説左ノ如シ

牛ノ食物缺乏反芻ヲ止メ鬱悶シテ口中並小牙ヨリ粘液ヲ生シ且小瘡ヲ發シ臭氣ヲ放テテ爾餘眼鼻ヨリ粘液ヲ泄シ次テ臭氣アル下痢ヲ下シ咳嗽シ漸次衰弱シテ偶躑躅シ頭ヲ一方ニ屈メテ斃死ス

博士レーヤド氏カ疫病傳染ノ性ニツイテ著ハス所ノ書中ニ述ヘタル左ノ説ハ千七百五十七年ニ公告セリ

此傳染疫ノ初徴ハ食欲減少シ頭ヲ伸シ嚙下スルニ困難耳ニ痒ヲ覺ユル如ク搖シテ又垂レリ眼暗濁ナリ怠慢ニシテ運動ヲ好マス爾後全ク食欲ヲ絶ス眼鼻ヨリ膿様ノ液ヲ泄シ常リ下痢シ上顎及口槍ニ於テ結膿シ多ク夕時ニ在テ呻吟シテ横臥セリ

因テ今茲ニ當牧羊場第一區ノ兩國沖ニ於テ斃牛ノ徵候如何アリシヲ陳ス可シ

牛ノ食欲缺乏シ反芻ヲ止メ頭及耳ヲ垂レ間歇厥冷戰慄シ下痢ヲ生シ咳嗽シ呼吸促進ス眼鼻ヨリ粘液ヲ泄シ初メ眼ヨリ出タル液ハ全ク稀薄ナレモ病長スルニ及テ次第ニ稠厚トナリ遂ニ膿狀ニ變セリ

眼球赤色ヲ潮シ鼻孔ヨリ粘液ヲ生シ臭氣ヲ放チ苦臭アル大便ヲ下ス頻リニ嚙齧シ病長スルニ及テ呼吸益窘迫セリ病牛ノ内前ニ記載スル學士ローヤド氏カ述ル説ノ如ク頭ヲ伸セシ徵候アルヲ注目セリ而シテ專ラ博士シモンツ氏カ説ノ如ク行歩踉蹌タリ亦咳嗽嚙齧スルトガイランド國ノ學士カ説ト同一タリ如斯全ク病期ヲ終テ熱ノ下級ニ在ルヲ徵ス

○内務省 乙第廿四號 九年三月七日

府縣

今般傳染牛疫處分條例相達候處尙別紙之通豫防法并斃死後處置相達候條篤ト管内人民へ諭達可致此旨相達候事

傳染牛疫豫防法并斃死後處置

一若シ一戸ニ傳染牛疫ノ徵候發顯スルキハ疫牛處分假條例ヲ遵奉シ之ヲ撲殺シテ其死體ハ

速ニ一丈二尺ノ地下ニ埋没スルカ或ハ燒棄スルハ勿論傳染病ニ紛ハシキモノト雖モ直様其由ヲ近隣ニ知ラセ健牛ヲ所持スルモノト互ニ往來出入ス可カラス

一一戸數頭ノ牛ヲ畜養スルモノハ若シ一頭ノ牛々疫病ノ徵候アルキハ直ニ健牛ヲ他ノ牛類無之地へ引移スヘシ尤疫牛處分假條例ノ通其場所ヨリ凡方二里以内ノ地ヲ限リトス

一一地方ニ傳染病發起ノ聞ヘアレハ一層注意廐舎ヲ清淨ニシ寐藁ナド度々取替ヘ濕氣ヲ乾カシ空氣ノ流通ヲ能クスルトテ怠ルヘカラス且左ノ藥劑ヲ時々廐内ニ散布スヘシ

一石炭酸水 石炭酸二勺水一升五合位

又ハ 一鹽酸カルキ水 鹽酸カルキ一合水一升五合位

右ノ藥品ニ乏シキ地ニテハ生石灰ヲ散布スヘシ

一飼料ハ和カニシテ消化シ易キ物ヲ與フヘシ

但燕麥粉ノ得易キ地ニテハ常食ニ與フルヲ最良トス

一千草ハ鹽水ヲ振リ掛ケ潤シ與フヘシ

但多分ノ青草ヲ與フルハ下痢ヲ醸ス恐アレハ加減スヘシ

斃死後處置

一傳染病ト覺敷症ニテ斃ル、モノアラハ廐舎ノ内外ヲ能ク洗ヒ硫黃一斤ヲ薫シ石炭酸水ヲ散布シテ臭氣ヲ去ラシムヘシ尤病牛ノ糞尿其外治療ニ用タル一切ノ物品ハ深ク土中ニ埋ムルカ又ハ硫黃ヲ散布シテ焼捨ツヘシ

一病牛ヲ取扱タル人ハ衣服ヲ取換ヘ身體ヲ清淨ニシ一周間ヲ經サレハ健牛ニ近ツクヘカラ

一總テ斃牛ヲ取扱タル場所ヘハ石炭酸水ヲ散布スヘシ生石灰ニテモヨシ

一傳染病牛斃死シ廐舎ヘハ六ヶ月ヲ經サレハ健牛ヲ繫シヘカラス

（以下は非常に淡く、ほとんど不可読な文字列が並んでいる）

追加

○農商務省 乙第十一號 十四年十一月廿八日

府縣

九年内務省乙第六十號達疫牛處分假條例第七條但書追加左之通改正候條此旨相達候事

但醫員ノ手當ハ一ヶ月ヲ十五圓以内ヲ以テ勤日數ニ應シ旅費ハ定則日當表五等府縣管

内旅費ヲ支給スヘシ

第廿一項 病院

○内務省 乙第四十三號 明治九年三月三十一日

府縣

病院名稱區々相成候テハ不都合候條官立病院 陸軍省文部省警視廳等全ク國稅ノミヨ以 公立 病院 地方區畫ノ民費ヲ以テ設立スルモノ又ハ全ク府縣稅ヲ以テ設立スルモノ及府縣稅ノ以 私立病院 費人 或ハ幾分ヲ扶助スルモノ並管内人民ノ獻金穀ヲ以テ府縣廳ニテ設立スルモノ等 準シ公立病院ハ當省へ經伺ノ上處分スヘシ私立病院ハ該管廳限開届其都度届出候様可致此 旨相達候事

但公立病院長ノ進退給料増減等ハ其時々當省衛生局へ開申可致事

公立病院設立伺書式 料紙美濃紙正副 三通ヲ出スヘシ

私立病院設立願書式 料紙美濃紙三通 出サシメ一ハ

指令シ一ハ該廳ニ留メ一ハ添 書シテ内務省ニ届出ヘシ

一病院位置

第何大區何小區何國何郡何村何番地

一私立病院位置

第何大區何小區何國何郡何村何番地或 何某居宅何々病院ト唱フ

一名稱

公立何々病院

何某居宅何々病院ト唱フ

第廿二項 病院

廿一ノ一

一院則

患者診察ノ手續入院料藥價診察料差等ノ類

一教則

醫學生徒教場ヲ附屬スルモノハ教科ノ

品目順序等

一院長以下醫員履歷

一院長以下醫員給料

每一人 一ヶ月 金何程 一ケ年 金何程

一病院費用

書籍器械等入費 一ヶ月 金何程 一ケ年 金何程

營繕入費並諸雜費 一ヶ月 金何程 一ケ年 金何程

雇人給料 一ヶ月 金何程 一ケ年 金何程

一院則

一院長以下醫員履歷

以上二項公立病院ノ例ニ準スヘシ

一醫員給料

一ヶ月 金何程 一ケ年 金何程

一人或ハ數人ノ醫師結社設立ニテ給

料ヲ不定モノハ記スルニ及ハス

一病院費用

一ヶ月 出納ノ見積概略 一ケ年

右之通設立仕度此段奉願候也

年號月日 何府華族平民 何縣士族平民

醫師或ハ何業何職

苗字名印

或ハ結社人

苗字名印

區戸長或ハ

苗字名印

醫務取締

何府知事 何縣令 參事何某殿

年號月日 何府知事 何縣令 參事何某

內務卿何某殿

〔府縣伺〕

右之通設立仕度此段相伺候也

右費用總計 一ヶ月 何程 此内民費賦課金何

程有志獻金凡何程收入金何程 府縣稅何程ヲ

以テ出納遣拂ノ積等云々

一十二年大藏省乙第五號ヲ以テ郡區長郡區書記ハ他ノ官吏ヨリ轉任亦ハ他ノ官吏ヘ轉任

ノ節月俸並滿年賜金支給方ノ儀御達相成候處公立病院醫員教師及公立師範學校教師或

ハ校長等ヲ官吏並郡長郡書記ニ採用スルモ又官俸ヲ受クル諸雇等ヲ右學校長又ハ病院

醫員教師ヘ轉勤セシムルモ月俸支給方ノ儀ハ前職身分取扱上異リ候故御達ニ依ラス其

月十五日前後ヲ區分打切支給取計可然哉右病院學校諸職員ハ郡區吏同様地方稅ヲ以テ

月俸支給候モノニ付云々〔千葉縣〕

(會計検査院指令) 客歳大藏省乙第五號達ニ照準支給可致事 十二年十月二十八日

一 公私立病院免許ノ手續ヲ成サス醫師自宅ニ於テ某醫院或ハ病院ト掲標候者ハ禁止致不苦哉(千葉縣)

(指令) 免許ノ手續ヲ爲サス私立病院或ハ醫院ヲ設立致居候者ハ更ニ願出サセ本年當省乙第四十三號達ニ照準可取計儀ト可相心得事 九年十月二日

一 管下海西郡従前醫山田良順儀私立病院設立願出候然ルニ院長壹人御省免許醫ニシテ其他診察醫ハ従前醫ニモ無之師家ニ付醫術ヲ研究セシ而已ニシテ醫ノ名義下シ難キ者ニ有之候得共院長一人免許証有之ニ於テハ其補助ト見做シ右設立開届不苦候哉(愛知縣)

(指令) 開業允可ヲ受サル者診察醫トシ院長ヲ補助候ハ不届儀ト可心得事 十三年八月廿日

一 私立病院設立願出候節ハ乙第四十三號達ニ據リ院長以下履歴取調院長ハ御省ノ開業免狀所持又ハ縣限免許之者ニ限リ其他備入ノ醫員ハ免狀有無ニ不拘院長ノ助手ト見做シ候儀ト心得候得共該私立病院ニ於テ分院或ハ出張所ヲ遠隔地ニ設ケ御省ノ免狀ハ勿論縣限免狀ヲモ所持セサル者ノミ備入院長ハ本院長(免狀所持ノ者)ニ於テ兼務候旨申出

候向モ有之右ハ表面ニ於テハ別段差支無之者ノ如ク相見ヘ候得共其實院長日々出張診療スル等ノ如キハ自然行届兼候義モ可有之然ル時ハ代診ヲ名トシ其分院従事ノ醫員ヲシテ(免許狀所持セサルモノ)專斷治療セシムルノ弊害ヲ惹起シ醫事取締上ノ障害不少就テハ假令本院長ノ兼務スルモ分院或ハ出張所ニ従事スル醫員ノ中開業免許ヲ得テ院長ノ代理ヲ爲スヘキ者無之時ハ本院ト距離ノ遠近ニ不拘願意許可セサルモ不苦哉(山梨縣)

(指令) 開業允可ヲ受サル者ヲシテ院長ヲ補助セシメ候儀ハ本院分院ト問ハス届届サル儀ト可相心得候事 十四年四月十八日

一 管下上総國茂原驛ニ於テ中嶋玄清外二名共同結社私立病院設立名稱ノ義ハ共立茂原病院ト唱度旨願出候右ハ設立ノ方法院則等總テ私立ノ體裁ニ有之候得共隆盛ノ后ハ衆醫ヲ集會シ治療或ハ衛生ノ事項ヲ協議シ廣ク人民ノ幸福ヲ可謀場合モ有之ニ付共立ノ名義ヲ附シ度主旨ニ付名稱ノ異ナルモ私立ノ性質ヲ失ハサル以上ハ差支有之間敷哉(千葉縣)

(指令) 乙第四十三號達ノ外種別ヲ設クルハ不相成儀ト可心得事 十三年十一月九日

一牛馬病院私立ノ義出願ノ者有之願之通許可致不苦候哉(和歌山縣)

(指令) 人民相互ニ任セ別段爲伺出ニ不及儀ト可心得事 十二年十二月十五日

一管下公立病院長以下醫員身分ノ儀ハ是迄適宜取扱居候處公立病院ノ儀ハ醫術ニ關スル試験ハ勿論衛生ノ事務爲取扱 云々ニ付身分取扱方確定仕置度右ハ院長以下當直醫以上ノ者ハ都テ判任官ニ準シ取扱仕度云々(靜岡縣)

(指令) 雜聞届儀ト可心得事 同十一月廿一日

一八年文部省報告第三十三號「衛生ノ事項(病院設立醫術開業藥品検査ノ類)ハ内務省ニ屬シ醫學ノ事項(醫學校設立ノ類)ハ文部省ニ屬シ」云々ト有之乙第四十二號達公立病院設立伺書式中醫學教則ノ條有之然ルキハ公立病院ニ於テ醫學ヲ附屬シ生徒ヲ教授スル儀兩省ノ内何レヘ伺出可然哉(鹿島縣)

(内務文部兩卿指令) 兩省宛可伺出儀ト可心得事 同十二月九日

第廿二項 救療寄附

○太政官 第三十號 明治十四年四月十九日

府縣

明治八年^四月第四十九號達廢止候條流行病ノ節貧民救療ニ係ル費用ハ明治十四年度以降地方稅中衛生費ヲ以テ支辨可致此旨相達候事

但流行ノ勢盛ナルキハ時機ニヨリ官費支給スルコトアルヘシ

〔参考〕

○太政官 布達 四年六月十七日

行旅ノ輩病氣等ノ節取扱方ノ儀退テ御規則被 仰出候迄従前ノ仕來ニ基キ別紙ノ通被相定候條此旨可心得事

規則

一旅人并旅稼ノ者若シ病氣等ニテ進退難相成候ハ、所役人申談其所ニ止宿セシメ醫療手差加鑑札見改其筋へ相届且其者在所等へノ文通其他相當ノ用辨ハ取計可違勿論路用ノ有無ヲ以テ不實ノ扱方致問敷事

第廿二項 救療寄附

一病人若シ路用ノ貯無之其在所等へ送届方相頼候ハ、人體病狀并道程ノ遠近等見計聞届尤書付爲差出其戸長役場ノ添狀ヲ受ケ宿村送リヲ以テ可達遣萬一送届候上其村町ノ者ニ無之僞リノ所業有之候ハ、不取道様手當致其筋へ可申立事(十一年十二月太政官第五十五號公達ヲ以テ改正)

一病人死去致候ハ、其筋へ申立死骸見分ノ上最寄寺院ニ假埋致シ立合候者共連印證書ヲ以テ其村所へ及掛合理葬ノ始末追テ可相届候事

但道心者ノ類其死去ノ處ニ葬吳候様頼狀所持致候ハ、埋葬ノ上其筋へ相届其村町へモ可申達又倒死人鑑札所持ノ者ハ本文ノ通取計鑑札無之者ハ本文ニ準シ取計三十日ノ間往還筋へ建札致申出ノ者無之候ハ、埋葬致同様可相届事(以下略ス)

○内務省 乙第五十號 十年五月九日

府縣

原籍不分明ノ行旅病死倒死人變死人等埋葬入費ノ儀ニ付明治八年當省乙第百五十八號同九年乙第七號並乙第五十號ヲ以テ相達置候處詮議ノ次第有之取消候條以後右ノ類ハ辛未六月十七日公布行旅ノ輩病氣等ノ節取扱方規則第三條ノ通相心得本年七月以後ハ每半年

分ツ、取纏メ別紙雛形ニ照準取調^{一月}限可届出此旨相達候事

但費金ハ定額常費ヲ以テ可仕拂事

雛形

明治 年前(後)半年何 ^{府縣} 管内無籍病死倒死人等埋葬費表		人 員	男	女	費 金
病 死 人					
倒 死 人					
溺 死 人					
縊 死 人					
變、死 人					
合 計					

○内務省 甲第廿四號 七年九月廿日

自今府縣遞送人途中逃亡又ハ病死等致候者其他行旅病人倒死人變死人等ノ諸入費總テ有籍者ハ其家元ヨリ償却爲致無籍者ハ官費ニ可相立此旨布達候事

但家元ヨリ償却方其家貧窮或ハ斷滅ニテ償費相成兼候ハ、父子兄弟ノ内ヨリ可相償若シ父子兄弟無之歟又ハ有之厄貧窮等ニテ償費行届兼候ハ、其地方區内割ニ可取計其他從前布令ノ通可相心得事

○内務省 乙第百廿三號 八年九月廿五日

府縣

昨七年七月中甲第廿四號當省布達ノ内倒死或ハ變死セシモノ若シ所持ノ遺金并品物等有之候ハ、有籍者ハ其家元ニ下附シ無籍者ハ埋葬其他ノ費用ニ供セシ上尙餘贏アラハ地方廳へ爲納窮民救助或ハ病院費用等ノ内へ仕拂其旨可届出事
但品物賣拂金ニ換へ費用ニ充ル如キハ同様可相心得事

○太政官 第三十八號 十二年十月九日

使府縣

旅行免狀ヲ所持スル外國人旅行ノ節疾病其他不得止事故アルハ旅籠渡世ノ者ニ無之ハ一時宿泊セシムルモ不苦尤同時ニ必其事故ヲ詳記シ戸長役場へ可爲届出若シ滞留數日ニ

及フキハ七日毎ニ爲届候様可致此旨相達候事

○太政官 第八十九號 十年十二月一日

省使府縣

流行病豫防救治ノ爲メ諸官廳於テ該事ニ服從セシムル雇ノ醫師檢疫委員並地方公立病院醫師其他從事ノ者該病毒ニ感染及死亡候節ハ本年ヨリ左ノ規則ニ照準シ處分可致此旨相達候事
但本文手當金ノ儀省使ハ經費金ノ内府縣ハ豫備金ノ内ヲ以テ操替仕拂置退テ大藏省へ受取方可申出事

流行病豫防救濟ニ備使スル醫師以下感染及死亡手當規則

第一條 凡流行病アル節諸官廳ニ於テ豫防救治ノ方法ヲ施行スル爲メ備使スル醫師檢疫委員官員ニテ委員トナルモノハ此限ニアラス 看護人並地方公立病院醫師其他人夫等該病毒ニ感染及死亡スルモノハ此規則ニ照シ手當金ヲ給スヘシ

第二條 手當金ヲ分テ療養埋葬及遺族扶助ノ三種八等トナシ病者ハ療治料ヲ給シ死者ハ埋葬及扶助料ヲ給スヘシ

第三條 手當金ノ差等ハ其月給ノ多寡ニ因リ之ヲ定ム則二百圓以上百五十圓以上百圓以上

七十圓以上五十圓以上廿圓以上十圓以上十圓未満トナシ等級ニ應シ支給スヘシ

但日給ノ者ハ一ヶ月ヲ平均三十日ト看做シ該日數ヲ乘シテ本條月給ノ等差ニ準スヘシ

第四條 療治料ハ自宅ニ於テ治療スルモノニ一日ニ付一圓ヲ給シ其官公立病院ニ入ルモノ

ハ適宜官費ヲ以テ支給スヘシ

第五條 遺族扶助料ハ戸主ニシテ家族ナキ者及戸主ニアラスシテ妻子ナキ者ハ給セス尤死

者戸主ニアラス且妻子ナキ者ト雖モ其死者ニ依リ活計ヲ營ミ來ル遺族 一戸籍内ニアルモノ

ハ之ヲ給スヘシ

第六條 埋葬料ヲ給スルニ獨身ニシテ親戚ナキ者ハ病院或ハ同僚或ハ區戸長ニ下付スヘシ

第七條 流行病ノ節雇入ル、醫師ノ月給ハ明治八年第四十九號(廢止公達上ニ見ユ)達ノ通

タルヘシト雖モ現ニ十五圓以上ノ給料ヲ以テ使府縣公立病院ニ從事スル醫師ヲ臨時該流

行病ノ治療ニ任スルモノ並虎列刺病ノ節十五圓以上ヲ以テ雇タル檢疫委員ハ此規則ノ表

面ニ照シテ給スヘシ

手當衣

月給	等級	療治料	埋葬料	扶助料
二百圓以上	一等	一日ニ付一圓	五十圓	二百五十圓
百五十圓以上	二等	同	四十圓	二百圓
百圓以上	三等	同	三十五圓	百五十圓
七十圓以上	四等	同	三十圓	百廿五圓
五十圓以上	五等	同	廿五圓	百圓
廿圓以上	六等	同	廿圓	八十圓
十圓以上	七等	同	十五圓	六十圓
十圓未満	八等	同	十圓	四十圓

〔府縣伺〕

一規則第一條流行病アル節云々官員ニテ委員トナルトアリ若シ委員タル官吏職務ノ爲メ

該病ニ感染及死亡候節ハ臨時ノ具狀ニ依リ相當ノ手當金支給可相成哉(大分縣)

廿二ノ八

(指令) 詮議ノ上相當ノ手當下附可致候條其時々可伺出儀ト可相心得事 十二年六月十日

一療治料支給日限ハ惡疫感染當日ヨリ起算シ該病經過即症候全ク消退シ輕快ニ到ル日迄給與可致儀トハ存候得共間ニハ本症既ニ治癒スト雖モ之カ爲メニ衰弱ニ陥リ加療時日久ニ彌リ或ハ續發症ヲ誘起シ遷延治セス或ハ本症已ニ治スルモ傍發合併ノ症候猶癒エス全治ノ時日數十日ヲ經テ快復届出候者有之右ハ如何心得可然哉(愛媛縣)

(指令) 療治料給與ノ儀ハ本症消退ノ期ニ止メ候儀ト可相心得事 十三年五月一日

一非職ノ輩有志ヲ以テ豫防檢疫ノ事ニ一身ヲ抛テ日夜奔馳患者死者ニ直接排泄物ノ掃除火葬埋葬等危険ノ事ニ盡力不幸ニシテ感染死亡候節ハ遺族へ手當金御給與可相成哉

(岡山縣)

(指令) 其職ニ非サル者へ手當金給與ノ儀難聞届候事 同五月廿日

一流行病豫防ニ備役スル醫師以下病毒ニ感染及死亡候節手當金給與ノ儀ハ第八十九號公達有之候處町村ノ協議費又ハ地方稅ヲ以テ醫師以下看護人等ヲ備使スル場合病毒ニ感染若クハ死亡候節ハ臨時ノ具狀ニ依リ相當ノ手當金御給與可相成哉(大分縣)

(指令) 豫メ指令ニ難及儀ト可相心得事 同十一月廿六日

○内務省 乙第六號 十一年一月三十一日

府縣

虎列刺病流行之節豫防救治ノ爲メ專テ患者ニ直接シタル職務ニ服事シ危險ヲ冒シ晝夜ノ別ナク拔群勵精候者ハ詮議ノ上特旨ヲ以テ賞譽相成候條左ノ箇條ニ照準詳細具狀可致此旨相達候事

一患者へ直接シタル職務勉勵超衆拔群ノ廉例之ハ該病治療ノ爲メ何所避病院詰申付日數何十日間患者何百何十人ヲ治療シ晝夜勉勵或ハ兼テ其近接ノ地何大區何小區内出診治療或ハ檢疫醫員申付何所へ出張該病アル船舶及人家へ立入検査并病者死者ノ運搬ヲ監察シ或ハ避病院ニ於テ何百何十人ノ患者ヲ看護シ排泄物ノ掃除消毒法ノ施行其宜キヲ得或ハ病死何十人ヲ取扱ヒ其消毒法ヲ施シ或ハ病毒汚染ノ物品及排泄物運搬燒棄ノ事務ヲ擔當シ或ハ埋葬火葬ヲ取扱フノ類其勤勞苦辛他ノ勉勵者ト同視スヘカラサル行爲ノ事實詳細

一官員警部巡查ハ官名出仕ノ等級姓名病院醫員ハ院長副長以下ヲ別テ一時雇ノ檢疫委員醫

廿二ノ九